

大宰府史跡発掘調査報告書 IX

平成26・27年度



2016

九州歴史資料館

大宰府史跡発掘調査報告書 IX

平成26・27年度

2016

九州歴史資料館



(1) 大野城跡第5-3次調査地全景（北から）



(2) 大野城跡第54-2次調査城門部（北東から）



(1) 大野城跡第54-2次調査出土軒丸瓦当面



(2) 大野城跡第54-2次調査出土軒丸瓦背面

序

本書は、大宰府史跡第9次5ヶ年計画第3・4年次の計画調査として、平成26年度及び27年度に実施した大宰府史跡の発掘調査についての報告書です。

当館では、平成21年度から大宰府政庁跡の西隣の蔵司丘陵において、蔵司地区官衙の構造解明を目的とした計画調査を実施しています。平成21年度から25年度までは確認調査を進め、その成果をもとに平成26年度から重点調査を開始しています。重点調査では新たな建物群も見つかり、瓦や土器、被熱鉄製品など多様な遺物も出土しています。そうした調査成果については、今後の正式報告書で報告していきたいと思えます。

大宰府史跡に関する調査では、来木・蔵司・広丸地区など大宰府政庁周辺官衙跡での調査があり、遺跡の広がりや旧地形などを復元する上で有益な情報を得ることができました。また、観世音寺子院跡の調査も少しずつ進んでおり、山麓部に展開する子院跡の解明に向けた情報が蓄積されています。

一方、大野城跡ではクロガネ岩城門跡の調査成果を報告します。クロガネ岩城門では城門や周辺の土塁部の構造を確認することができ、百済系単弁蓮華文軒丸瓦が出土するなど城門の年代を考える上でも重要な手掛かりを得ることができました。併せて、環境整備事業に伴う増長天地区礎石群の調査についても、概要を報告します。

平成27年（2015）は大野城築城1350年の節目でしたが、本書が今後の大野城研究をさらに発展させる一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりましては、大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁、大宰府市教育委員会、宇美町教育委員会、さらに地元の関係者各位から多大な御指導と御協力を頂きました。記して、深く感謝致します。

平成28年3月31日

九州歴史資料館
館長 杉光 誠

例 言

- 1 本書は、平成 26 年度及び 27 年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け、九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の年次報告書、大宰府史跡発掘調査報告書の第 9 集にあたる。
- 2 本書には、来木・蔵司地区の緊急調査として実施した第 221 次調査、広丸地区の緊急調査として実施した第 224 次調査、史跡観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡の緊急調査として実施した第 226・227・229 次調査を掲載している。

また、大野城跡クロガネ岩城門の確認調査として実施した第 54 - 2 次調査、及び増長天地区礎石群で環境整備事業に伴う確認調査を実施した第 5 - 3 次調査の概要についても掲載している。

なお、蔵司地区の計画調査として実施した大宰府史跡第 212・220・225・228 次調査については、現在調査中であるため今後改めて報告を行う。
- 3 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。
- 4 本書掲載の遺構実測図は、杉原敏之・小澤佳憲・下原幸裕・岡田諭・小嶋篤・佐々木華子が作成した。
- 5 本書掲載の写真のうち、遺構は小澤・下原・岡田・小嶋が、遺物は北岡真一が撮影したものである。
- 6 出土遺物の実測は下原が行った。出土遺物の整理・復元作業は、発掘調査事務所において市川千香枝・中田千枝子・堤直美が行った。
- 7 本書掲載図面の浄書は、小澤・大庭孝夫・下原・高田いく子が行った。
- 8 本書の執筆は下原が行った。
- 9 本書の編集は、岡田の協力を得て、下原が行った。

目次

	頁
I 緒言	1
1. 調査計画と組織	1
2. 調査の経過と概要	3
II 大宰府史跡の確認調査	9
1. 第 221 次調査（来木・葺司地区の確認調査）	9
2. 第 224 次調査（広丸地区の確認調査）	13
3. 第 226 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）	15
4. 第 227 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）	17
5. 第 229 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）	18
III 大野城跡の確認調査	19
1. 第 54 - 2 次調査（クロガネ岩城門の確認調査）	19
2. 第 5 - 3 次調査（増長天地区礎石群の確認調査）	38

Fig. 目次

	頁
Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地周辺図 (1/30,000)	8
Fig. 2 大宰府史跡発掘調査地域図 (1/5,000)	折込
Fig. 3 第221次調査地位置図 (1/1,000)	9
Fig. 4 第221次調査トレンチ実測図 (1/60)	10
Fig. 5 第221次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)	11
Fig. 6 調査地付近の旧河道推定図 (1/6,000)	12
Fig. 7 第224次調査地位置図 (1/400)	13
Fig. 8 第224次調査トレンチ・土層略測図 (1/60)	13
Fig. 9 第224次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)	14
Fig. 10 第226次調査地位置図 (1/400)	16
Fig. 11 第226次調査土層模式図 (1/40)	16
Fig. 12 第227次調査地位置図 (1/400)	17
Fig. 13 第227次調査土層模式図 (1/40)	17
Fig. 14 第229次調査地位置図 (1/400)	18
Fig. 15 第229次調査土層略測図 (1/60)	18
Fig. 16 大野城跡全体図 (1/10,000)	20
Fig. 17 クロガネ岩城門周辺地形測量図 (1/500)	21
Fig. 18 第54-2次調査トレンチ配置図 (1/200)	23
Fig. 19 1~4トレンチ実測図 (1/60)	25
Fig. 20 3・4トレンチ実測図 (1/60)	27
Fig. 21 5・6・8・8-2トレンチ実測図 (1/60)	29
Fig. 22 9・10トレンチ実測図 (1/60)	30
Fig. 23 11・12トレンチ実測図 (1/60)	31
Fig. 24 第54-2次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)	32
Fig. 25 城門・土塁断面復元図及び唐居敷推定復元図 (1/60・1/200)	34
Fig. 26 クロガネ岩城門周辺の構造 (1/500)	36
Fig. 27 大野城跡出土軒丸瓦型式 (1/8)	37
Fig. 28 第5次調査遺構配置図 (1/300)	39
Fig. 29 礎石建物SB0401実測図 (1/100)	41
Fig. 30 礎石建物SB0402実測図 (1/100)	43
Fig. 31 礎石建物SB0403実測図 (1/100)	44
Fig. 32 礎石建物SB0404実測図 (1/100)	45
Fig. 33 主要トレンチ土層実測図 (1/60)	46

Tab. 目次

	頁
Tab. 1 平成 26 年度調査計画表	1
Tab. 2 平成 27 年度調査計画表	2
Tab. 3 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧 (平成 26 年度)	3
Tab. 4 大宰府史跡現状変更申請対応状況表	6
Tab. 5 大宰府史跡発掘調査実施表	7
Tab. 6 報告書掲載遺構一覧	48
Tab. 7 報告書掲載遺物一覧	48

PL. 目次

巻頭 PL. 1	(1) 大野城跡第 5 - 3 次調査地全景 (北から)
	(2) 大野城跡第 54 - 2 次調査城門部 (北東から)
巻頭 PL. 2	(1) 大野城跡第 54 - 2 次調査出土軒丸瓦瓦当面
	(2) 大野城跡第 54 - 2 次調査出土軒丸瓦瓦背面
PL. 1	(1) 第 221 次調査前状況 (東から) (2) 第 221 次調査 a トレンチ (東から)
	(3) 第 221 次調査 b トレンチ (東から)
PL. 2	(1) 第 224 次調査 1 トレンチ (東から) (2) 第 224 次調査 1 トレンチ土層 (南から)
	(3) 第 224 次調査 2 トレンチ (東から)
PL. 3	(1) 第 224 次調査 2 トレンチ土層 (南から) (2) 第 226 次 1 トレンチ (南西から)
	(3) 第 226 次調査 2 トレンチ (南西から)
PL. 4	(1) 第 227 次調査 1 トレンチ (南から) (2) 第 227 次調査 2 トレンチ (北から)
	(3) 第 229 次調査状況 (南西から)
PL. 5	(1) 第 54 - 2 次調査地周辺 (西から) (2) 第 54 - 2 次調査西側土塁部 (北から)
PL. 6	(1) 第 54 - 2 次調査城門部 (西から) (2) 第 54 - 2 次調査城門部 (北から)
PL. 7	(1) 3 トレンチ調査状況 (北から) (2) 4 トレンチ調査状況 (東から)
	(3) 4 トレンチ調査状況 (南から)
PL. 8	(1) 4 トレンチ軒丸瓦出土状況 (南東から) (2) 5 トレンチ調査状況 (北から)
	(3) 6 トレンチ調査状況 (北東から)
PL. 9	(1) 8 トレンチ調査状況 (南から) (2) 8 トレンチ土塁頂部調査状況 (東から)
	(3) 8 - 2 トレンチ調査状況 (南西から)
PL.10	(1) 9 トレンチ調査状況 (南から) (2) 10 トレンチ調査状況 (東から)
	(3) 11 トレンチ調査状況 (北から)
PL.11	(1) 12 トレンチ調査状況 (南から) (2) 12 トレンチ土塁部調査状況 (北から)
	(3) 12 トレンチ SK01 調査状況 (西から)
	(4) 第 54 - 2 次調査指導状況 (左: 小田富士雄委員長, 右: 笹山晴生元委員長)
PL.12	(1) 第 5 - 3 次 SBO401 全景 (南東から) (2) 第 5 - 3 次 SBO402 全景 (北東から)

- (3) 第5－3次 SB0403 全景（南東から）
- PL.13 (1) 2・4トレンチ調査状況（北西から） (2) 3トレンチ調査状況（西から）
(3) 6トレンチ調査状況（南から）
- PL.14 (1) 6トレンチ A－A' 土層（東南から） (2) 8・11トレンチ調査状況（西から）
(3) 13・14トレンチ調査状況（北西から）
- PL.15 大宰府史跡第 221 次調査出土遺物
- PL.16 (1) 大宰府史跡第 221 次調査出土遺物 (2) 大宰府史跡第 224 次調査出土遺物
(3) 大野城跡第 54－2 次調査出土遺物

凡 例

- 1 本書掲載の遺構配置図は、国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成している。
- 2 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。
SB：建物，SK：土坑，SX：その他
- 3 掲載図面中、土器の断面を黒塗りしたものは須恵器，内外面に網かけしたものは黒色土器及び丹塗り土器，断面に網をかけたものは瓦器であることを示す。
- 4 土師器・陶磁器・瓦等の報告においては、以下の文献の型式分類・名称等に準じる。
 - ・土師器：九州歴史資料館 1981『大宰府史跡 昭和 55 年度発掘調査概報』
 - ・黒色土器：田中琢 1967「古代・中世における手工業生産の発達（4）畿内」『日本の考古学』Ⅳ
 - ・陶磁器：森田勉・横田賢次郎 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館（文中では当分類を基本とする。）
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV』（文中では太宰府市分類と表記。補足的に使用。）
 - ・古代瓦：九州歴史資料館 2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』

I 緒 言

1 調査計画と組織

(1) 調査計画

平成 26 年度は、大宰府史跡発掘調査第 9 次 5 ケ年計画の 3 ケ年目にあたり、調査対象史跡を **平成26年度** 特別史跡大宰府跡に含まれる蔵司地区官衙跡とし、25 年度までの確認調査で得られた成果をもとに、蔵司地区官衙跡の構造解明を目的とした重点調査を、大型礎石建物 SB5000 のある D 地区において開始した。また、この他にも大野城跡では環境整備事業に基づき増長天地区礎石群の再発掘調査を実施し、大宰府政庁周辺官衙跡の広丸地区では住宅建設に先立ち確認調査を実施した。報告書については、平成 21 年度から大宰府政庁周辺官衙跡の本報告書を刊行しているが、平成 26 年度は『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅵ—不丁地区図版編—』及び『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅶ—大楠地区遺構編—』の 2 冊を刊行した。

大宰府史跡調査研究指導委員会は、平成 26 年 10 月 21・22 日に開催した。一日目は、平成 25 年度の大宰府史跡関係調査研究、大宰府関連遺跡調査の報告を行い、九州歴史資料館特別展「福岡の神仏の世界—九州北部に華開いた信仰と造形—」の見学、大宰府史跡第 225 次調査地（蔵司地区）及び水城跡第 58 次調査（JR 切り通し部）の現地視察を行った。二日目は、大宰府史跡の調査研究、大野城跡・水城跡の整備事業についての報告及び協議を行い、政庁周辺官衙跡の今後の調査・報告書作成等について貴重な指導、助言を賜り、調査計画については概ね承認を頂いた。なお、平成 26 年度の発掘調査計画は、次のとおりである。

Tab.1 平成26年度調査計画表 (面積：㎡)

区 分	場 所	所 在 地	面積	備 考
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目478,484-1・2	223.55	計画調査

平成 27 年度は、大宰府史跡発掘調査第 9 次 5 ケ年計画の 4 ケ年目にあたる。本年度も引き続き蔵司地区官衙跡における重点調査を実施した。調査は D 地区で実施していた第 225 次調査を継続して行うとともに、D 地区の南側に広がる平坦面の E 地区において第 228 次調査を行った。また、この他にも観世音寺子院跡における確認調査も実施した。報告書については、『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅷ—大楠地区遺物編—』と、『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅸ 平成 26・27 年度』（本書）の 2 冊を刊行した。 **平成27年度**

大宰府史跡調査研究指導委員会は、平成 27 年 10 月 29・30 日に開催した。一日目は、平成 26 年度の大宰府史跡関係調査研究、大宰府関連遺跡調査の報告を行い、九州歴史資料館特別展「四王寺山の 1350 年—大野城から祈りの山へ—」の見学、大宰府史跡第 225 次調査（蔵司地区）及び水城跡第 61 次調査の現地視察を行った。二日目は、蔵司地区官衙の調査、大野城跡・水城跡の整備事業についての報告・協議を行い、政庁周辺官衙跡の今後の調査・報告書作成等について貴重な指導・助言を賜り、調査計画については概ね承認を頂いた。なお、平成 27 年度の発掘調査計画は、次のとおりである。

Tab.2 平成27年度調査計画表

(面積：m²)

区分	場所	所在地	面積	備考
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目478,484-1・2	1,150	計画調査
蔵司官衙跡	政庁周辺官衙	太宰府市観世音寺3丁目478,484-1・2,486	1,359	計画調査

(2) 調査組織

調査の主体は九州歴史資料館であり、発掘調査及び報告書作成は学芸調査室調査研究班が担当した。本報告書作成に係る関係者は、以下のとおりである。

		平成 26 年度	平成 27 年度
総括館長		杉光 誠	杉光 誠
	副館長	伊崎 俊秋	伊崎 俊秋
庶務	総務室長	塩塚 孝憲	塩塚 孝憲
	企画主査	中村満喜子	中村満喜子
	事務主査	宮崎 奈巳	宮崎 奈巳
		西村 知子	西村 知子
	主事	秦 健太	秦 健太
報告	学芸調査室長	小田 和利	小田 和利
	調査研究班長	杉原 敏之	小澤 佳憲
	技術主査		大庭 孝夫
	主任技師	下原 幸裕	下原 幸裕
		岡田 諭	
保存処理	文化財調査室長	飛野 博文	吉村 靖徳
	保存管理班長	加藤 和歳	加藤 和歳
	主任技師	小林 啓	小林 啓
整理	整理補助員	高田いく子	
	整理作業員	市川千香枝	中田千枝子 堤 直美

大宰府史跡は、国指定特別史跡である「大宰府跡」及び政庁周辺の官衙跡、「水城跡」、「大野城跡」及び国指定史跡の「大宰府学校院跡」、「観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」、「筑前国分寺跡」、「国分瓦窯跡」等の古代の官衙・山城・寺院・生産遺跡を包括する我が国有数の大規模史跡である。これら史跡の調査研究、報告書刊行及び整備活用を進めるにあたっては、種々な視点から対処する必要がある。歴史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学・土木工学の専門家で構成される諮問機関である「大宰府史跡調査研究指導委員会」に諮り、委員による指導・助言のもとに計画調査を実施している。なお、委員は Tab.3 のとおりである。

指導委員会

また、平成 27 年度は調査研究指導委員の改選があり、各委員の推薦により委員長は小田富士雄氏が選出され、副委員長は佐藤信氏が指名された。なお、平成 26 年度より新委員として箱崎和久氏(奈良文化財研究所遺構研究室長)に委嘱し、高橋章氏は平成 26 年度をもって退任された。

Tab.3 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧(平成26年度)

役職	氏名	職(就任時)	専門
委員長	小田 富士雄	福岡大学名誉教授	考古学
副委員長	佐藤 信	東京大学大学院教授	歴史学
委員	八木 充	山口大学名誉教授	歴史学
	狩野 久	元岡山大学教授	歴史学
	森 公章	東洋大学教授	歴史学
	坂上 康俊	九州大学大学院教授	歴史学
	松村 恵司	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所長	考古学
	山中 章	三重大学教授	考古学
	高橋 章	求菩提資料館長	考古学
	鈴木 嘉吉	元奈良国立文化財研究所長	建築史学
	箱崎 和久	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 遺構研究室長	建築史学
	杉本 正美	九州芸術工科大学名誉教授	造園学
	尼崎 博正	京都造形芸術大学教授	造園学
	渡辺 定男	東京大学名誉教授	都市工学
林 重徳	佐賀大学名誉教授	土木工学	

2 調査の経過と概要

(1) 平成26年度

平成26年度の調査計画は、引き続き蔵司地区官衙跡を調査対象とし、平成25年度までの確認調査をもとに「大宰府政庁周辺官衙跡・蔵司地区の重点調査の方針」を定めた上で、蔵司地区の中心的な建物と推定される大型礎石建物 SB5000 がある D 地区において第225次調査として重点調査を開始した。緊急調査は、大宰府政庁周辺官衙跡の広丸地区で第224次調査の1件に対応し、太宰府市教育委員会が主体となって行った不丁地区の個人住宅建設に伴う確認調査及び観世音寺子院跡に含まれる松ヶ浦池の堤防改修工事の立会も行った。この他、福岡県総務部文化財保護課による大野城跡環境整備事業に伴い増長天地区礎石群の確認調査(第5-3次調査)及び水城跡公開活用事業に伴う水城 JR 切り通し部における土塁断面調査(第58次調査)も実施した。

大宰府史跡第225次調査は、8月18日から開始した。調査の対象は大型礎石建物 SB5000 のある D 地区で、SB5000 の規模や構造の確認をはじめ、遺構の広がりや変遷過程を解明するための調査を実施した。調査は現存する礎石列を基準にして調査グリッドを設定し、検証のための土層ベルトを残す方法をとった。SB5000 については、調査以前から四面廂建物、二面廂建物あるいは総柱建物など様々な構造が想定されてきたが、調査の結果、現存礎石や礎石の抜取穴の配置から桁行9間×梁行2間の身舎で、北側と南側に廂が付く二面廂建物である可能性が高まっ

第225次

た。建物の南側は礎石列付近まで近現代の土取りが及んでいたが、北側には瓦溜りを伴う雨落溝を確認し、東側でも浅い溝状遺構が遺存していることが判明した。

さらに、SB5000の中央南側において掘立柱建物の一部を確認した。柱穴は東西に2間分、南北に1間分を確認したにとどまるが、東西の柱間が約2.7m、南北の柱間が約3.0mを測り、大きな建物になる可能性がある。SB5000との直接的な切り合い関係はないものの、復原されるSB5000の雨落溝の位置からすると、同時併存は不可能であること、SB5000建設時に上部を削平されている可能性があることなどから、先行する建物と推定され、蔵司地区の変遷を解明する上で重要な成果が得られた。また、表土や堆積土中からは土器や瓦のほか被熱鉄製品が多量に出土した。被熱鉄製品については、蔵司地区の確認調査の段階からその帰属時期や性格などが議論となっていたが、当年度の調査においても明確に遺構に伴う状況が確認できず、次なる調査に残る課題となった。

こうした調査成果をもとに、10月25日に現地説明会を開催し、約160名の参加があった。また、地元の観世音寺地区や坂本地区の住民に向けての現地説明会を年度が改まった平成27年4月23日に開催し、約50名の参加があった。

当該年度の調査はSB5000の東部と中央部において実施したが、後世の造成等による破壊が著しく建物の規模や構造についての情報が十分に得られなかったことから、翌年度まで調査を継続することとなった。

第224次 大宰府史跡第224次調査は、住宅建設に伴う確認調査で、6月26日に実施した。当該地は政庁の南西側に広がる広丸地区官衙域の西側にあたる。調査の結果、調査地の東側に南北方向に延びる落込みの西側の肩を確認した。土層の観察から溝状遺構である可能性が高いことが判明した。この他、ピットなどを確認したが、調査地西側には御笠川の氾濫に伴う堆積層が広がっていることも判明した。御笠川の氾濫原の範囲については、政庁周辺官衙跡の正式報告書においても旧地形図に基づく想定範囲を示しているが、今回の調査により概ねその範囲が一致していることを確認できたことも重要な成果といえる。

(2) 平成27年度

平成27年度の計画調査は、蔵司地区官衙跡のD地区において平成26年度から開始した大宰府史跡第225次調査を継続して行うとともに、D地区の南側にあたるE地区において第228次調査を開始した。緊急調査としては、史跡「観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」の子院群が想定される四王寺山山麓において大宰府史跡第226・227・229次調査の3件に対応した。

第225次 大宰府史跡第225次調査は、平成26年度に引き続き大型礎石建物SB5000の規模・構造の解明とともに、下層遺構や周辺遺構の状況を把握するため、SB5000東半部の未調査部の調査とともに、西半部のとくに基壇隅や雨落溝などに関わる範囲の調査を実施した。

調査の結果、西半部の礎石抜取穴の配置を確認したことから、建物構造は前年度の調査でおおよそ判明していた二面廂建物であることが確定できた。しかし、昭和8年の地下げによって礎石抜取穴すら削平されている箇所も多く、据付穴の底部しか残っていない箇所もあった。

建物北側の雨落溝としていた溝遺構は、断ち割り調査により、内側に古い段階の溝があり、外

側にやや幅の広い新しい段階の溝が新たに掘削されていることが判明した。前年度の調査で確認した瓦溜りは新しい段階の溝の最終埋没層に相当するものであることも分かった。建物の東側で見つかった溝は、礎石の芯からの距離からすると新しい段階の溝に連なるものの可能性がある。建物の西側では、平成 25 年度に実施した D 地区の確認調査である第 220 次調査において整地層として捉えていたものが、溝遺構の輪郭に相当することが判明し、建物北西隅で L 字状に曲がって北側の新しい段階の溝に繋がる状況を確認した。

また、SB5000 の南側で掘立柱建物が 1 棟見つかったが、SB5000 の北半部の調査により、新たに掘立柱建物 2 棟を確認した。この 2 棟は SB5000 の礎石据付穴や雨落溝に切られることから、明らかに SB5000 より先行する建物であり、前年度に見つかった南側の掘立柱建物とも概ね柱筋を揃えることから、SB5000 より古い時期に計画的に配置された建物群が存在する

古い建物群

ことが明らかとなった。

こうした調査成果をもとに平成 27 年 11 月 1 日に現地説明会を開催し、約 150 名の参加者を得た。また、平成 28 年 1 月 22 日にも観世音寺地区や坂本地区の住民及び大宰府史跡のボランティアガイドなどを主な対象として現地説明会を開催し、天候不順ではあったものの約 40 名の参加者があった。

大宰府史跡第 228 次調査は、SB5000 の南側に広がる平坦面 (E 地区) の遺構の展開や構造の

第 228 次

説明を目的に、10 月 19 日より開始した。調査の結果、一部に整地層とみられる部分が残るものの、多くは後世の耕作や造成によって削平を受けていることが判明した。調査は次年度まで継続する予定で、詳細は今後の報告書で明らかにしたい。

大宰府史跡第 226 次調査は、住宅建設に伴う確認調査で、6 月 19 日に実施した。調査地は

第 226 次

観世音寺の北側に広がる東観世団地に所在し、県指定史跡「横岳崇福寺跡」の西側の丘陵地にあたる。調査の結果、団地造成時の盛土直下で風化花崗岩の地山となり、元々の尾根地形の高まりを削平している状況が判明した。ただ、調査区の南側では地山の傾斜が残っていた。遺構・遺物は確認できなかったが、井戸や土坑などで深さのある遺構であれば残っている可能性もあり、今後の調査が期待される。

大宰府史跡第 227 次調査は、住宅建設に伴う確認調査で、6 月 19 日に実施した。調査地は、

第 227 次

推定金光寺跡の南に隣接する宅地で、金光寺に関連する遺構の存在が推定された。調査の結果、団地造成時の盛土の直下で花崗岩風化土の地山となり、遺構・遺物は確認できなかった。ただし、北側の調査では建物群とともに空閑地の存在も確認されており、今回の調査地もそうした空閑地との関連も想定され、今後の調査が期待される。

大宰府史跡第 229 次調査は、農業用倉庫の建設及び擁壁改修に伴う確認調査で、12 月 8 日に

第 229 次

実施した。調査地は大宰府政庁後背地区の北側の谷筋に位置する。調査の結果、宅地造成時の盛土の下には礫混じりの河川堆積層が広がっており、元々谷地形であったことが判明した。湧水のため、工事が及ぶ堆積層まで掘削を留めたが、周辺の状況から地山まではかなりの掘削深度になると推定される。遺構・遺物は確認できなかった。

以上が、平成 27 年度に実施した計画・緊急調査の概要であるが、蔵司地区で実施した大宰府史跡第 225・228 次調査については、現在調査・整理作業中であり今後の報告書において報告することとしたい。

Tab.4 大宰府史跡現状変更申請対応状況表

平成25年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積(㎡)	指定区分	指示	対応内容	許可日
12月 5日	ガス会社	確認調査	太宰府市国分2丁目1302他	18.96	特史水城跡	文許可	太教委実施 九歴立会	1月17日
12月 9日	通信会社	携帯電話用 無線基地局設置	糟屋郡宇美町大字四王寺宇猫坂 202-1		特史大野城跡	文許可	太教委立会	1月17日
12月10日	個人	家屋除却	太宰府市吉松2丁目185-12		特史水城跡	文許可	太教委立会	1月17日
3月19日	太宰府市教育長	標柱設置	太宰府市観世音寺5丁目192-1	1	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	5月16日

平成26年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積(㎡)	指定区分	指示	対応内容	許可日
4月 9日	大野城市教育長	拠点施設整備	大野城市下大利5丁目757-32他	3955.14	特史水城跡	文許可	太教委立会	5月16日
4月11日	個人	給水管埋設	太宰府市観世音寺4丁目604他		特史大宰府跡	文許可	太教委立会 九歴立会	5月16日
4月18日	福岡農林事務所長	谷止施設設置	糟屋郡宇美町大字炭焼宇原田谷山 283-1		特史大野城跡	文許可	宇教委立会	6月20日
4月28日	太宰府市教育長	発掘調査	太宰府市国分2丁目1-1他	360	特史水城跡	文許可	太教委実施	6月20日
6月 9日	個人	土壌改良	太宰府市観世音寺5丁目192-1	7.5	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	7月18日
6月10日	ガス会社	ガス導管埋設	太宰府市国分2丁目1302他		特史水城跡	文許可	太教委立会	7月18日
6月11日	九州歴史資料館	発掘調査	太宰府市観世音寺3丁目478他	1,150	特史大宰府跡	文許可	九歴調査	7月18日
6月12日	個人	家屋解体	太宰府市観世音寺6丁目1827-58	338.98	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	7月18日
6月23日	個人	給水管埋設	太宰府市観世音寺4丁目604		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	7月18日
8月 7日	福岡農林事務所長	落石防護 施設設置	糟屋郡宇美町大字炭焼宇内野谷 出合切1100-1		特史大野城跡	文許可	宇教委立会	9月19日
9月 8日	太宰府市教育長	法面掘削	太宰府市連歌屋1丁目1871番 - 14・17	51.1	特史大野城跡	文許可	太教委立会	10月17日
9月19日	個人	家屋等除却	太宰府市観世音寺6丁目896-22	120	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	11月21日
9月26日	那珂県土整備 事務所長	防護柵設置	太宰府市大字観世音寺1105-3	309.5	特史大宰府跡	文許可	太教委立会	11月21日
9月30日	観世音寺区長	公民館建替	太宰府市観世音寺4丁目772-3	87.49	史跡大宰府 学校院跡	文許可	太教委立会	11月21日
10月23日	個人	給水管埋設	太宰府市観世音寺5丁目853-1		史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	12月12日
10月28日	個人	住宅建設	太宰府市観世音寺6丁目1827-58	109.3	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	12月12日
10月30日	個人	家屋等除却	太宰府市国分2丁目206他	82.64	特史水城跡	文許可	太教委立会	12月12日
10月31日	個人	工場除却	太宰府市国分2丁目208番	296	特史水城跡	文許可	太教委立会	12月12日
10月31日	太宰府市長	案内板設置	太宰府市大字太宰府1791-2他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	12月12日
10月31日	太宰府市長	案内板設置	太宰府市国分2丁目191-1他	0.35	特史水城跡	文許可	太教委立会	12月12日
	県教育長	土塁復元	大野城市下大利3丁目5-1、5-8他 太宰府市吉松1丁目144-1、149-1他		特史水城跡	文許可	県教委整備	12月12日
11月 4日	個人	家屋等除却	太宰府市観世音寺5丁目37-4	129.32	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	12月12日
11月22日	個人	防火施設整備等	太宰府市観世音寺5丁目182		史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	1月16日
12月 1日	個人	確認調査及び 外構等改修	太宰府市坂本3丁目14-1	15.9	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	1月16日
12月 8日	太宰府市教育長	地質調査	太宰府市国分2丁目195	0.08	特史水城跡	文許可	太教委立会	1月16日
12月11日	太宰府市長	法面工	太宰府市大字太宰府字原1491-5他	572.8	特史大野城跡	文許可	太教委立会	1月16日

平成27年度

申請日	申請者	申請理由	申請地	面積(㎡)	指定区分	指示	対応内容	許可日
4月 7日	個人	確認調査及び 家屋新築	太宰府市観世音寺6丁目715-84	11.5	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	5月15日
4月 8日	個人	確認調査及び 家屋新築	太宰府市観世音寺6丁目896-77	11.5	史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	5月15日
4月24日	個人	掲示板設置	太宰府市観世音寺5丁目837番		史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	6月19日
5月 1日	個人	給排水管理設	太宰府市観世音寺6丁目896-77		史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	6月19日
5月 1日	個人	給排水管理設	太宰府市観世音寺6丁目715-84		史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	6月19日
5月12日	九州歴史資料館	発掘調査	太宰府市観世音寺3丁目478、 484-1・2、486	1,359	史跡大宰府跡	文許可	九歴調査	7月17日
6月12日	個人	家屋除却	太宰府市観世音寺5丁目71-1		史跡観世音寺境内 及びび子院跡	文許可	太教委立会	7月17日
6月24日	大野城市教育長	発掘調査	大野城市下大利4丁目705-2他	1,050	特史水城跡	文許可	太教委調査	7月17日

6月29日	太宰府市長	法面工	太宰府市大字太宰府岩谷1790-8		特史大野城跡	文許可	太教委立会	7月17日
7月3日	個人	家屋建替	太宰府市観世音寺6丁目896-69		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	9月18日
7月8日	個人	給水管埋設工事	太宰府市観世音寺4丁目589-2		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	9月18日
7月22日	大野城市教育長	散策路整備	大野城市大字瓦田618-1他		特史大野城跡	文許可	太教委立会	9月18日
8月3日	個人	農業用倉庫建替	太宰府市坂本3丁目287		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	9月18日
8月4日	個人	家屋解体等	太宰府市観世音寺5丁目1827-21		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	9月18日
8月12日	県教育長	環境整備	太宰府市大字太宰府岩谷1790-6 糟屋郡宇美町大字四王寺字猫坂191-1		特史大野城跡	文許可	県教委整備	9月18日
9月4日	太宰府市長	案内サイン設置	太宰府市観世音寺5丁目182		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	10月16日
9月7日	個人	確認調査及び擁壁等設置	太宰府市坂本3丁目278	2.64	史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	九歴調査 太教委立会	10月16日
9月11日	大野城市教育長	拠点施設整備	大野城市下大利5丁目761-2他		特史水城跡	文許可	太教委整備	10月16日
10月15日	太宰府市教育長	便益施設及び周辺整備	太宰府市国分2丁目195他		特史水城跡	文許可	太教委整備	11月20日
11月4日	個人	家屋解体等	太宰府市観世音寺4丁目662-3他		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	12月11日
11月4日	個人	家屋解体等	太宰府市国分2丁目180-1		特史水城跡	文許可	太教委立会	12月11日
11月5日	太宰府市長	防災無線設備改修	太宰府市観世音寺6丁目896-56		史跡観世音寺境内及び子院跡	文許可	太教委立会	12月11日
11月5日	大野城市教育長	樹木整理等	大野城市下大利5丁目757-1他		特史水城跡	文許可	太教委立会	12月11日
12月3日	太宰府市教育長	案内サイン設置	太宰府市朱雀3丁目305-7		特史大宰府跡	文許可	太教委立会	1月15日
12月22日	大野城市教育長	散策路整備	大野城市大字瓦田618-1他		特史大野城跡	文許可	太教委整備	
12月25日	太宰府市長	案内サイン設置	太宰府市観世音寺5丁目47-1 太宰府市観世音寺4丁目1105-1		史跡観世音寺境内及び子院跡		太教委立会	
12月25日	太宰府市長	案内サイン設置	太宰府市観世音寺4丁目207-3・4・5	1.1	史跡大宰府 学校院跡		太教委立会	
12月25日	太宰府市長	案内サイン設置	太宰府市観世音寺4丁目1159		特史大宰府跡		太教委立会	
1月20日	太宰府市長	法面保護工事	太宰府市大字太宰府岩谷1790-16他		特史大野城跡		太教委立会	
2月1日	太宰府市長	防災無線設備改修	太宰府市観世音寺6丁目896-56		史跡観世音寺境内及び子院跡		太教委立会	
2月9日	太宰府市長	法面保護工事	太宰府市水城4丁目250-51他		特史大野城跡		太教委立会	

Tab.5 大宰府史跡発掘調査実施表

平成26年度

No.	調査回数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
1	大宰府史跡第224次調査	6AYQ-A-Q	14.31	140626	政庁周辺官衙跡広丸地区
2	大宰府史跡第225次調査	6AYT-A-J	223.55	140818～150331	政庁周辺官衙跡蔵司地区
3	大野城跡第5-3次調査	6AON	148.14	140116～150320	大野城跡増長天地区礎石群
4	水城跡第58次調査	6AMK-L	139	140114～150330	水城跡JR沿い断面

平成27年度

No.	調査回数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
1	大宰府史跡第225次調査	6AYT-A-J		150422～	政庁周辺官衙跡蔵司地区
2	大宰府史跡第226次調査		11.5	150619	観世音寺子院地区
3	大宰府史跡第227次調査		11.5	150619	観世音寺子院地区
4	大宰府史跡第228次調査	6AYT-A-I・J		151019～	政庁周辺官衙跡蔵司地区
5	大宰府史跡第229次調査		2.64	151208	観世音寺子院地区

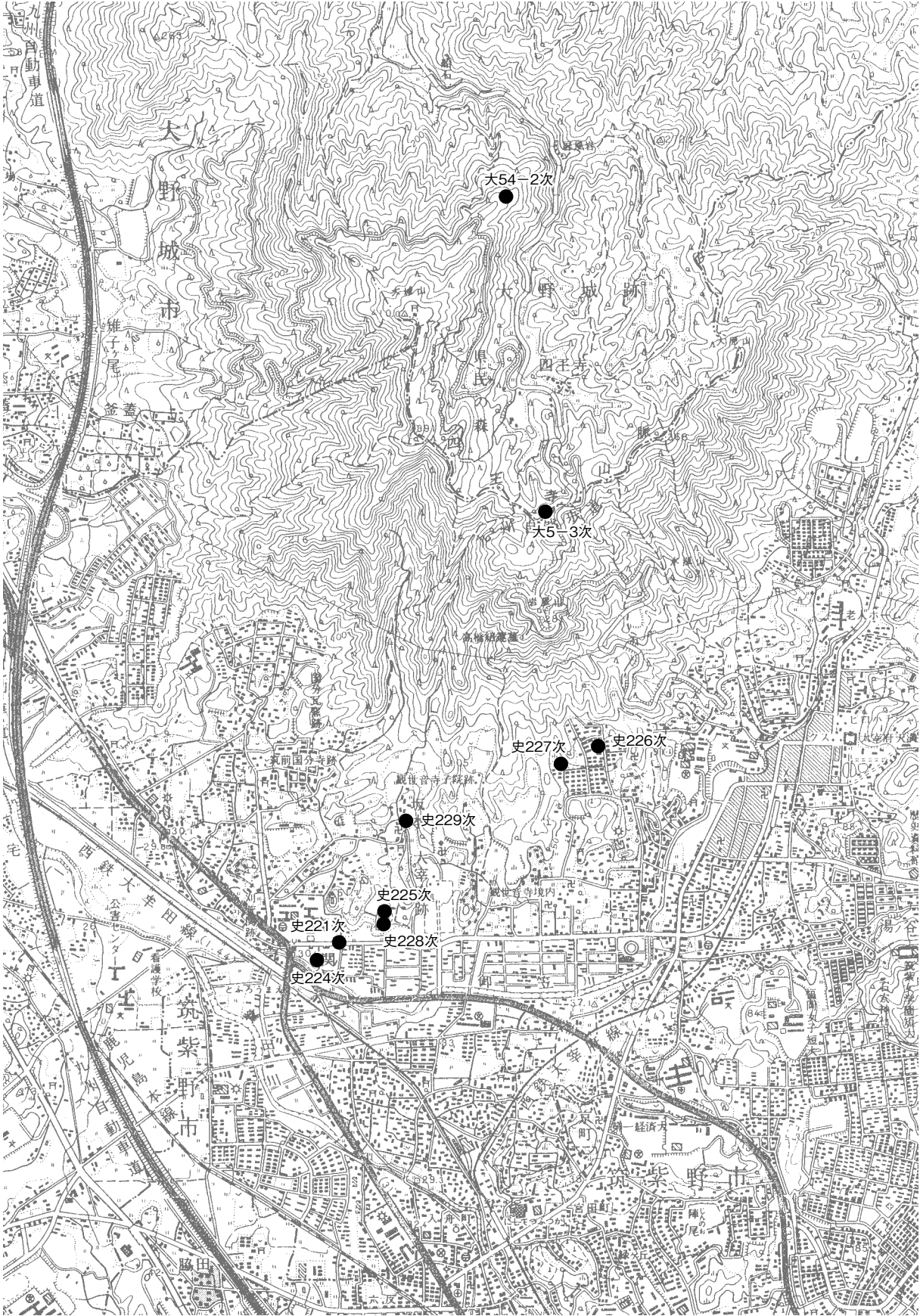


Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地周辺図 (1/25,000)

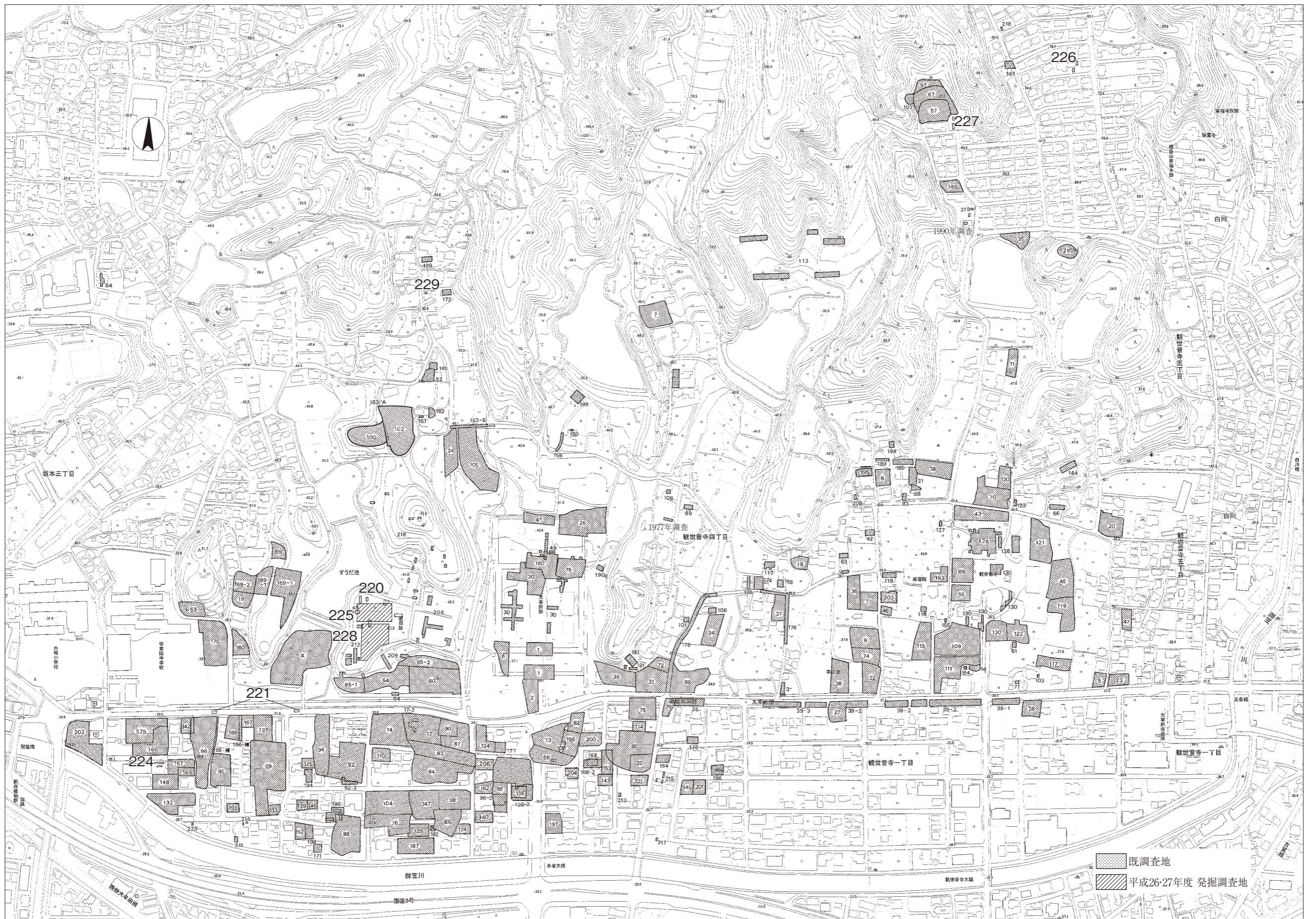


Fig. 2 大宰府史跡発掘調査地域図 (1/5,000)

Ⅱ 大宰府史跡の確認調査

II 大宰府史跡の確認調査

1 第 221 次調査（来木・蔵司地区の緊急調査）	9
（1）調査概要	9
（2）トレンチ設定と基本層序	9
（3）検出遺構	10
（4）出土遺物	11
（5）小 結	12
2 第 224 次調査（広丸地区の確認調査）	13
（1）調査概要	13
（2）トレンチ設定と基本層序	13
（3）検出遺構	14
（4）出土遺物	14
（5）小 結	15
3 第 226 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）	15
（1）調査概要	15
（2）トレンチ設定と基本層序	16
（3）小 結	16
4 第 227 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）	17
（1）調査概要	17
（2）トレンチ設定と基本層序	17
（3）小 結	17
5 第 229 次調査（観世音寺子院跡の確認調査）	18
（1）調査概要	18
（2）トレンチ設定と基本層序	18
（3）小 結	18

1 第221次調査（来木・蔵司地区の確認調査）

（1）調査概要

経 過 大宰府政庁跡の周辺には、これまでの発掘調査で広範囲に建物群などが展開していることが知られており、大宰府の様々な機能を担う諸官衙が存在していたと考えられている。

今回の調査は、大宰府政庁跡の南側を東西に横切る県道筑紫野・太宰府線の擁壁改修工事の計画が出されたことを受けて、福岡県那珂県土整備事務所・太宰府市文化財課との協議の上、地下遺構の有無および深度を確認するために実施したものである。調査は太宰府市教育委員会職員の協力を得て、平成26年12月11・12日に実施した。交通量の多い道路における調査であるため、1日に1ヶ所のトレンチを調査することとし、重機によるトレンチ掘削を行い、写真撮影、図面作成等を行って、即日埋め戻す調査を2日間にわたり実施した。調査面積は16.0㎡である。

位 置 調査地である県道部分は南側に広がる広丸・大楠地区と一連であるが、地境に基づく地域設定では来木地区（aトレンチ）と蔵司地区（bトレンチ）に属する。地番は太宰府市観世音寺3丁目1105－3番である。

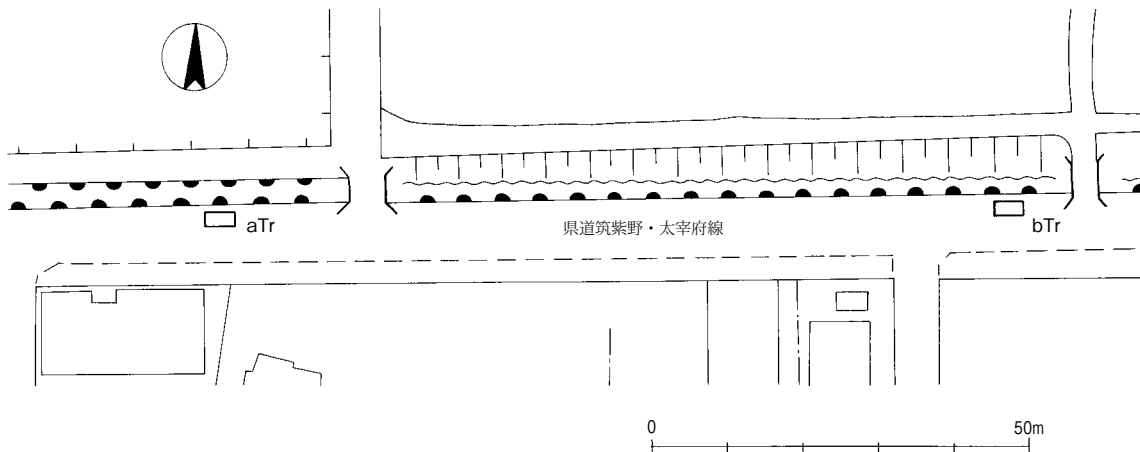


Fig. 3 第221次調査地位置図（1/1,000）

（2）トレンチ設定と基本層序（Fig. 4，PL. 1）

調査では遺構面がどこまで広がっているのか、現在の擁壁を構築する際にどこまで掘削が及んでいたのかを把握する必要があった。道路には擁壁から1 m程度の間隔を保って亀裂が走り、亀裂より北側（水路側）が既に窪んでいる状況から、擁壁工事が亀裂の範囲まで及んでいる可能性が高いと考え、亀裂部分を含む位置に、東西方向に長さ4 m、幅2 mの調査区を2ヶ所に設けることとした。

調査の結果、1トレンチでは現在の擁壁設置に伴う掘方（2～7層）が調査区の中ほどまで及び、現在の道路以前の造成土（8～10層）も確認した。造成土は締まりが良かったためアスファルト舗装以前の路面を形成していた可能性があり、度々路面や路肩の補修が実施されていたことが判明した。なお、北側には灰色土（11層）が堆積しており、断面の確認から北側に向かって落ち

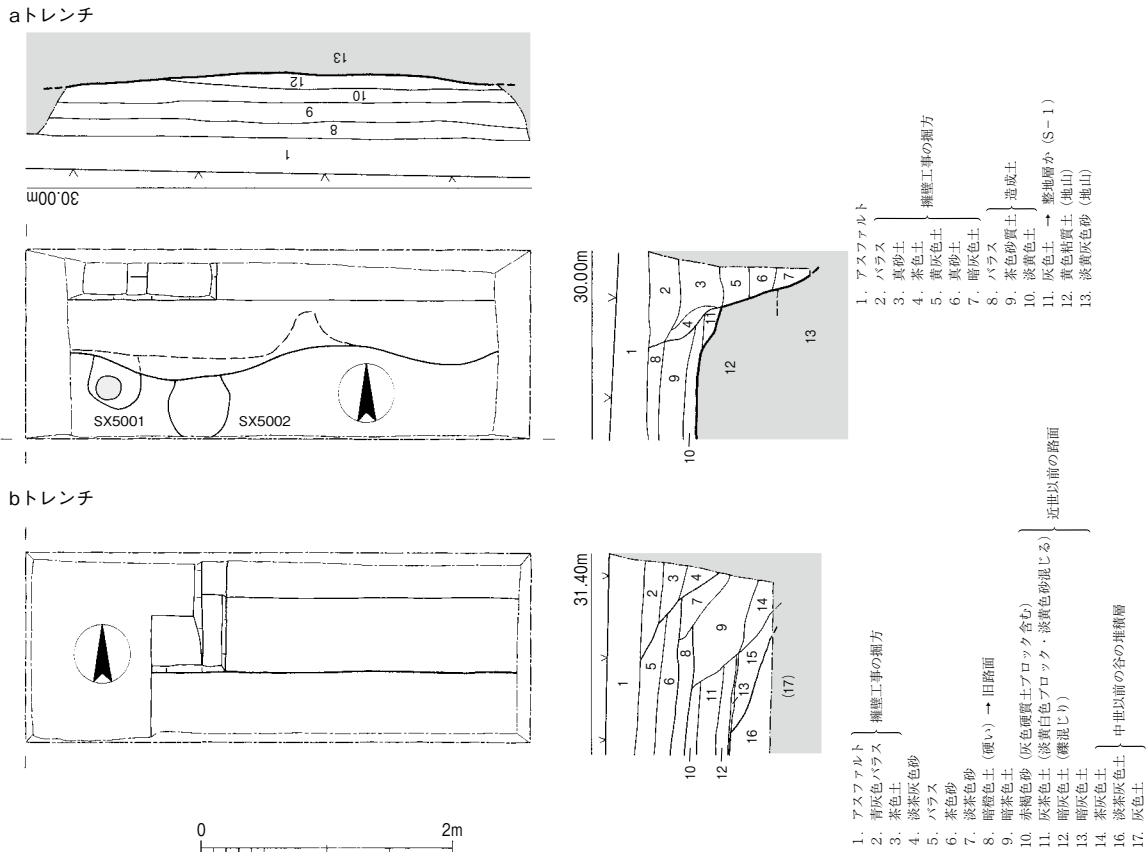


Fig. 4 第221次調査トレンチ実測図 (1/60)

込むことが判明した。溝状遺構の可能性もあるが、北側を完全に削平されており判断が難しい。遺物はS-1として取り上げた。12層は10層までの造成土とは異なり土質も良好であることから、近・現代よりも以前の整地土と推定される。

2トレンチでも、擁壁や路肩の改修を繰り返し行った状況が確認できる。土層観察や出土した遺物などから、14層までは現代の所産で、9～15層は近世以前の路面と水路側への堆積層とみられる。16・17層は粗砂などが混じり、ローリングを受けて磨滅した遺物も出土することから、**中世以前**から、谷部の堆積層と考えられる。時期的には中世以前か。

(3) 検出遺構

明確な遺構としては以下に報告する2基であるが、北側の水路が古代や中世などの溝遺構を踏襲しているものであれば、一部は遺構の堆積層として捉えることもできる。この点については、将来の検討課題としたい。

SX5001 (Fig. 4)

柱穴状遺構 aトレンチ西端にある柱穴状遺構で、直径41cm程度の不整形な円形を呈し、直径20cmの柱痕跡が確認できる。

SX5002 (Fig. 4)

Aトレンチ西寄りにあり、直径50cmほどの円形を呈する溜まり状の遺構である。埋土は茶灰砂である。

(4) 出土遺物 (Fig. 5, PL. 15・16)

SX5002 出土遺物

土師器碗 (3) 小片で磨滅しているが、ハ字形に開く高台を付す。

a トレンチ灰色土出土遺物

丸瓦 (1) 丸瓦の玉縁部分である。側面はヘラケズリを行っており、分割破面は残さないが、二分割されたものとみられる。凸面はナデ調整で、凹面には布目を残す。

平瓦 (2) 器壁が厚く、側面はヘラケズリを行って、凹面側の端部も面取りしている。両面とも磨滅しているが、凸面は縄目叩きとみられる痕跡が残る。

b トレンチ出土遺物

須恵器坏 (4) やや直立気味に伸びる口縁部で、低い高台を有する形態か。

須恵器壺 (5) 外面に稜を持ってく字形に折れ、外面下半は回転ヘラケズリである。

b トレンチ暗茶色土出土遺物

土師器碗 (6・7) 6は若干屈曲しながら丸味のある体部で、7は細身の高台を付す。

黒色土器 (8) 口縁端部を僅かに外反させる A 類碗で、内外ともミガキの痕跡が残る。

青磁碗 (9) 同安窯系の青磁碗で、削り高台で、見込に凹線をめぐらせる。外面には櫛描文が施されている。釉は灰緑色を呈し、畳付から高台内にかけては露胎である。

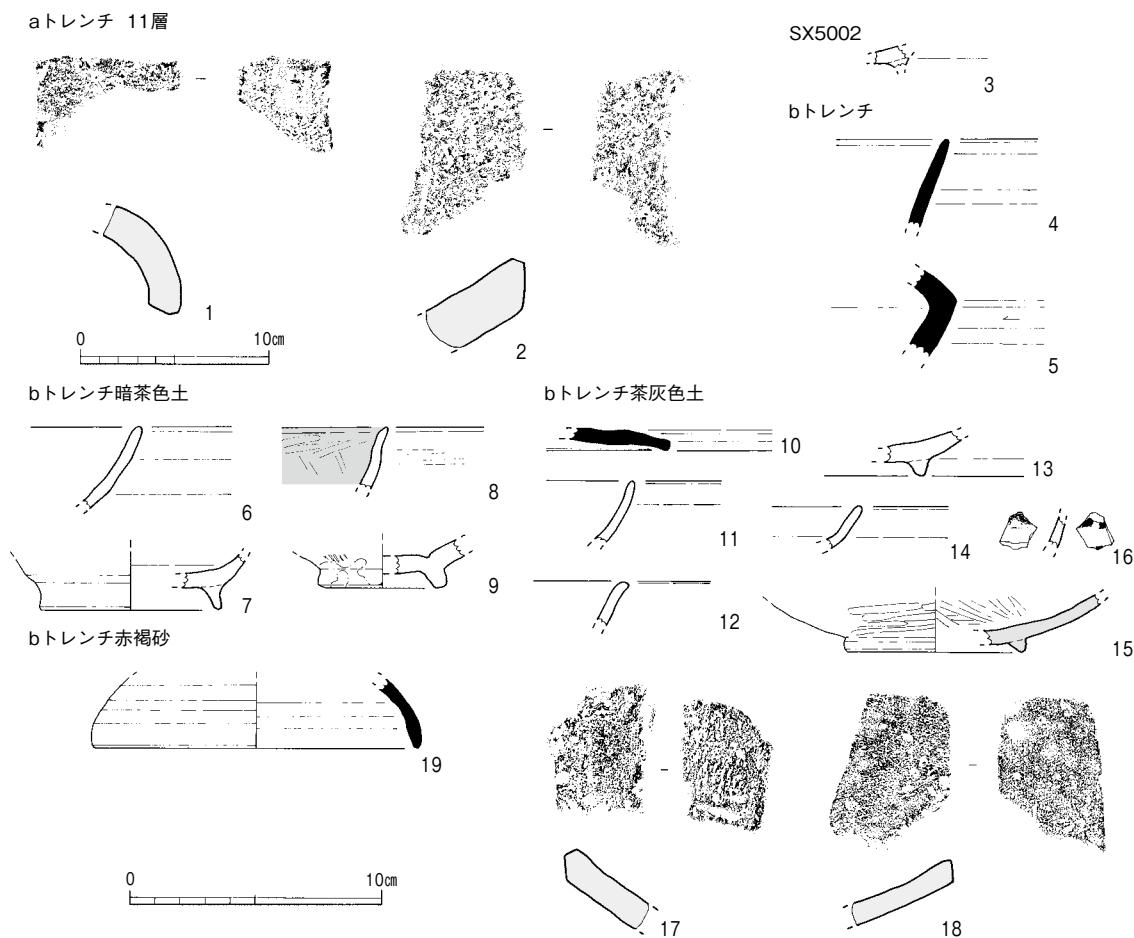


Fig. 5 第221次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)

b トレンチ茶灰土出土遺物

須恵器蓋 (10) 非常に低平で、口縁端部はごく僅かに内面を肥厚させる程度である。天井部外面は回転ヘラケズリを行う。

土師器碗 (11～13) 11・12 は口縁部片で、11 は丸味を持ち、12 は口縁端部を少し外反させる。13 は底部片で、低い断面逆台形の高台を付す。

土師器皿 (14) 口縁部小片であるが、器形から皿と判断した。

瓦器碗 (15) 小さな断面三角形の高台を付し、内外とも粗いヘラミガキを行うが、外面はヘラミガキの前にヘラケズリを行う。焼成は良好で、硬質である。

染付小碗 (16) コバルト釉の印判文で、内外とも施文されている。小片である。

平瓦 (17・18) 17 は側面に2面の面取りを行う。凹面は粗い布目と模骨痕が残り、凸面には縄目の叩きがみられる。18 は側面を1面のみヘラケズリする。凹面には布目が若干残り、凸面は縄目をナデ消ししたものとみられる。

b トレンチ赤褐砂出土遺物

須恵器蓋 (19) 牛頸編年IV A 期とみられる蓋坯の蓋で、焼成は良好で灰色を呈する。

(5) 小 結

今回の調査により、県道筑紫野・太宰府線は少なくとも近世以降路面や路肩の改修を繰り返して、徐々に嵩上げされて現在の状況に至っていることが判明した。また、a トレンチでは整地層や柱穴状の遺構が存在することから、広丸地区から続く遺構群が分布している可能性が高いことが確認できた。また、b トレンチでは遺構そのものは見つからなかったが、路面として整地されていく以前の谷部の堆積層を確認することができた。15層までの北側への落込みについては水路（あるいはそれ以前の溝状遺構）に伴う

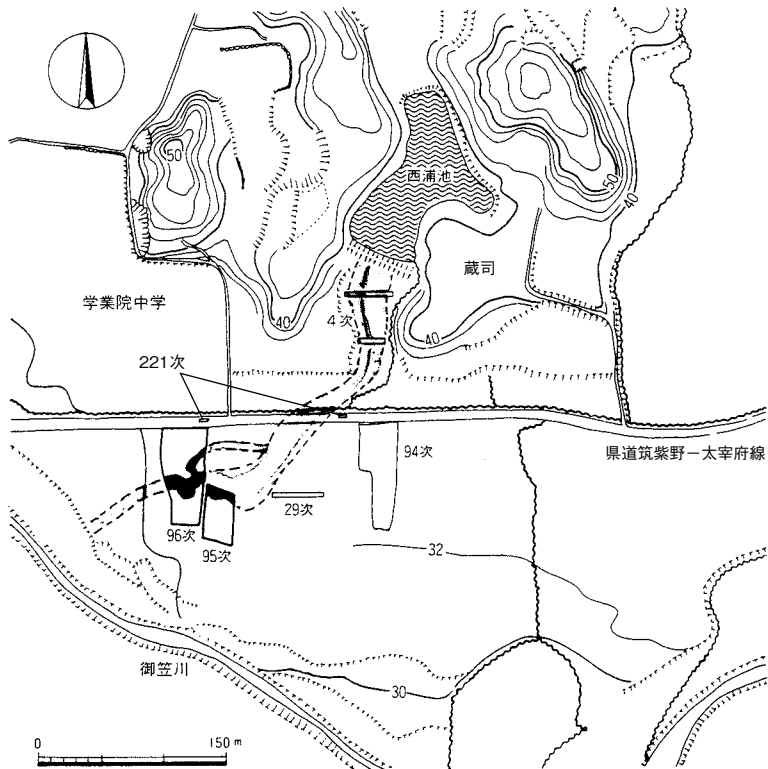


Fig. 6 調査地周辺付近の旧河道推定図 (1/6,000)

[昭和60年度概報掲載図に加筆]

谷 地 形

堆積層とみられるが、16・17層はより古い谷地形が調査地付近に存在することを示す。蔵司西地区の第4次調査の谷部では上層に中世期の堆積層もあり、古代から中世にかけて谷水をどのように処理していたのか、検討する必要がある。

2 第224次調査（広丸地区の確認調査）

(1) 調査概要

経 過 大宰府政庁跡の南を横切る県道筑紫野・太宰府線の南側の一角は、過去の発掘調査で大宰府に関わる官衙域の広がり確認されている。

今回、その範囲内で個人住宅建設の申請が提出されたことを受けて、地下遺構の有無および深度を確認するため実施した。調査は太宰府市教育委員会職員の立会の下、平成26年6月26日に実施した。重機によるトレンチ掘削を行い、写真撮影、図面作成等を行って、即日埋め戻して調査を完了した。調査面積は14.31㎡である。

位 置 広丸地区は大宰府政庁の南西側に位置する。地番は太宰府市観世音寺2丁目275番である。周辺では大宰府史跡第148・157・166次調査などを実施している。

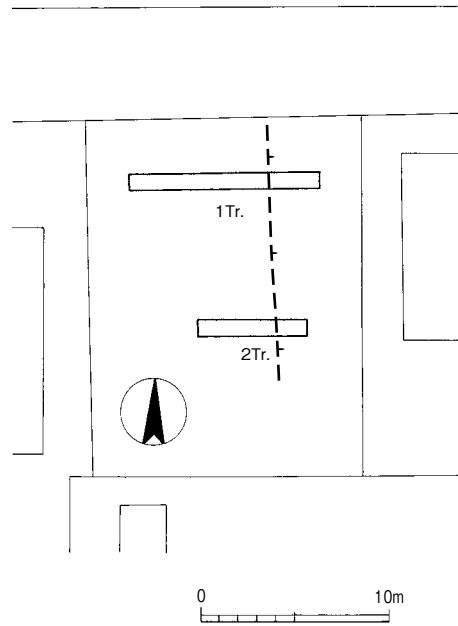
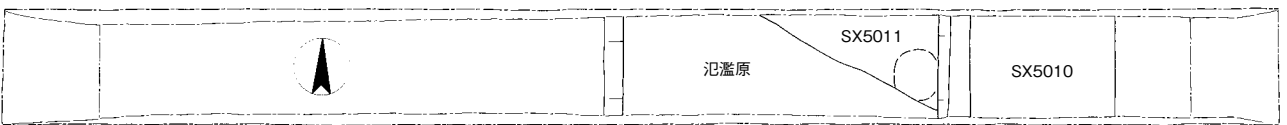


Fig. 7 第224次調査地位置図 (1/400)

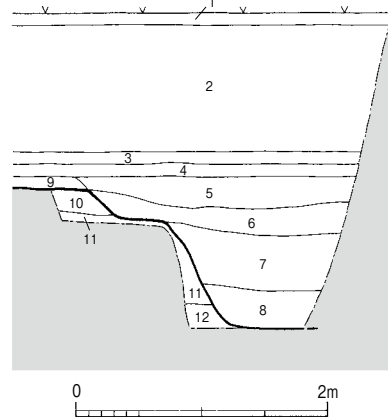
(2) トレンチ設定と基本層序 (Fig. 8, PL. 2・3)

調査地周辺は御笠川の氾濫原が及んでいる可能性があること、東側の第157次調査で南北方向の谷状地形が確認されていることを考慮して、東西方向のトレンチを2ヶ所設けた。1トレ

1 トレンチ



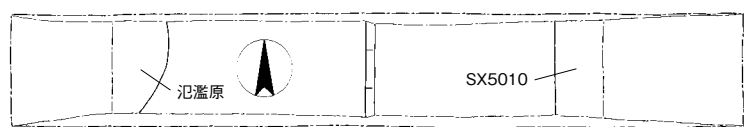
1 トレンチ



1 トレンチ

1. 表土
2. 真砂土 (区画整理時の盛土)
3. 暗灰土 (旧耕作土)
4. 黄褐土 (床土、しまる、砂質)
5. 灰黄褐砂 (土器片等混じる)
6. 灰褐砂
7. 明灰砂
8. 青灰シルト (瓦片出土)
9. 灰砂 (粗砂)
10. 灰褐砂
11. 褐灰粘土
12. 灰褐砂

2 トレンチ



2 トレンチ

- | | |
|---|------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 表土 2. 真砂土 3. 青灰砂 (固くしまる) 4. 暗灰土 (旧耕作土) 5. 黄褐土 (床土、砂質) 6. 灰褐砂 (ややしまる) 7. 青灰砂 (しまる) 8. 褐灰粘質土 (地山) | } 区画整理時の盛土 |
|---|------------|

Fig. 8 第224次調査トレンチ・土層略測図 (1/60)

ンチは長さ 10.1 m, 幅 0.9 m, 2トレンチは長さ 5.8 m, 幅 0.9 mである。

表土下は区画整理時の造成土が厚く盛られており, その下に旧耕作土(暗灰土)と床土(黄褐土)が残る。2トレンチでは床土の下に灰褐砂が堆積しているが, 1トレンチでは遺構面となり, 若干灰砂が堆積している箇所もある。地山は灰褐砂, 褐灰粘土, 灰褐砂と変化する。両トレンチとも西側は御笠川の氾濫原で, 1トレンチでは褐灰色の粘質土が広がり, 2トレンチでは褐色砂が広がる。この範囲は区画整理以前の地形から推定されている氾濫原の範囲とも概ね合致する。

(3) 検出遺構 (Fig. 8)

SX5011 (Fig. 8)

1トレンチの東側で確認したピットで, 直径 0.35 ~ 0.4 mを測る。上面検出のみであるが, 埋土は暗灰土で, 粒状に細片化した土器が混じる。御笠川の氾濫堆積層に覆われている。

SX5010 (Fig. 8)

溝の可能性

1・2トレンチの東側で確認した落込みで, 検出状況から南北方向の溝になる可能性もあるが, 東端が不明であるため, 落込みとしておく。底面まで掘削を行った1トレンチの土層観察から, 上層から中層にかけては砂層が厚く堆積しており, 最下層に青灰シルトが厚さ 30cmほど堆積していることが判明した。青灰シルトの底面には鉄分の沈着もみられた。深さ 1.2 mを測る。

(4) 出土遺物 (Fig. 9, PL. 16)

1トレンチ出土遺物

1・2・4・5は東側の落込み SX5010 出土, 3・6は西側の氾濫原堆積層出土である。

須恵器甕(1) 胴部小片で, 外面は擬格子叩き, 内面は平行あて具である。

土師器椀(2~4) 2は口縁部片で, 坏の可能性もある。薄手で淡灰褐色を呈する。3・4

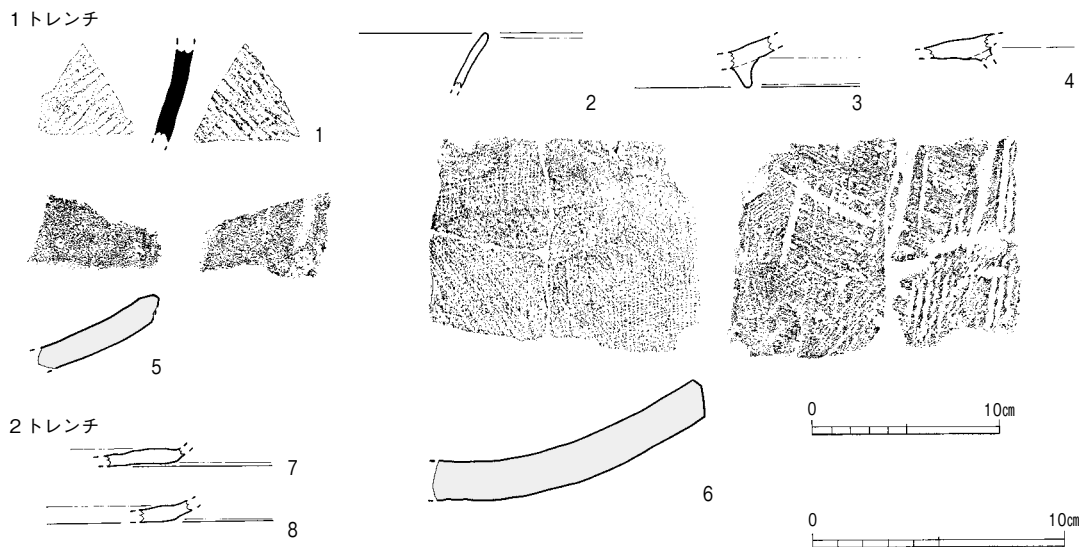


Fig.9 第224次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)

は底部片で、3は短く開く高台を付す。4の底部外面はヘラ切り未調整である。

平瓦（5・6）5は側面に2面の面取りを行うもので、器壁が薄めである。磨滅が顕著であるが、凹面には布目の痕跡がみられる。焼成は甘く、灰白色を呈する。6も側面に2面の面取りを行う。やはり焼成が甘く、灰白色を呈する。凸面は縄目叩きで、凹面は布目の痕跡が残る。粘土板作りである。

2 トレンチ出土遺物

土師器坏（7・8）ともに西側の氾濫原堆積層からの出土である。薄手で、底部外面はいずれも回転ヘラケズリとみられる。8は皿の可能性もある。

(5) 小 結

今回の調査では広丸地区官衙に伴うとみられる遺構も確認したが、部分的な確認にとどまる。東側を南北に走るSX5010は、北側の第166次調査では確認されておらず、規模や性格は不明である。ただ、東側の第157次調査地の西側は地形が少し低くなることから、谷状地形あるいは溝状遺構が存在していた可能性がある。周辺の調査状況も含めて今後検討を続ける必要がある。

溝状遺構か

西側の御笠川の氾濫原については、区画整理以前の旧地形に基づく氾濫原の推定範囲に近い位置で確認できたことから、推定復元案がある程度実態を反映している可能性を示す結果となった。ただし、当調査区においても氾濫原の堆積は西側に向かって緩やかに厚みを増していく状況であり、遺構面を大きく抉り取るような状況ではないため、周辺部では慎重な確認調査が必要となるだろう。

なお、当調査区の北側に接する東西道路は、一辺90mで復元される大宰府条坊案の四条路が位置すると推定される場所である。今回、側溝等の関連遺構の検出も期待されたが、そうした遺構の確認には至らなかった。

3 第226次調査（観世音寺子院跡の確認調査）

(1) 調査概要

経 過 国指定史跡「観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」のうち、観世音寺の背後に広がる子院跡についてはほとんど調査が及んでおらず、その実態については不明なところが多い。今回の調査地がある東観世団地は、大宰府跡の史跡指定以前に宅地化が進められていたところで、考古学的な調査は未実施のまま造成が完了している地域である。そのため、造成前と現在の地形との照合や確認調査などを積み重ねて、遺跡の広がりや造成前の地形の確認を順次行っている状況にある。

今回の調査は、個人住宅建設に先立ち、地下遺構の有無および深度を確認するため実施した。調査は大宰府市教育委員会職員の立会の下、平成27年6月19日に実施し、重機によるトレンチ掘削を行い、写真撮影、図面作成等を行って、即日埋め戻して調査を完了した。調査面積は11.5㎡である。

位置 東観世地区の中央やや北寄りに位置する。地番は大宰府市観世音寺6丁目715-84である。周辺では大宰府史跡第161・218次調査などを実施している。

(2) トレンチ設定と基本層序 (Fig. 11, PL. 3)

調査地は旧地形図との照合により旧尾根地形上に位置し、北から南に地形が傾斜していることが予想され、南側の道路側に旧地形が残っている可能性が高いことから、調査対象地の南側中央に1トレンチ(長さ6.0m, 幅1.0m)、北東側に2トレンチ(長さ5.0m, 幅1.0m [一部1.2m])を、それぞれ南北方向に設定した (Fig.11)。

1・2トレンチとも表土下は宅地造成時の盛土(真砂)で、1トレンチの南側では厚さ75cmほどが盛土であった。盛土を剥ぐと風化花崗岩もしくは花崗岩パイラン土の地山となる。

遺構・遺物は一切確認できなかった。

(3) 小 結

調査の結果、1トレンチ南端で宅地造成前の旧地形に沿ったなだらかな傾斜を確認したが、既に旧表土や堆積土などは全て削平されている状況であった。また、2トレンチの状況から今回の調査対象地のほぼ全体が花崗岩風化土の地山まで地形をL字状に切り土造成していることが判明した。そのため、仮に遺構があったとしても失われている可能性が高いが、1トレンチの南側については旧地形の傾斜に沿った造成面と地山表層とみられる花崗岩パイラン土がみられることから、柱穴や井戸などの深い遺構であれば残っている可能性がある。また、その傾斜角度をさらに南側まで延長した場合、道路を挟んだ南側の宅地では切り土ではなく盛土をしている可能性が考えられる。

今回の調査所見は、宅地造成前の旧地形との照合によって尾根地形に該当するとの推定を裏付ける結果といえる。ただし、明確な遺構は確認できず、子院跡がどのような展開をしていたのかを明らかにするためには今後も継続的な調査が必要である。

今回の調査所見は、宅地造成前の旧地形との照合によって尾根地形に該当するとの推定を裏付ける結果といえる。ただし、明確な遺構は確認できず、子院跡がどのような展開をしていたのかを明らかにするためには今後も継続的な調査が必要である。

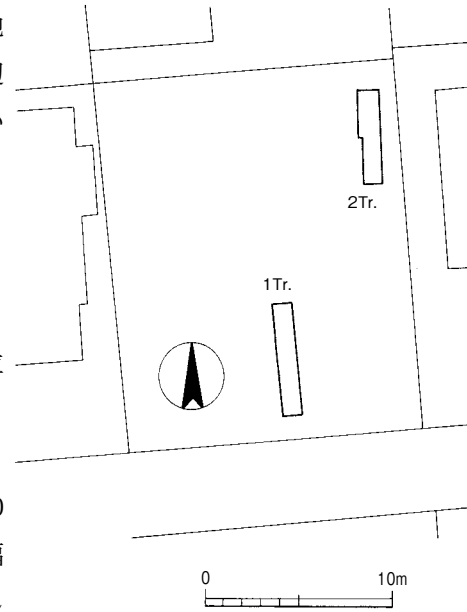
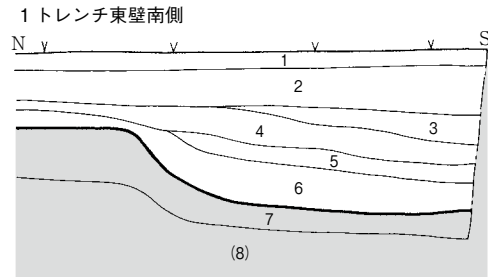
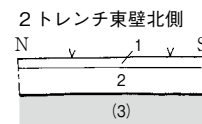


Fig.10 第226次調査地位置図 (1/400)



- 1. 表土
 - 2. 黄褐砂
 - 3. 褐白砂 (若干礫混じり)
 - 4. 黄褐砂
 - 5. にぶい黄灰砂
 - 6. 黄灰砂
 - 7. 褐砂 (表層風化土)
 - 8. 風化花崗岩
- } 造成時の盛土 (真砂)
} 地山



- 1. 表土
- 2. 褐白砂 (しまりなし) → 造成盛土
- 3. 風化花崗岩 → 地山



Fig.11 第226次調査土層模式図 (1/40)

4 第227次調査（観世音寺子院跡の確認調査）

(1) 調査概要

経 過 国指定史跡「観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡」のうち、観世音寺の背後に広がる子院跡は調査例が少なく、実態については不明なところが多い。とくに東観世団地は、大宰府跡の史跡指定以前に宅地化が進み、遺跡の情報が乏しい。そのため、造成前と現在の地形との照合や確認調査などを積み重ねて、遺跡の広がりや造成前の地形の確認を順次行っている状況にある。

今回の調査は、個人住宅建設に先立ち、地下遺構の有無および深度を確認するため実施した。調査は太宰府市教育委員会職員の立会のもと、九州歴史資料館が主体となり平成27年6月19日に実施した。重機によってトレンチ掘

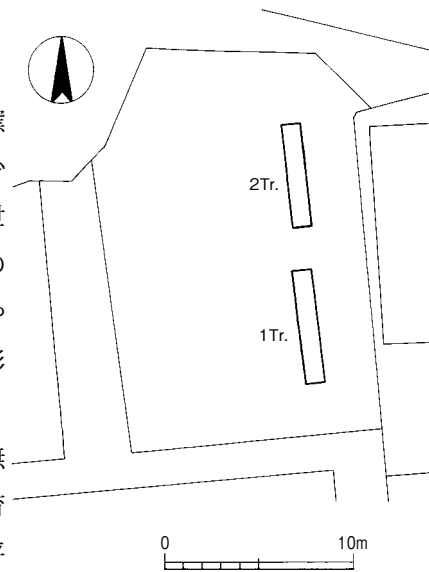


Fig.12 第227次調査地位置図(1/400)

削を行い、写真撮影や図面作成の後、即日埋め戻して調査を完了した。調査面積は11.5㎡である。

位 置 東観世地区の西側に位置し、地番は太宰府市観世音寺6丁目896-77である。北側は推定金光寺跡で、大宰府史跡第57・67・97・107次調査などを実施している。

(2) トレンチ設定と基本層序 (Fig. 13, PL. 4)

調査地周辺は北から南に向かって緩やかに傾斜していることから、南北方向に調査区を設けることとした。調査区南側に長さ6.0m、幅1.0mの1トレンチ、北側に長さ5.5m、幅1.0mの2トレンチを設定した。

表土の直下は暗灰土や黄褐砂など宅地造成時の盛土で、この下層は風化花崗岩や花崗岩パイラン土の地山となる。遺構・遺物は確認できなかった。

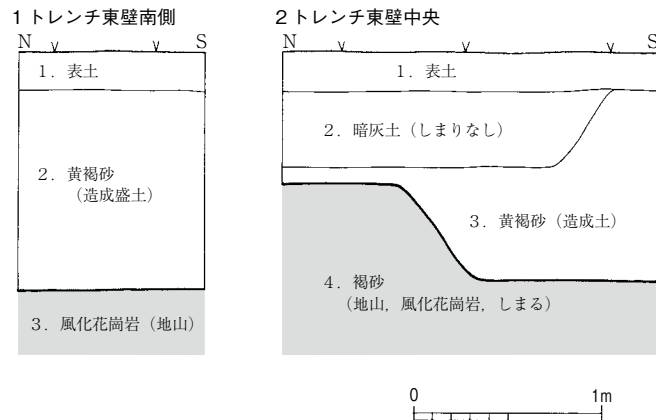


Fig.13 第227次調査土層模式図 (1/40)

(3) 小 結

狭い範囲での調査にとどまり、遺構・遺物を確認することはできなかったが、広い平坦地であり、北側の第57次調査地でも建物跡のない空地が幾つか確認されていることから、一連の空間の中で理解できるのかもしれない。今後の調査が期待される。

5 第229次調査（観世音寺子院跡の確認調査）

(1) 調査概要

経 過 四王寺山の山麓には中世期の観世音寺子院群が展開していたが、調査がほとんど及んでおらず、各子院の位置や規模、構造などは不明な部分も多い。

本調査は、農具収納施設の建設とともに調査地北側の石垣を解体しコンクリート擁壁に改修する工事が申請されたことを受けて、地下遺構の有無および深度、さらに石垣裏側の状況を確認するために実施した。調査は太宰府市教育委員会職員の立会のもと、九州歴史資料館が主体となり平成27年12月8日に行った。重機によってトレンチ掘削を行い、写真撮影、図面作成

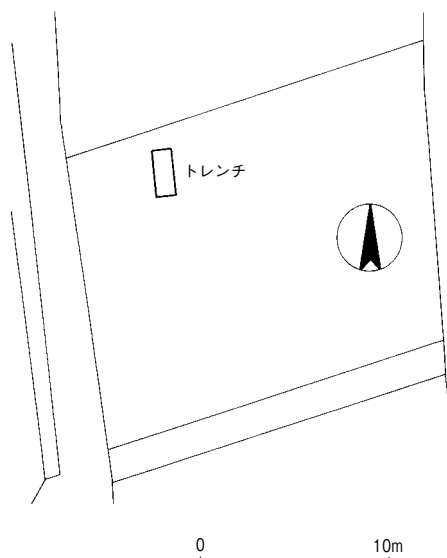


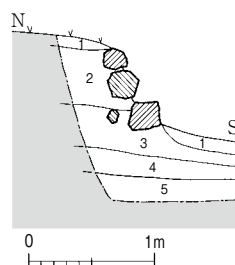
Fig.14 第229次調査地位置図 (1/400)

等を行って、即日埋め戻して調査を完了した。調査面積は2.64㎡である。

位 置 政庁後背地区の北側に位置し、小字は「花屋敷」である。地番は太宰府市坂本3丁目278番で、周辺では第172・179次調査を実施しており、第172次調査では東谷口川に伴う近世以降の護岸施設を確認している。

(2) トレンチ設定と基本層序 (Fig. 15, PL. 4)

調査地北側の石垣は現代の所産であるが、裏側により古い時代の石垣などが存在する可能性もあるため、石垣を断ち割るように南北方向の調査区を設定した。



1. 黒褐色土（腐植土、しまりなし）→表土
2. 明褐色砂（しまりなし、真砂土・コンクリート・レンガ・瓦など多量に含む）現代の造成・石垣裏込め（2～4）
3. 灰褐色砂（しまりなし、拳大～人頭大の礫多く含む）
4. 暗灰色砂（しまりなし、人頭大の礫少し含む）
5. 淡褐色砂（しまりなし、粗砂、礫混じり）→造成前の面

Fig.15 第229次調査土層略測図 (1/60)

調査区は南北2.4 m、東

西1.1 mで、平坦面側の深さは0.5～0.6 m、石垣部では深さ1.2～1.3 mとなる。表土下にある明褐色砂・灰褐色砂・暗灰色砂などは全て現代の石垣構築時の造成土と裏込土で礫を多数含み、燻し瓦や煉瓦、現代の磁器などが混在する。さらに下層の淡褐色砂層は宅地造成以前の堆積層で、粗砂が目立ち川原石を多く含むため流水による堆積層と考えられる。この層の掘削途中で湧水があり、さらなる掘削は行わなかった。遺構・遺物はなかった。

(3) 小 結

調査の結果、遺構の確認には至らなかったが、周辺の調査成果も踏まえると古代や中世の遺構面や地山はさらに深くなると考えられる。周辺の地形復元も含め、今後の調査が期待される。

Ⅲ 大野城跡の確認調査

Ⅲ 大野城跡の確認調査

1 第54-2次調査(クロガネ岩城門の確認調査)	19
(1) 調査概要	19
(2) トレンチ設定と基本層序	22
(3) 各トレンチの調査成果	22
(4) 出土遺物	32
(5) 小 結	33
2 第5-3次調査(増長天地区礎石群の確認調査)	38
(1) 調査概要	38
(2) トレンチ設定と基本層序	40
(3) 調査の内容	40
(4) 出土遺物	47
(5) 小 結	47

1 第54－2次調査（クロガネ岩城門跡の確認調査）

（1）調査概要

経緯 大野城は大宰府政庁跡の北に聳える四王寺山に築かれた古代の山城で、『日本書記』には白村江での敗戦から2年後の天智天皇4年（665）に亡命百濟高官である達率憶礼福留・四比福夫の指導の下、築城されたことが記される。城域は東西約1.5km、南北約3.0kmで、土塁や石塁などで連なる城壁は外周約6.6km、内周土塁も含めた総延長は約8.4kmにも及ぶ。城門跡は早くから宇美口・太宰府口・坂本口・水城口の4か所が知られ、とくに太宰府口城門跡の発掘調査では3段階の変遷が明らかにされ、城内の建物跡と同じく7世紀後半には掘立柱形式であったものが、8世紀前葉に礎石形式で瓦葺きへと変遷することが判明した。

その後、平成15年7月19日の集中豪雨による災害の復旧事業に伴う発掘調査において、原口・観世音寺口・北石垣・小石垣城門の4ヶ所が新たに発見された。

今回報告を行うクロガネ岩城門は、こうした発見を機に改めてその重要性が認識された絵図『太宰府旧蹟全図北』の図中に「クロカ子岩 門ノ石スエ」とある記述を手掛かりとした現地踏査によって発見された9カ所目の城門跡で、唐居敷石材や門道部の石積みなどが確認された。

クロカ子岩

しかし、あくまで現況の踏査による情報しかなかったため、将来的な調査研究あるいは整備・活用に向けた基礎的な情報を得るため、考古学的な発掘調査を行うこととなった。

経過 クロガネ岩城門跡の発掘調査は、平成23年度の大宰府史跡調査研究指導委員会において調査方針を諮り、了承を得た上で、平成24年度に着手した。調査計画は、城門部の構造解明だけではなく、周辺の土塁線との関係や、城門とその周辺の動線の復元など、広い視点で城門を捉えることを目的とした。

調査は平成24年度に城門部から着手したが、門道部に大量の石材が崩落しており、人力による掘削であったため作業が難航し、周辺部の調査には至らなかった。そこで、平成25年度に改めて城門周辺部の調査区について調査を行うこととし、調査名称も「大野城跡第54－2次調査」と改めた。調査は10月1日に開始し、城門西側の土塁線を把握するため8・8－2トレンチを調査した。その後、城門背後の9・10トレンチ、城門前面の3・5トレンチ、城門南西部の4トレンチ、城門東側の11・12トレンチへと調査を進めた。そして、平成26年2月28日にラジコンヘリ（ドローン）による空中撮影を行い、調査区ごとの写真撮影と実測図化などを終えて、平成26年3月31日には全て埋め戻し、調査を終了した。調査面積は71.06㎡である。

調査では、城門門道部や前面の崩落状況、城内への通路や土塁線に伴う通路、土塁頂部の石敷きの存在など、クロガネ岩城門の構造解明に向けて基礎的な情報を得ることができた。

位置 調査地は大野城跡の北西側の土塁線上に位置する。百間石垣からは直線距離で西に約200m、屯水からは直線距離で北東に約350mの地点である。標高は城門の通路面が約303m、城門西側の土塁頂部が約307mで、百間石垣脇に推定される宇美口城門とは100m近くの高差がある。地番は、糟屋郡宇美町大字炭焼字内野谷出合切1100－1番である。

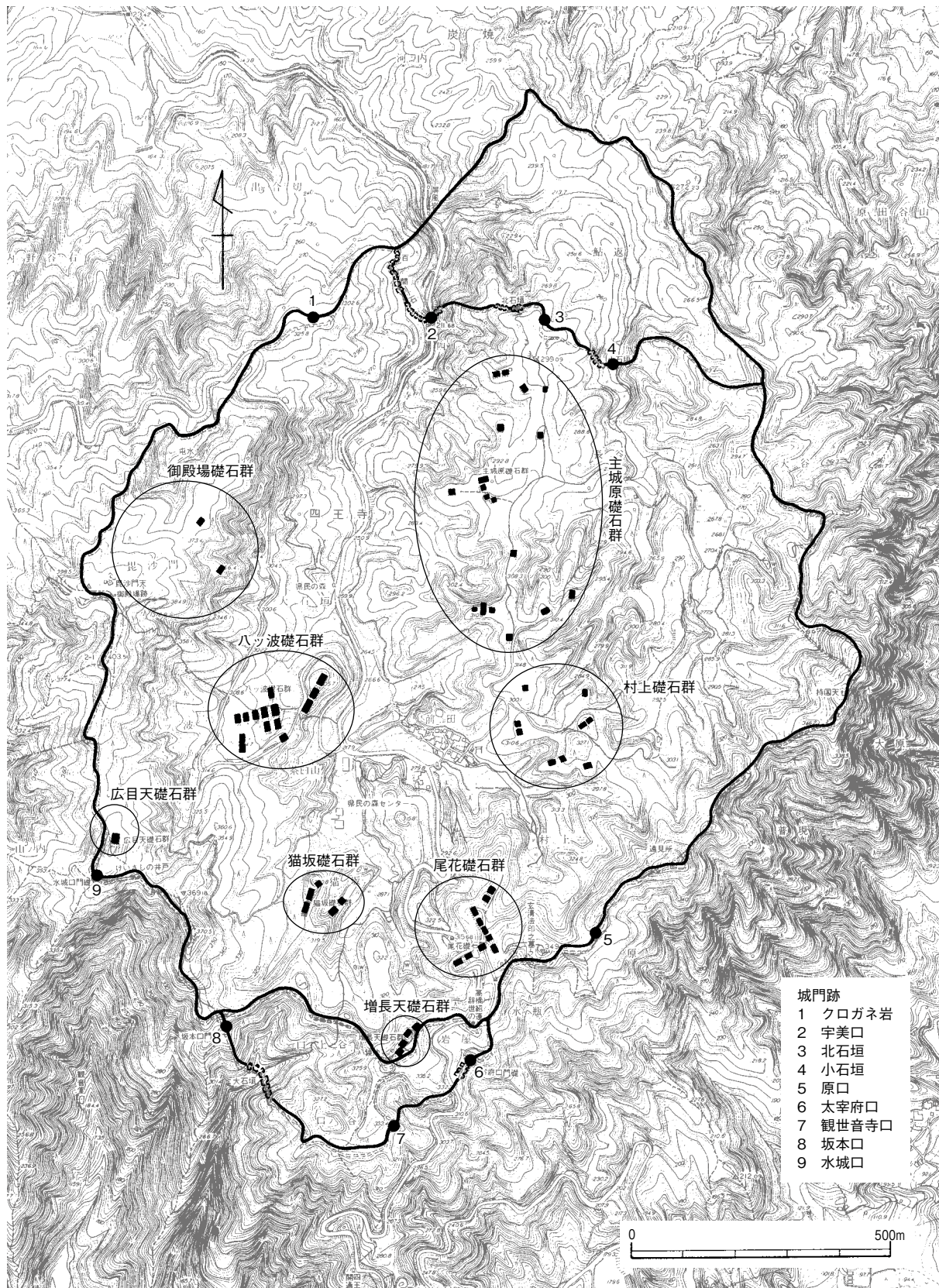


Fig.16 大野城跡全体図 (1/10,000)

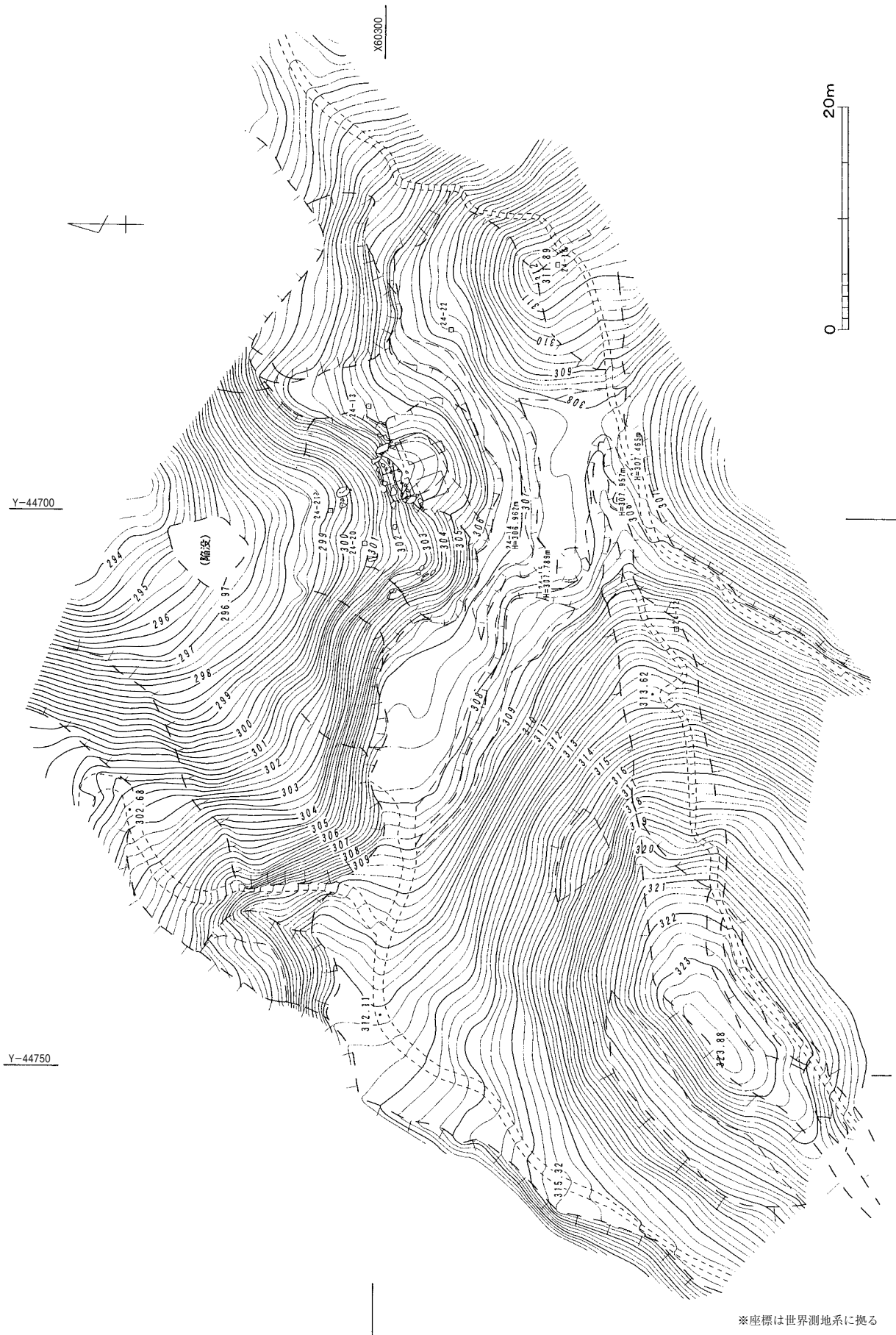


Fig.17 クロガネ岩城門周辺地形測量図 (1/500)

(2) トレンチ設定と基本層序 (Fig.18)

調査箇所は、城門部（3・4トレンチ）・城門前面（5・6トレンチ）・城門背後（9・10トレンチ）・城門周辺土塁（8・8-2・11・12トレンチ）などである。以下、各トレンチの設定目的・規模については略述する。

3トレンチは、城門から城門前面にかけての遺構の遺存状況や崩落状況の把握を目的とし、平成24年度に調査した2.0m四方を再掘削するとともに、さらに北側へ2.8m拡張した。最終的な調査区は長さ4.8m、幅2.0mである。4トレンチは、城内側への通路が不明確であったことから、平成24年度の東西2.0m、南北2.5mの調査区を再掘削するとともに、南に1.0m、西に1.0m、東に0.5m拡張して、遺構の状況を確認した。最終的な調査区は3.5m四方の規模である。5トレンチは、城門前面の遺構の遺存状況の確認と、唐居敷がどのような状況で転落しているのかを把握するため、長さ4.0m、幅1.0mの規模で設定した。6トレンチは、城門西側の崩落部にやや大きな石が露出しており、何らかの遺構が遺存している可能性があることから、長さ2.0m、幅1.0mの調査区を設定した。

8トレンチは、城門西側の平坦面の状況を把握するため、傾斜する地形に直交する方向で、長さ8.0m、幅1.0mの規模で設定し、版築土塁を確認した北側は長さ4.0m、幅1.0mの範囲で拡張した。また、8トレンチで見つかった土塁頂部の石敷きが周辺に及ぶものかどうかを把握するため、8トレンチと平行させて長さ3.0m、幅1.0mの8-2トレンチを設定した。

9トレンチは、城門背後の尾根鞍部に平坦な地形があることから、何かしらの遺構が存在する可能性が高いことから、長さ4.0m、幅2.0mで設定し、その後南西部を長さ2.0m、幅1.0mの範囲で南側に拡張し、さらに南へ0.5m四方拡張した。10トレンチは、城門背後の尾根鞍部の最も低くなる箇所と、城門のすぐ背後にある犬走り状の地形の成因を把握するため、長さ7.0m、幅1.0mの範囲で設定し、北側を長さ0.4m、幅0.5m分だけ拡張した。

11トレンチは、城門から城門西側の土塁部への取り付きや、城内への通路の把握を目的に、長さ5.3m、幅1.2mで設定した。12トレンチは、城門北西側にある緩傾斜地の状況を把握するため、長さ5.75m、幅1.0mで設定したが、樹根により一部未掘である。

(3) 各トレンチの調査成果

本項では、各トレンチの基本層序や遺構等の検出状況を報告する。なお、1・2トレンチについては追加調査を行っていないので、前回報告を参照いただきたい。

3トレンチ (Fig.19・20, PL. 6・7)

城門部の表土を剥ぐと、城門の崩落に伴う崩落土（2～8層）が厚く堆積しており、途中に間層（13層など）があることから、廃絶に伴い一度に埋まったのではなく、繰り返し堆積しながら埋没していったことが窺える（B-B'土層）。この崩落土の下層には整地層（17・18層）がみられる。一方、城門前面部も表土を剥ぐと、崩落による堆積土（11～16層）が厚く堆積しているが、その下層は明褐色の地山となる（D-D'土層）。

平成24年度の調査では城門西側の側壁の基底部がどの程度まで埋まっているのかが不明であ

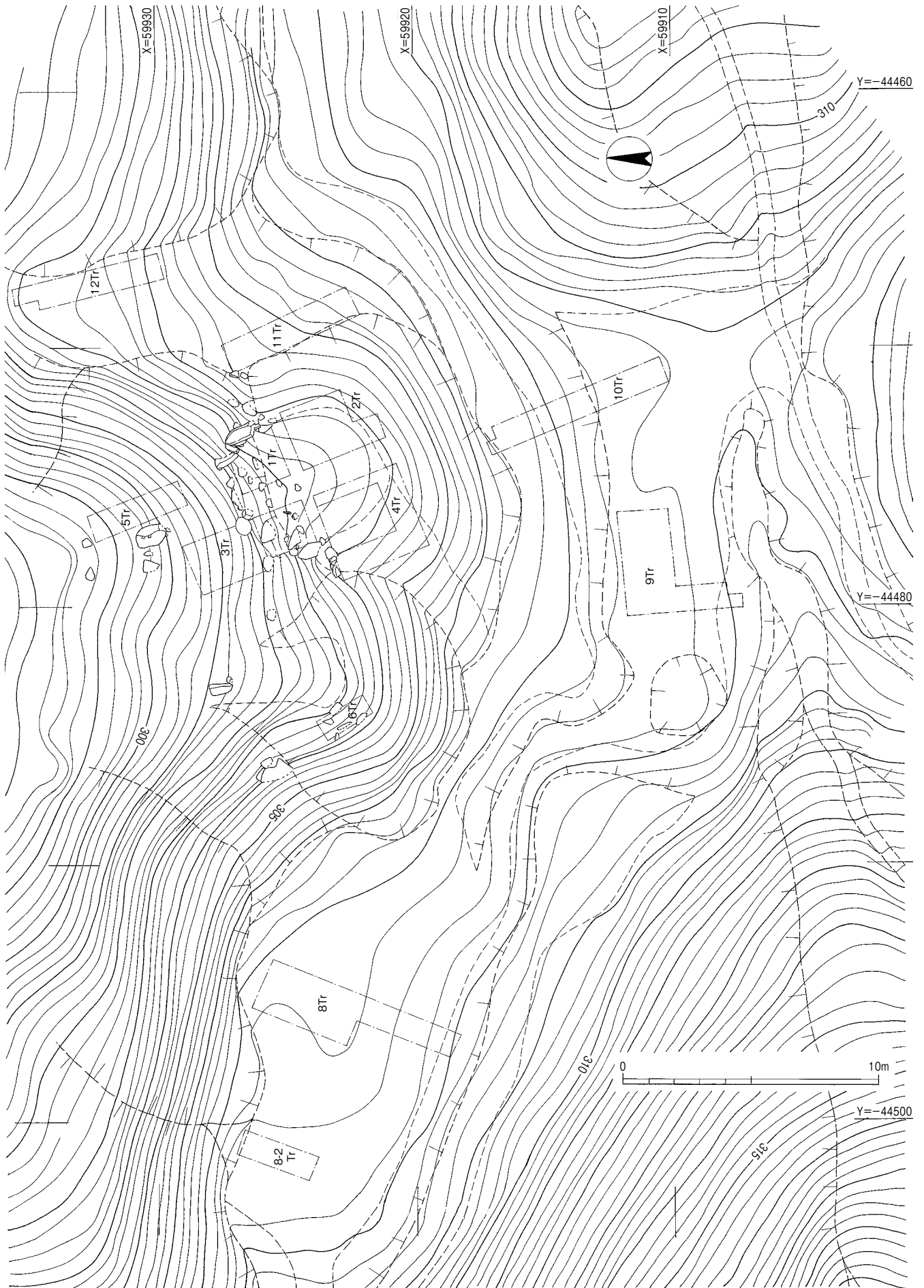


Fig.18 第54-2次調査トレンチ配置図 (1/200)

**流水による
抉** ることから、側壁に直交する方向にサブトレンチを設けて掘削した。その結果、床面の中央部は流水によって抉られており、その中に崩落した石材が落ち込んでいる状況を確認した（B - B' 土層）。この中には板状の石材もみられたことから門道部の排水施設であった可能性も推定したが、石材は方向がばらばらであることから、崩落した石材と判断した。流水によって抉られた深さは最大約 30cm である。城門前面部の崩落もこうした流水などによる影響が原因か。

懸門構造 城門側壁は、今回の断ち割り調査により、高さ 1.6 m ほどが遺存していることが判明した。最上位に積みされている石材は崩落に伴い原位置を失っている可能性があるが、下半部は当初の石積みがよく残る。側壁の長さは後述する 4 トレンチとあわせて約 2.3 m が遺存しており、東側の側壁の位置とも丁度揃う。下部の二段については石材を立てて積んでおり、その上部は平積みを意識しているようである。同じ状況は東側の側壁にもみられ、1 トレンチでは最下段の石材を立てて、その上は平積みしている。こうした工法は古墳時代の横穴式石室にみられる腰石の工法とも類似し、在地の伝統的な工法が用いられていた可能性もある。

段状加工 なお、城門前面の構造については懸門構造になる可能性が高く、全面の石積みや柱穴などが残っている可能性もあったが、斜面には何ら痕跡を残していなかった。ただし、崩落部の法面には城門を設置するために盛られた整地層が若干残っていることが判明した（C - C' 土層参照）。法面正面の観察しか行っていないが、精緻な版築土ではないがある程度層状に盛土している。法面は一定の角度で傾斜しているにもかかわらず、盛土が残っている部分と残っていない部分があることから、地山を段状に加工した後に盛土を行っている可能性が考えられる。したがって、ある程度の傾斜地を活かして地山を段切り加工し、盛土によって平坦面を形成してから城門を構築している状況が窺え、周辺に残る地形も考慮すれば懸門構造となろう。

4 トレンチ (Fig.19・20, PL. 7・8)

3 トレンチと同様に、表土の下には堆積土と間層が幾つか確認することができ、堆積を繰り返しながら徐々に埋没していったことが窺える（F - F' 土層～I - I' 土層）。なお、前回報告では通路部で出土した石材の上面が 13・14 層の上面で揃うことから石敷きによる路面が形成されていた可能性を指摘した。しかし、今回の調査によりそれらの石材はいずれも側壁の崩壊に伴うものであることが判明した。この点については前報告を訂正したいが、13・14 層の直上から土器類がまとまって出土することから、崩落後に一定期間、面をなしていたことは確かである。

**場内への
路通** ところで、城内に至る通路に関しては、東側の 2 トレンチで通路に伴う石列を確認しているが、当トレンチでは石列などの構築物は確認できなかった。ただ、城内側に向かって斜め方向に通路上の窪みを確認することができた。不整形で小さなテラスが連続するような構造で、流水による改変を受けている可能性もあるが、城内への通路（もしくはその名残り）とみて良いだろう。

城門の石積みに関しては、当トレンチの北壁あたりで終わるようで、その南側には石材を据えた痕跡は一切確認できなかった。この位置は概ね東側の側壁の終わる箇所と合致する。

軒丸瓦出土 当トレンチからは、堆積土から土器片が出土したが、石積みの崩落部から単弁蓮華文軒丸瓦の破片が出土したことが特筆される。この瓦は 10 層中に含まれるが、門道部内ではなく石積みの上半部に近い位置で出土し（H - H' 土層）、城門の屋根に近い箇所から出土している。

5 トレンチ (Fig.21, PL. 8)

表土を剥ぐと、灰茶褐色から茶褐色を呈する粘質砂（2 層）が厚く堆積しており、暗褐色粘

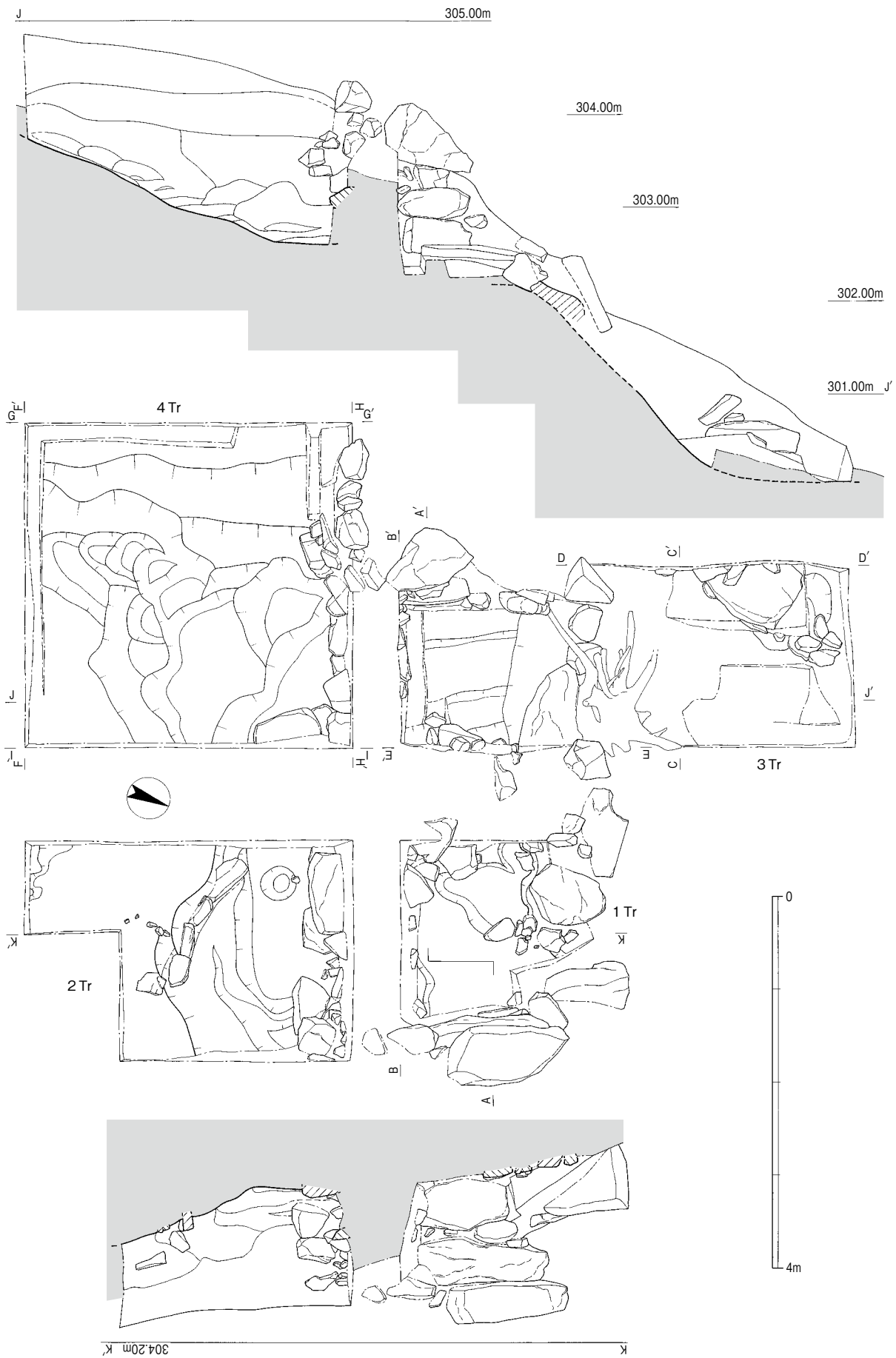


Fig.19 1～4トレンチ実測図 (1/60)

質砂（3層）や暗褐色粘質砂（4層）なども崩落時もしくはその後の堆積により形成されたものである。その下層は、赤褐色から暗赤褐色の粘質土の地山で、ほとんど直線的な傾斜面をなし、遺構の掘り込みや版築土等の存在は一切確認できなかった。また、転落している唐居敷石材は2層の堆積に伴うことが判明した。

平成24年度の第54次調査の段階で、城門前面が大きく崩落していることは判明していたが、当トレンチの調査により、少なくとも唐居敷石材が転落している付近は、地山が露出するまで崩落している状況であった。そのため、城門前面部の構造に関する痕跡は一切確認できなかった。

6 トレンチ (Fig.21, PL. 8)

花崗岩の岩盤

調査前には暗渠などの石組が存在する可能性も考えられたが、調査の結果、露出していた石は花崗岩の岩盤で、節理に沿って生じた自然の割れが石組様にみえていたことが判明した。また、表土を剥ぐと黄褐色土と灰褐色土みられるが、これは後世の堆積層で、版築土のような人為的な盛土は確認できなかった。周辺の地形測量により、6トレンチを設定した箇所は地滑りに特徴的な円弧滑りの地形が明確であることから、土塁は岩盤が露出するまで完全に崩落し、その後徐々に堆積した状況と推定される。あるいは版築土塁と岩盤との境界に雨水等が浸透して表層崩壊のような状況を引き起こした可能性も考えられよう。

8 トレンチ (Fig.21, PL. 5・9)

表土を剥ぐと堆積土と間層が繰り返して堆積している状況が確認でき（2～6層）、その下が遺構面もしくは地山（花崗岩の岩盤）となる。

版築土塁

トレンチの北側では、トレンチ北端から3.45mほどの間に版築土塁を確認した。断ち割り調査により、版築土は厚さ5～15cm程度で、水平に盛土されている状況が明らかになった。また、版築土の中で岩盤が急激に落ち込むことが確認でき、他地点の土塁調査で知られるような段切り加工と推定される。土塁頂部には拳大から人頭大の板状の石材が多数みられた。すでに地表に露出していたものもあり、原位置を失っているものも少なくないが、土塁頂部にのみみられる状況から、土塁頂部は石敷きを行っていた可能性が高い。同様の状況は8-2トレンチでも確認できるほか、トレンチ北側の崩落面にも石材が一定の高さで並ぶ状況が確認できることから、少なくとも城門西側の土塁頂部には石敷きが施されていたようである。

頂部石敷き

通路か

ところで、土塁は内托式によって構築されているが、頂部付近は高さ40cmほど挟築式となる。その内側（城内側）は花崗岩の岩盤が露出しており、幅2.2mほどの平坦面が形成されている。この平坦面は通路としての機能を有していたと推定されるが、岩盤面にはやや凹凸が目立つ。この凹凸を埋めるように6・7層が広がっている。6・7層は基本的に版築土と周辺の地山が崩落して堆積した土とみられるが、上面から土器片が出土するなど、一時期の面を形成していた可能性もある。なお、トレンチの南側は花崗岩の岩盤が傾斜をなして上がっていくため、岩盤を露出させる程度の加工だけに留まっていたようである。

8-2 トレンチ (Fig.21, PL. 5・9)

城門西側土塁の状況を把握するため、8トレンチと平行して設定した。表土の下には旧表土とみられる暗灰褐色砂（2層）が堆積し、その下には背後の山側にある地山が崩落したと推定される黄茶褐色粘質砂（3層）がみられた。その下層が遺構面となる。

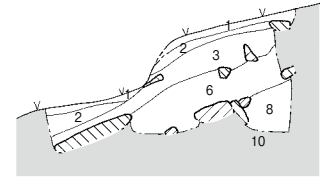
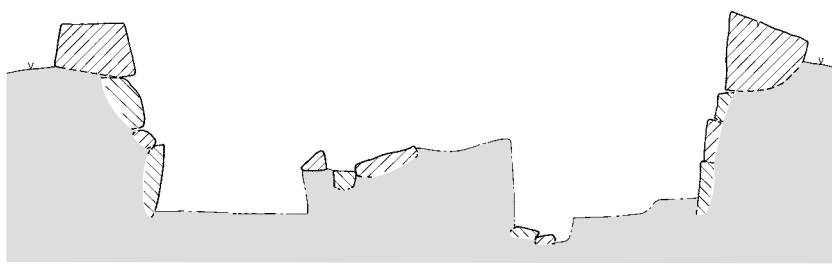
調査の結果、8トレンチと同様に北側で礫が集中して出土した。土塁内側との比高差はほと

A 1・3トレンチ断面

304.20m A'

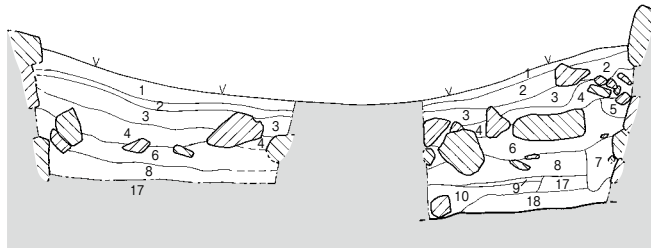
E 3トレンチ東壁土層

303.20m E'



B 1・3トレンチ南壁土層

304.00m B'

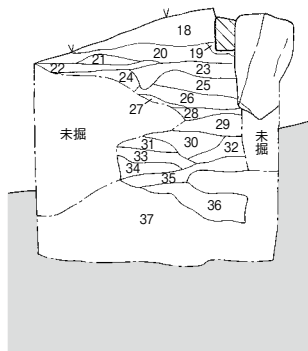


3トレンチ土層

1. 黒褐土 (腐植土, しまりなし) → 表土
2. 灰黄褐土 (ややしまりなし) → 堆積土
3. 黒灰褐土 (ややしまりなし) → 旧表土
4. 灰黄褐土 (ややしまりなし)
5. 暗灰褐土 (しまりなし, 砂質)
6. にぶい灰褐土 (ややしまりなし, やや砂質)
7. にぶい黄褐土 (しまりなし)
8. 明黄褐土 (ややしまる, やや砂質)
9. 灰褐土 (粘質, ややしまる)
10. 黄褐土 (しまりなし)
11. 黄褐土 (しまりなし)
12. 明褐土 (砂質, しまりなし)
13. 灰黄褐土 (砂質, しまりなし)
14. 灰黄褐土 (砂質, 褐色砂が漏れ状に入る)
15. 黄褐土 (砂質, しまりなし)
16. 褐色土 (粘質, しまる)
17. 明褐土 (粘質, かたくしまる, 灰白砂含む)
18. 明褐土 (粘質, かたくしまる)
19. 灰褐土 (粘質, しまる) → 側壁掘り付け
20. 淡灰砂 (しまる, 若干灰褐土含む)
21. 暗灰褐土 (やや砂質, ややしまる)
22. 黄褐土 (しまる, 若干灰褐土混じる)
23. 灰白砂 (ややしまりなし, 褐色粘土粒状に混じる)
24. 茶褐色土 (やや粘質, しまる)
25. 灰黄白砂 (かたくしまる, 若干褐色粘土粒状に混じる)
26. 褐灰砂 (ややしまる, 若干灰褐土が粒状に混じる)
27. 黄灰砂 (ややしまりなし)
28. 明褐土 (粘質, 灰白砂混じる, しまる)
29. 明灰砂 (ややしまる, 若干黄白砂が混じる)
30. 灰白砂 (しまる, 上面に鉄分沈着)
31. 明灰砂 (しまる, やや粘質)
32. にぶい黄灰白砂 (ややしまる, 地山由来の黄白砂含む)
33. 黄白砂 (ややしまりなし, 粒度小さい)
34. 明灰褐土 (やや粘質, しまる)
35. 黄灰白砂 (ややしまる)
36. 灰白砂 (しまる)
37. 褐色土 (粘質, しまる) → 地山

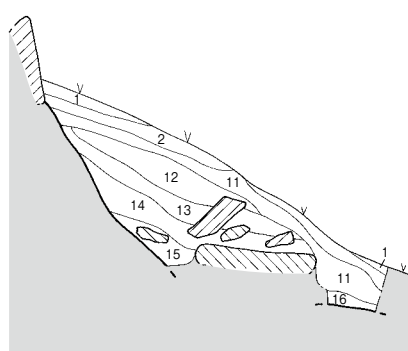
C 3トレンチ法面土層

302.60m C'



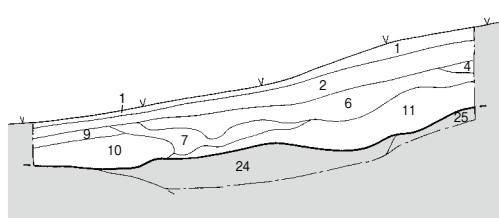
D 3トレンチ前面西壁土層

302.60m D'



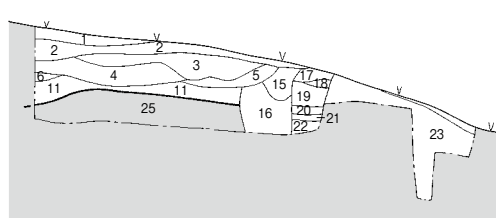
F 4トレンチ南壁土層

305.00m F'



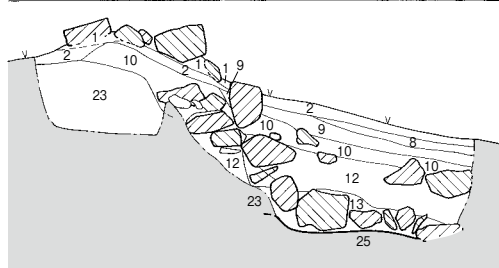
G 4トレンチ西壁土層

305.00m G'



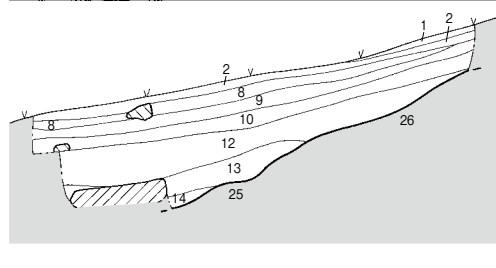
H 4トレンチ北壁土層

304.40m H'



I 4トレンチ東壁土層

304.20m I'



4トレンチ土層

1. 黒褐土 (表土, 腐植土, しまりなし) → 表土
2. 暗灰褐色土 (しまりなし)
3. 黄褐色土 (しまりなし, 黒褐土混じる)
4. 黒褐色土 (しまりなし)
5. 黒灰褐色土 (しまりなし)
6. 灰黄褐色土 (しまりなし, 黒褐土混じる)
7. 黒灰褐色土 (しまりなし, 旧表土由来)
8. 暗灰黄褐色土 (ややしまりなし)
9. 黒灰褐色土 (しまりなし, 旧表土) → 旧表土
10. 黄褐色土 (しまりなし, 黒褐土混じる)
11. 黄褐色土 (ややしまりなし, 砂質, 若干炭含む)
12. 明褐色土 (ややしまりなし)
13. 黄褐色土 (ややしまりなし, やや砂質)
14. 褐色土 (やや粘質) → 堆積
15. 黄灰色土 (しまりなし) 根掘乱か? 柱の抜取の可能性か
16. 黄茶褐色土 (23層由来の土に黄褐色土が混じる, しまりなし) 旧表土の堆積よりも古い掘り込みか
17. 明褐色土 (ややしまる)
18. 茶褐色土 (ややしまる)
19. 黄褐色土 (ややしまる, 灰褐土と混じる)
20. 灰黄褐色土 (ややしまりなし)
21. 黄褐色土 (ややしまる, 19と近い)
22. 茶褐色土 (ややしまる, 23と近い)
23. 茶褐色土 (しまる, 若干黄褐色土が粒状に混じる)
24. 明黄褐色土 (かたくしまる, 砂質)
25. 明褐色土 (しまる, 粘質)
26. 風化花崗岩

Fig.20 3・4トレンチ実測図 (1/60)

石敷き んどなくなっているが、僅かな高まりをなす版築土塁側のみに石材が集中することから、石敷きと考えられる。8-2トレンチよりも西側の崖面にも石材が露出している箇所があることから、もう少し西側まで石敷きは続くようである。なお、土塁頂部と平坦面との比高差が小さくなっていることから、城門に近くなるほど比高差が増すような構造と推定される。それは城内側の状況が見えないようにするための工夫といえるかもしれない。土器小片が若干出土した。

9トレンチ (Fig.22, PL.10)

表土を剥ぐと、堆積層となり、これを全て除去すると花崗岩の岩盤となる。

調査の結果、花崗岩の岩盤を20cmほど掘り下げた平坦地が調査区の南側を斜めに横切るように、広がっていることが確認できた。また、その平坦面からは20～60cm大の石が多数出土した。全て遺構面から浮いた状態で、疎らであることから石敷きなどではないと考えられるが、

通路か その性格は不明である。この一段低い平坦面は、城門背後の鞍部を抜けていく通路に伴う造作とみられ、4トレンチで確認した通路を上がってくると、8トレンチのある西側平坦面と9トレンチのある鞍部側へと枝分かれするような動線であったと推定される。

なお、この平坦面では明確な掘り込みは伴わなかったが、焼土と炭化物が集中する箇所(図中網掛け部)があった。時期等は不明である。図化は困難であるが土器小片が出土した。

10トレンチ (Fig.22, PL.10)

城門の主軸に合わせて伸ばしたトレンチで、表土下は全て堆積土で、整地層などはなく花崗岩の岩盤へと至る。調査の結果、南側は平坦面を形成していて、城内側の岩盤が15cmほど低くなっていることから、9トレンチの通路状の平坦面と同じような状況であったと推定される。一方、城門に近い北側は、南側の平坦面とは1m近くの比高差を持って低くなり、幅1.2mほどの狭い平坦面を形成している。さらに北側は徐々に城門へと下っていく。この狭い平坦面は、地形測量の段階でも認識していて、城門の背後をめぐっていることから、犬走り状の通路であったと推定される。図化は困難であるが、土器小片が出土した。

犬走り状の通路

11トレンチ (Fig.23, PL.10)

表土の下は、いずれも地山に由来する締まりのない黄褐色系の色調を呈する堆積層で、その下層は花崗岩の岩盤もしくは黄褐色土の地山となる。調査の結果、調査区の西側では地形の落込みを確認した。これは階段状の造作や溝状の掘り込みではなく緩やかに窪む地形であるが、城門部の2トレンチを抜けて入ってくる通路の延長部とみられる。トレンチの北側にみられる石材は、南側では出土しないため、城門部の石積み崩落したものと推定される。

通路か

12トレンチ (Fig.23, PL.11)

樹根により確認できなかった部分もあるが、表土の下は全体に暗灰褐色の堆積層がみられ、南側には明黄灰色土も堆積しているが、その下層が遺構面となる。

版築土塁 トレンチの北半部は版築土塁で、厚さ5～15cmほどの水平な積土がみられる。トレンチの東側には地滑りの痕跡がみられるため、土塁の頂部は流失している可能性が高い。トレンチの中ほどには長方形の土坑SK01が掘り込まれている。長さ1.25m以上、幅0.58m、深さ0.32mを測り、版築土塁を切り込む。出土遺物が明確ではなく、性格は不明である。版築土塁はこの土坑より南側のあたりから始まっているようで、トレンチ南端部は花崗岩の岩盤が露出する。

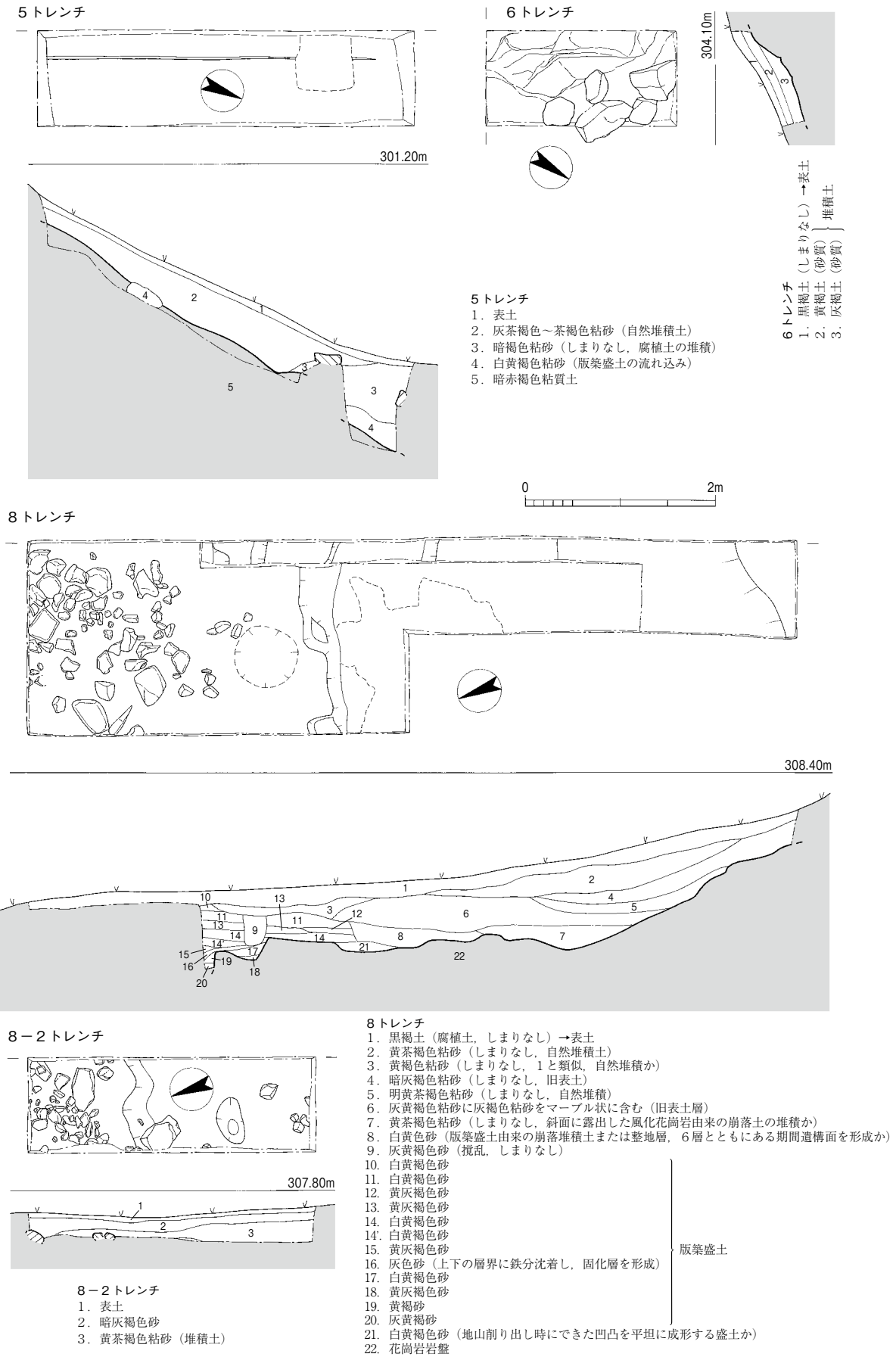
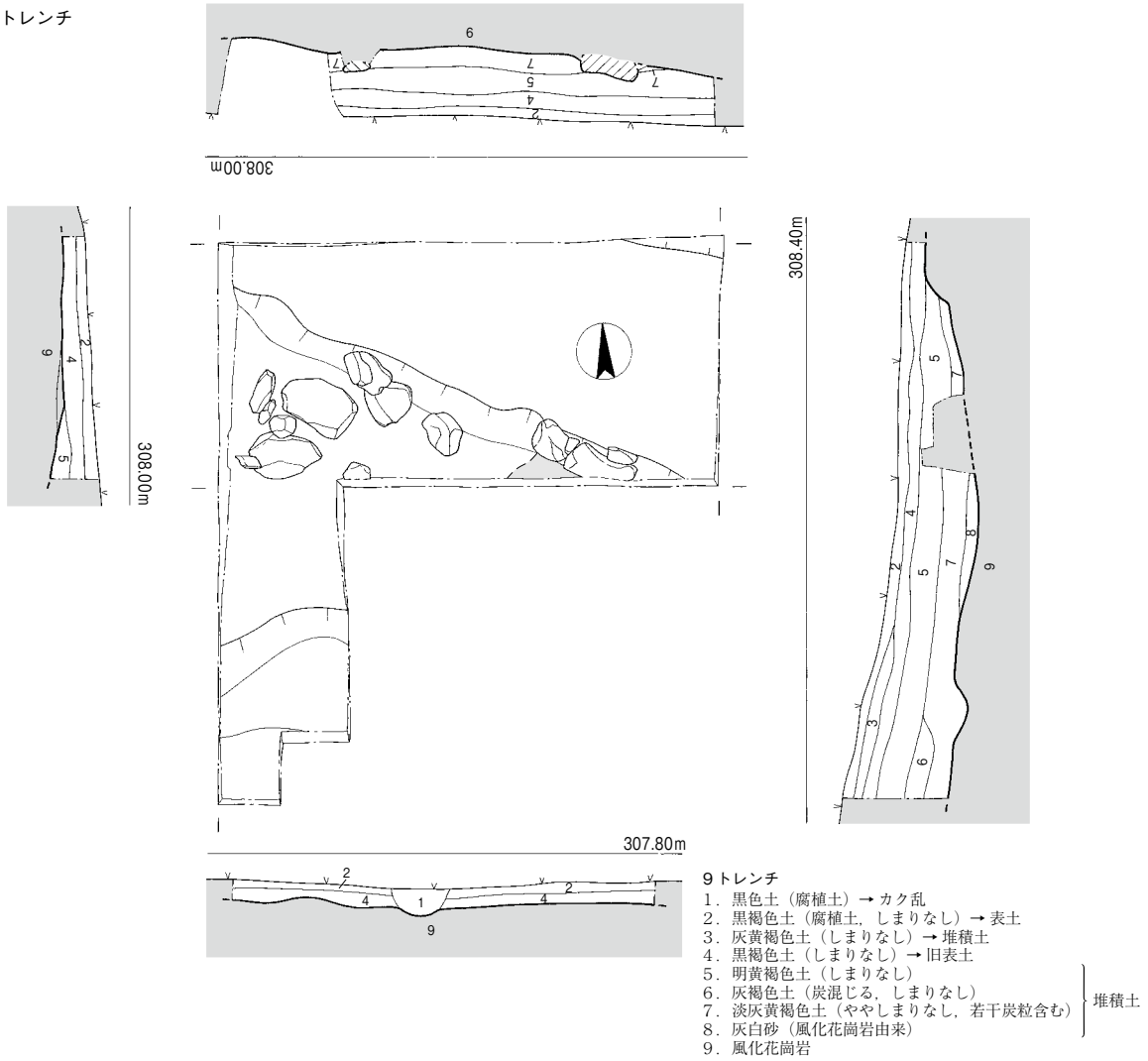


Fig.21 5・6・8・8-2 トレンチ実測図 (1/60)

9トレンチ



10トレンチ

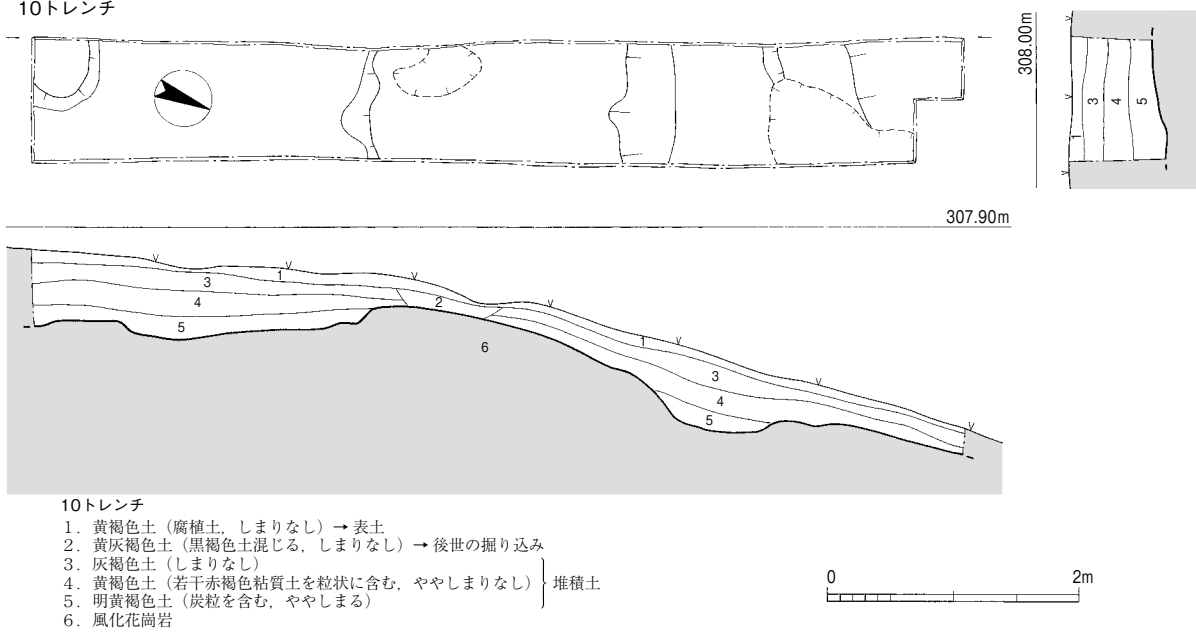
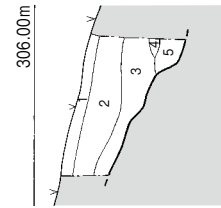
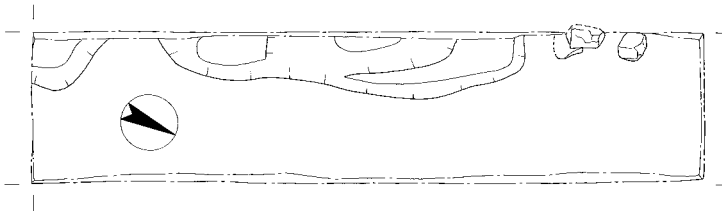
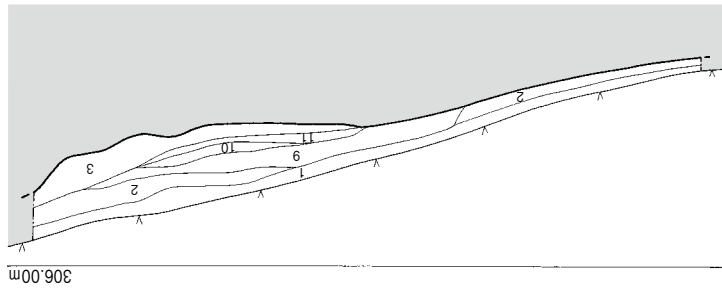
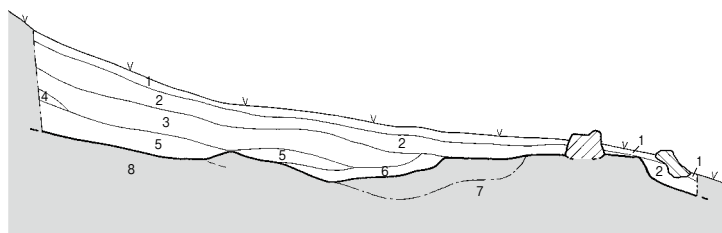


Fig.22 9・10トレンチ実測図 (1/60)

11トレンチ



306.00m



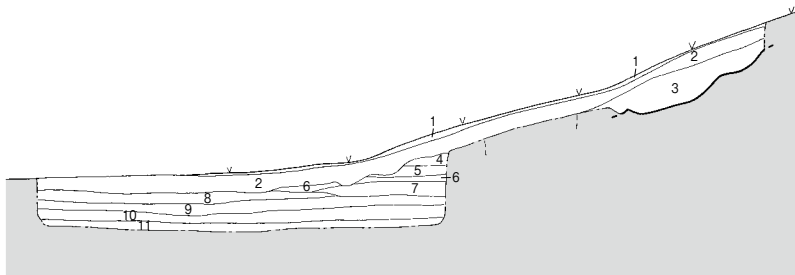
11トレンチ

- 1. 黒褐色土 (表土, 腐植土, しまりなし)
 - 2. 暗灰褐色土 (しまりなし)
 - 3. 明灰黄褐色土 (しまりなし)
 - 4. 灰褐色土 (ややしまりなし)
 - 5. 明灰褐色土 (砂質, しまりなし)
 - 6. にぶい灰褐色土 (砂質, しまりなし)
 - 7. 黄褐色土 (地山, 砂質)
 - 8. 風化花崗岩 (地山)
 - 9. 明灰黄褐色土 (しまりなし)
 - 10. 黒褐色土 (しまりなし)
 - 11. 灰褐色土 (ややしまりなし, やや砂質)
- } 堆積土
} 地山
} 堆積土

12トレンチ

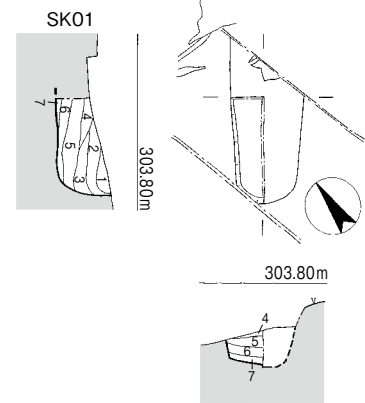


304.60m



12トレンチ

- 1. 黒褐色土 (表土, 腐植土, しまりなし)
- 2. 暗灰褐色土 (しまりなし)
- 3. 明黄灰色土 (砂質, ややしまりなし)
- 4. 黄白色砂 (ややしまる, 若干褐色粘質土が粒状に混じる)
- 5. 淡黄白色砂 (ややしまる)
- 6. 明褐色砂 (ややしまる)
- 7. 灰白砂 (ややしまる)
- 8. 4と同じ
- 9. 明褐色砂 (ややしまる, 褐色粘質土は粒状に混じる)
- 10. 明灰白砂 (ややしまる, 若干褐色粘質土が粒状に混じる)
- 11. 灰白砂 (地山由来の褐色砂含む, しまる)



SK01

- 1. 明黄白砂 (しまる)
- 2. 明褐色土 (粘質, しまる)
- 3. 黄灰色砂 (かたくしまる)
- 4. 灰黄褐色土 (粘質, しまる)
- 5. 明灰白砂 (かたくしまる, 若干鉄分含む)
- 6. 黄灰白砂 (しまる)
- 7. 灰白砂 (しまる)

Fig.23 11・12トレンチ実測図 (1/60)

(4) 出土遺物 (Fig.24, PL. 16)

クログネ岩城門における発掘調査では、城門部に限らず土塁部に設けた調査区などからも土器類などの遺物が出土しているが、大半は細片であり、時期を明確にし得るような遺物は極めて限られる。ここでは第54-2次調査で出土した遺物を報告するが、いずれも小片であるため傾きや径の復元にはやや不安を残す。

単弁軒丸瓦 軒丸瓦(12) 単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、大宰府史跡の瓦型式分類では020A型式に該当する資料である。これまで主城原地区やハッ波地区など建物群の調査でも出土しているが、城門跡では初となる出土事例である。弁は小振りで丸味を持ち、照りむくりがある。間弁は長三角形のような楔形を呈し、中房は3mm程度の円盤形の高まりで、蓮子は欠損している。外区外縁には二条の圈線がみられ、外側が一段高くなる。側面は手持ちヘラケズリされ、瓦当裏面はナデ調整で仕上げる。裏面には丸瓦の接合痕も残っており、瓦当面との接合位置は図上復元した。焼成は堅緻な須恵質で、青灰色を呈する。瓦当の復元径は16.3cm程度である。

平瓦(11) 小片のため、広端部側であるのか狭端部側であるのか判断が難しい。凸面・凹面ともナデ調整を行っており、器壁の厚さは1.5cmとやや薄手である。側面にはヘラ切りによる分割面と分割破面が残り、桶巻作りであることを示す。

須恵器蓋(1) 扁平で直径2.8cmに復元できる撮みを持ち、天井部外面は回転ヘラケズリを行う。返りを有する形態とみられる。9トレンチ2層出土。

須恵器壺(2・3) 2は短頸壺で、第54次調査の4トレンチ明褐色堆積層出土の破片と接合した。

須恵器甕(4) 胴部小片で、外面に平行タタキ、内面に青海波のあて具痕が残る。

土師器椀(5・6) いずれも口縁部片で、5はやや外反気味、6は内湾する形態をなす。坏

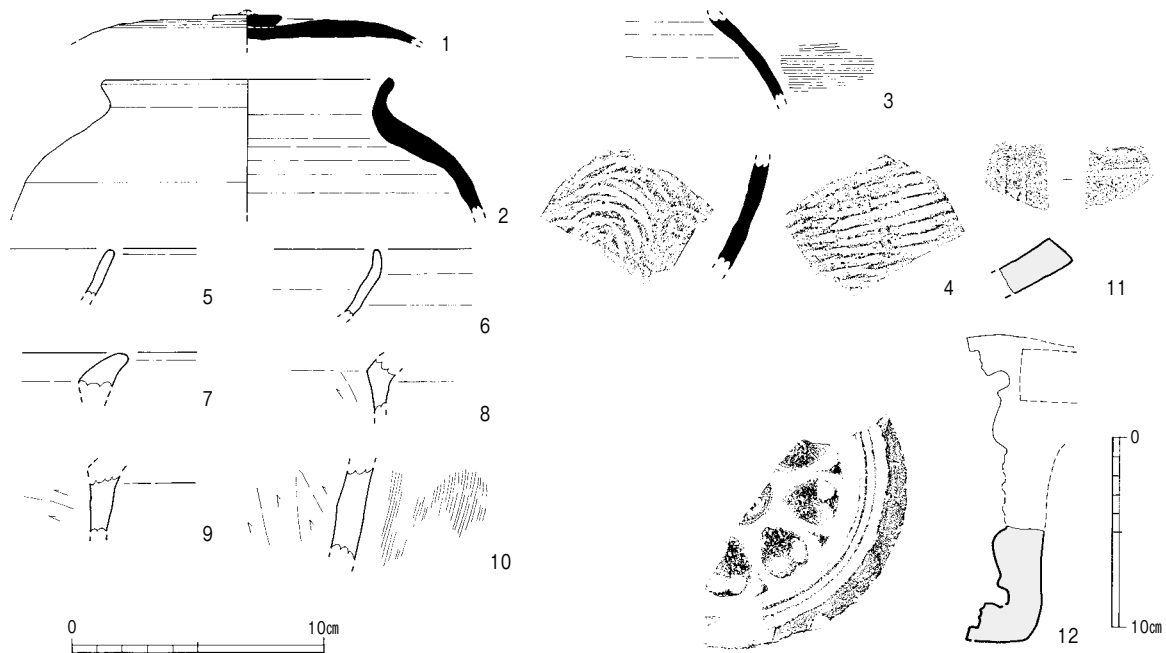


Fig.24 第54-2次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)

の可能性もあるが、焼成や色調が同一地点で出土した椀に似ることから、椀として報告した。

土師器甕（7～10）いずれも小片になっていて接合しないが、7～9については同一個体の可能性が高い。7は口縁部片、8は頸部片、9は頸部付近の胴部片、10は胴部片である。7～9はいずれも頸部が肥厚し、短く外反させる口縁部とみられ、体部内面はヘラケズリを行う。10は外面にタテハケ、内面にヘラケズリを行う。

（5）小 結

1）城門の構造（Fig.25）

調査の結果、クロガネ岩城門の城門部は半分以上が崩落していることが判明したが、辛うじて遺存していた門道部の路面や側壁の石積みなどを元に、本来の構造を推定してみよう。

側壁を基準にすると門道部の幅は約4.25 mを測り、北石垣城門の約4.68 mより一回り小さく、原口城門の約3.24 mよりも一回り大きい規模といえる。門道部の奥行は不明であるが、北石垣城門を参考すると少なくとも7 mはあったと推定される。また、周辺地形から懸門構造と推定できるが、北石垣城門では高さ約1.5 mの石垣が残っていた。そうした規模をもとに断面復元したのがFig.25である。前面の石垣は立地によって異なるだろうが、3トレンチでは、門道部床面から下に2.0 mほどの位置で、崩落部の地山が一度平坦になっており、これを門道部構築時の造成に伴う地山整形の反映とみれば、前面の石積みは高さ2 m程度となる。この門道部床面の構築は3トレンチの崩落面の土層から、版築ではないが層状盛土であることが窺える。

前面の高さ

門道部と前面の段差は以上のように復元できるが、周辺地形はさらに落ちていることから下位には基礎盛土が行われていたと推定される。基礎盛土は、他の地点の調査でも指摘されているように層の単位が厚く、締まりもないことから、版築盛土よりも法面の傾斜が緩やかであったと考えられる。ここでは便宜的に45°程度の傾斜で復元した。さらに、懸門構造の場合、城門前面の石積みの前に梯子などを架けるための空間が必要であることから、基礎盛土上面を幅3.0 mで復元した。ただ、基礎盛土については未確認のため、将来調査により確認する必要がある。

城門と土塁との高低差を示すため、8トレンチ部分での城門西方土塁を模式的に見通したものを破線で表現した。城門路面と土塁頂部との高低差は概ね4.8 mである。土塁は西側に向かって高くなるため単純な比較はできないが、城門が高さ4～5 m程度の建物であるならば屋根の位置は城壁と同じ高さか、それよりも低い可能性がある。城門背後の犬走り状の通路は、土塁背後の通路とほぼ同じ標高で、土塁沿いの通路を城門に下りることなく行き来できるような構造といえる。

ちなみに、現在確認できる唐居敷石材は、欠損により門柱との関係が確認できないが、残存する石材の形態や城内の他の石材からすると、掘立柱に伴う形式の可能性が高いだろう。唐居敷石材の原位置は特定できなかったが、東西の側壁間が4.25 m（約14.2尺）という数値から、図示したような2案を推定復元した。両案の違いは北石垣城門のように門柱が側壁に半ば入り込む構造であるのか否かである。復元に際しては他の城門の調査で得られた数値を参照し、門柱径0.45 m、門柱と軸摺孔の芯々距離0.5 mとして復元した。軸摺孔の芯々距離は、案1が2.75 m（約9.2尺）、案2が3.25 m（約10.8尺）となり、10尺前後の規模になる。

唐居敷石材

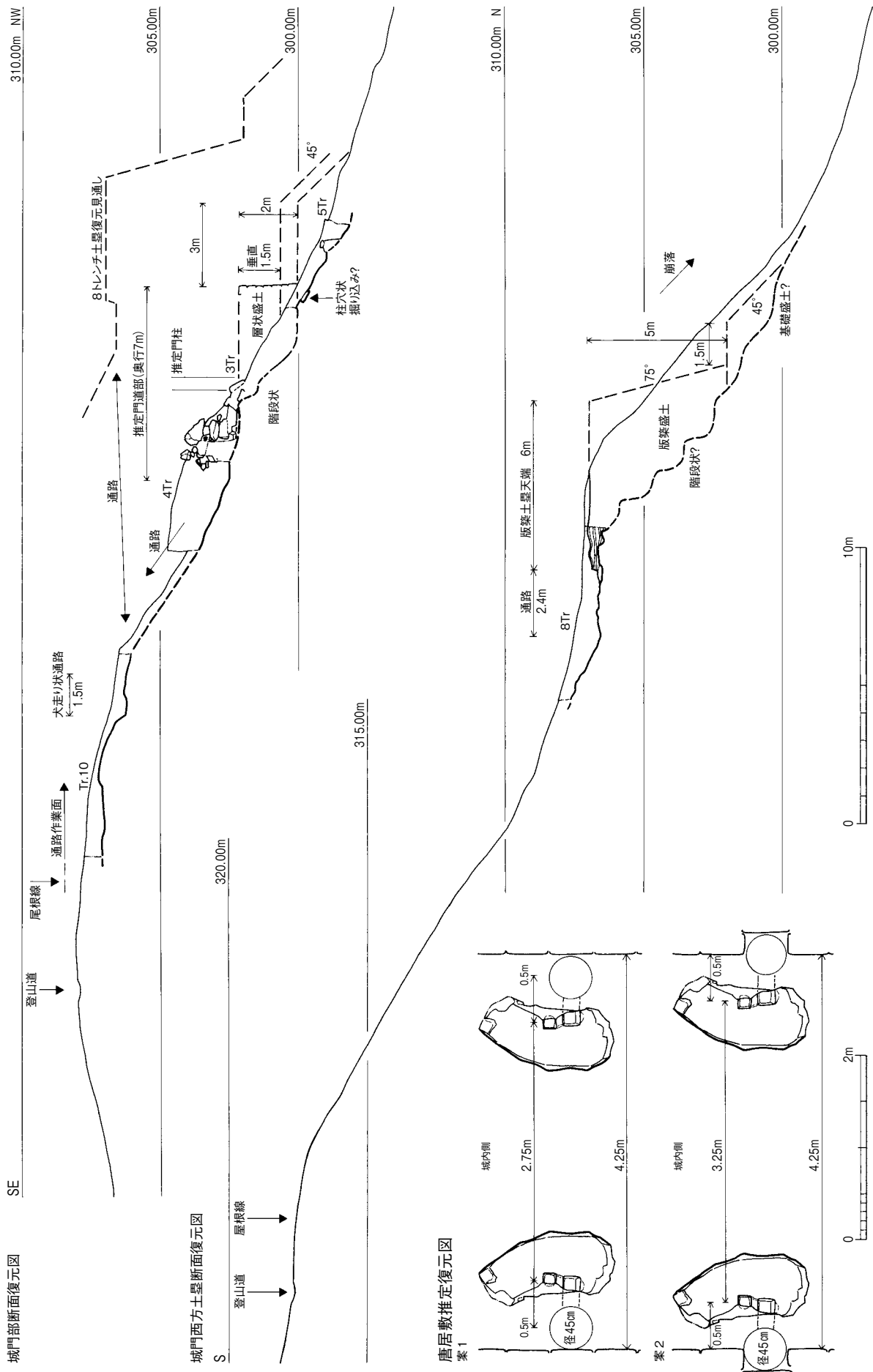


Fig.25 城門・土塁断面復元図及び唐居敷推定復元図 (1/60・1/200)

2) 城門周辺土塁の構造 (Fig.25)

城門西方土塁 8トレンチでは版築土塁の内側の範囲が確定でき、他地点の状況を参考として土塁頂部の幅を6.0 m、高さ5.0 m、城外側法面の傾斜を75°で復元した。その場合、版築土塁の幅は約7.5 mとなる。現況地形の断面との関係から、やはり基礎盛土を想定する必要があるとみられ、犬走り状の平坦面を幅1.5 m程度設け、法面の傾斜は45°程度と推定した。版築土塁の堰板柱はこの犬走り状の平坦面に掘り込んで設置されるものであるが、今回の調査では部分の調査には至らなかった。なお、8トレンチの土塁断ち割り部の岩盤の状況から、岩盤（もしくは地山）を段切り造成してから基礎盛土や版築盛土を構築したと推定される。

城門東方土塁 11トレンチではSX01の付近で地山と版築土塁との境になり、これを基準に版築土塁の頂部幅6.0 m、高さ5.0 m、城外側法面の傾斜75°で復元した。その場合、版築土塁の幅は西方土塁と同じく約7.5 mとなる。また、現況の地形よりもかなり内側に版築土塁の法面が入り込むため、基底部に基礎盛土を伴う可能性が高いだろう。ただし、基礎盛土が推定される付近には岩盤が露出している箇所もあり、基礎盛土を伴わないか、伴っても小規模なものに留まる箇所もあるだろう。なお、ここでも地山は段切り造成されたと推定される。

3) 城門周辺の動線 (Fig.26)

既に各トレンチの報告でも触れているが、改めて整理しておこう。

まず、門道部を抜けてくると、通路は左右に分かれるとみられる。東側の2トレンチでは石列を伴い、西側の4トレンチでは石材がなく、素掘りであったとみられる。左右に分かれた通路を上がると、土塁の背後に沿って設けられた通路へと繋がるが、東西の土塁を行き来するために、幅1.5 m程度の犬走り状の平坦面を削り出している。

城内の通路

また、9トレンチでは岩盤を掘り窪めた通路状の地形が確認でき、城内へと斜め方向に続くことから、城門背後の尾根鞍部を抜けて城内各所へと向かう通路が存在したものと推定される。同様の造成は10トレンチの南半部でもみられ、元々尾根鞍部であった箇所をさらに人為的に造成し、通路として、また有事の際に兵士が集結したり、物資を仮置きするような作業空間として設計されたと推測される。

なお、度重なる地滑りで当時の地形は残っていないが、登城路については、恐らく谷筋を直接登ってくるのではなく、北西側の尾根筋を登ってきたと考えられる。周辺では現在もその尾根に沿って登山路があり、かつての登城路の存在を暗示するように思える。なお、この場合、城門から尾根までの間は、基礎盛土頂部の犬走り状の平坦面を横移動することになる。

登城路

4) 出土遺物からみたクロガネ岩城門の年代的位置

①単弁蓮華文軒丸瓦について

今回の調査では、4トレンチの門道部側壁の崩落部から単弁蓮華文軒丸瓦020A型式の破片が1点出土した。これまで城門跡では複弁蓮華文軒丸瓦のみが出土し、単弁の事例は初めてである (Fig.27)。単弁の軒丸瓦は主城原地区から020A・032・033型式、八ッ波地区から020A型式が出土し、主城原地区の掘立柱建物SB0604・0605 (旧064・065) の柱穴重複部から020A・033型式、SB0604の柱穴から033型式が出土し、建物の重複関係から8世紀前葉の礎石建ち

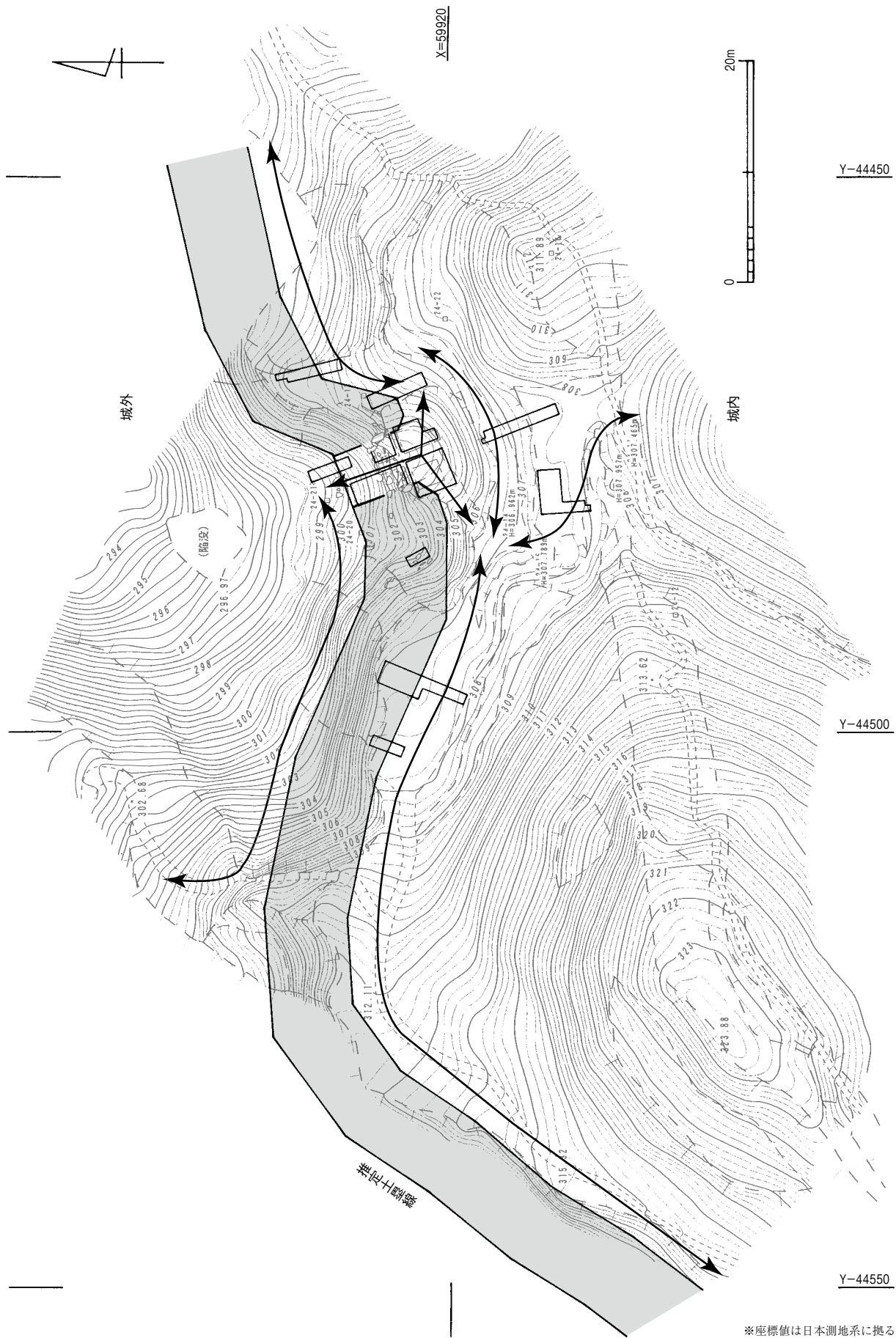


Fig.26 クロガネ岩城門周辺の構造 (1/500)

になる以前の段階に位置づけられる。

そうした状況は、クロガネ岩城門が太宰府口城門 I 期段階に遡る可能性を示唆する。ただし、020A 型式は丸瓦が瓦当部の背後に接合される点で (Fig.24 参照), 瓦当部の上に丸瓦を被せる 033 型式より新しいとみられ, 築城期よりもやや遅れるだろう。

その場合, 文武 2 年 (689) の繕治記事が注目されるが, 記事と関連付けるための考古学的な根拠が乏しく, 現時点では 7 世紀第 4 四半期ごろまでは遡り得る資料とするに留めたい。

②出土土器について

土器はほとんどが細片であり, 年代を推定するのは困難であるが, Fig.24 - 1 は扁平な宝珠撮みを有し, 天井部を回転ヘラケズリする特徴から 7 世紀末から 8 世紀初頭の中に位置付けられよう。

Fig.24 - 2 ~ 4 の壺・甕類は 8 世紀代と推定され, 7 ~ 10 の土師器甕も同じ頃であろう。また, Fig.24 - 5・6 は 10 世紀ごろに下る資料とみられる。あくまで断片的な資料ではあるが, 今回出土した土器からは軒丸瓦の示す太宰府口城門 I 期段階に遡上する可能性があり, 10 世紀ごろには埋没していることを示している。

こうした様相は前回の第 54 次調査と同様であり, 概ねクロガネ岩城門の推移を示すように思われ, 前述の軒丸瓦と同様に土器も 7 世紀末頃を上限とする点は注目され, 築城期よりも一時期新しい段階に城門が設置されたことを推測させる。

一方, 城門の下限については, 宝亀 5 年 (774) に設置された四王院との関係も留意する必要があるが, 門道部の埋没層の下半部からも 10 世紀ごろの遺物が出土していることから, 少なくとも 10 世紀に入る頃までは維持・管理がなされていたと推定される。文献史料でも延喜 5 年 (905) の『観世音寺資財帳』における「大野城山」「遠賀門」などの記述が現状での下限であることも, ある程度符合するように思われる。今後, 城内各所での調査により有益な資料が増加するのを俟ちたい。

型式名	城門			建物			
	太宰府口	原口	クロガネ岩	主城原	ハツ波	村上	増長天
020A			●	●	●		
032				●			
033				●			
223	●						
224	●					●	●
275A	●	●					
290B	●						

※型式一覧により構成

Fig.27 大野城跡出土軒丸瓦型式 (1/8)

築城期より新しい

2 第5－3次調査（増長天地区礎石群の確認調査）

（1）調査概要

経緯 大野城跡は外周約 6.6km の城壁をめぐる、北側と南側には内周土塁を持つ二重構造をなしている。今回調査を実施した増長天地区礎石群は、南側の内周土塁に沿った標高約 339 m の高所に位置する。

城内の各所には礎石建物に伴う礎石が見つかっていて、ある程度のまとまりを持っていることから、各地点の地名や通称などを付して「○○礎石群」と呼ばれている。増長天地区以外に、主城原・八ツ波・村上・尾花・猫坂・広目天・御殿場（毘沙門）地区などが知られており、一部しか発掘調査されていないが、確認されている建物は約 70 棟あり、一部に掘立柱建物が見つかっている。御殿場地区については宝亀 5 年（774）に建立された四王院（四王寺）に関連する建物の可能性もあり、今後の調査でどちらの遺跡に属する建物かを明確にする必要がある。

建物群の多くは、大宰府歴史公園整備計画に基づき、昭和 47 年から昭和 58 年に整備されて、遺跡を訪れる市民に開放されてきた。増長天地区礎石群も昭和 48 年 11 月から昭和 49 年 1 月にかけて発掘調査（第 5 次調査）が実施され、礎石建物などが整備された。しかし、整備完了から 40 年近く経って、整備箇所の劣化や破損が目立つようになり、樹木が繁茂して遺構に影響を及ぼしたり視界を遮ったりするなど、保存・活用の面で多くの課題が生じてきた。

そのため、福岡県教育庁総務部文化財保護課により環境整備事業が計画された。新たな整備を実施するのに際し、かつての調査成果の精査を行ったが、遺構の性格を明確にするために第 5 次調査地の一部を再発掘し、遺跡の情報を整理する必要があった。そこで文化財保護課の協力を得て九州歴史資料館が発掘調査を実施することとなった。

なお、平成 25 年度に SB0403・0404 の北側にある平坦地の確認調査（第 5－2 次）を実施したが、遺構は確認できなかったため、ここでは割愛する。

経過 建物群の発掘調査は平成 26 年 1 月 16 日から着手した。調査は後世に大きく攪乱を受けて建物の下層まで確認が行える SB0403 から開始した。しかし、併行して第 54－2 次調査も実施していたため、平成 25 年度中は SB0403 の調査にとどめて、残る建物跡については平成 26 年度に調査を再開することとなった。平成 26 年度の調査は、SB0402 から着手し、SB0401 へと移り、再び SB0403 の調査へと移行していった。そして、平成 27 年 2 月 20・25 日にラジコンヘリ（ドローン）による空中写真撮影を行い、写真撮影や実測作業を順次行って 3 月 20 日には埋め戻して調査を終了した。調査面積は 148.14㎡である。

調査では、礎石建物の周囲にめぐる掘立柱建物と雨落溝との関係や整地層の状況などについて、多くの知見を得ることができた。

位置 調査地は南側内周土塁の内側に沿う細長い平坦地に位置し、太宰府口城門とは直線距離にして約 110 m、観世音寺口城門とは約 130 m の距離にある。建物群の西側には鏡ヶ池があり、常に水を湛えていることから、大野城に関わる貯水施設の名残とみる意見もある。土塁の切れ目を南に抜ければ観世音寺口城門へと至り、土塁線を西に辿れば坂本口城門や水城口城門へと至る。地番は糟屋郡宇美町大字四王寺字前田 126－1 及び字猫坂 191－1 である。

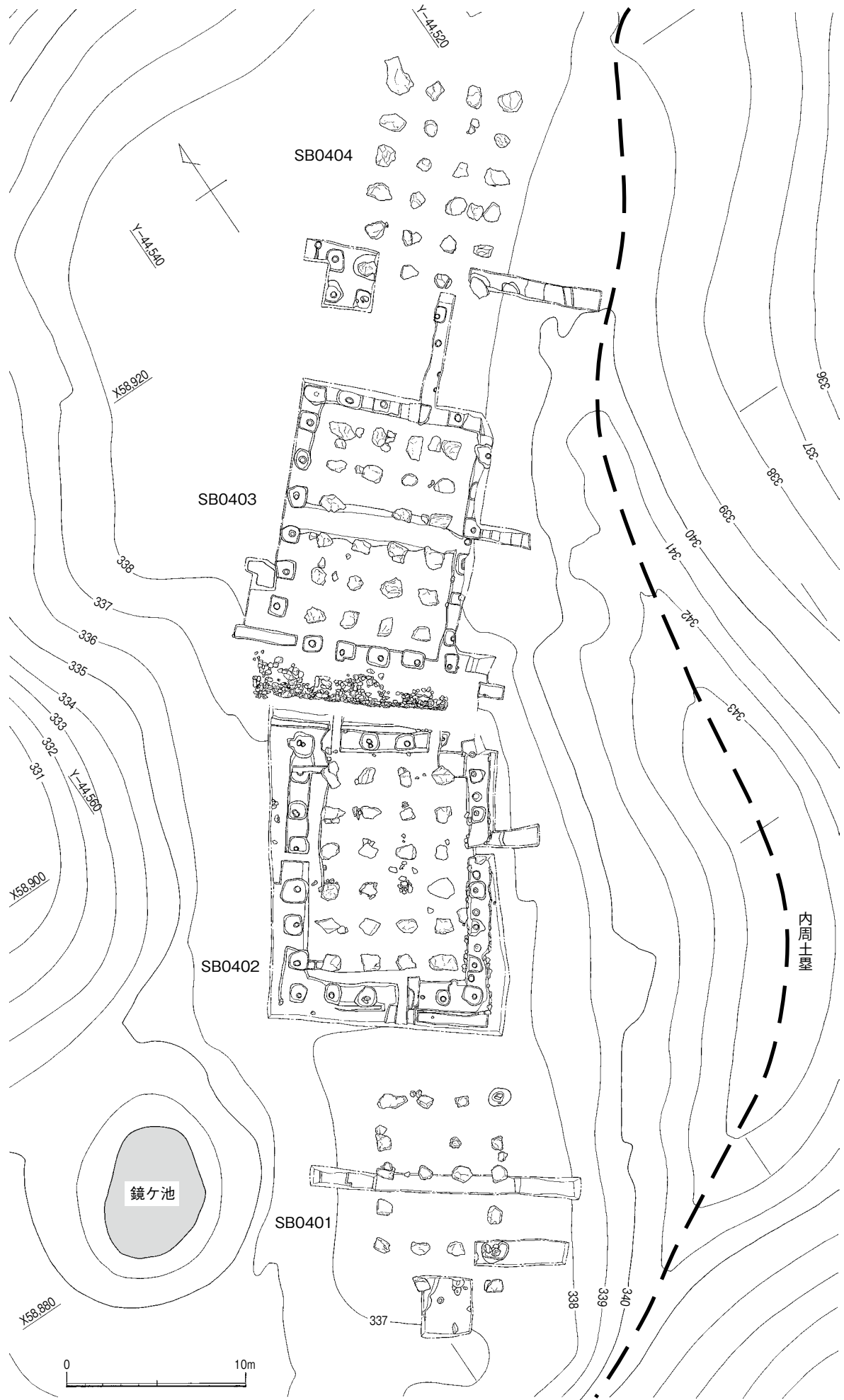


Fig.28 第5次調査遺構配置図 (1/300)

(2) トレンチ設定と基本層序

増長天地区の建物については、第5次調査の段階に南西側からSB041・042・043・044の名称を与えていたが、今回第5－3次調査を実施するにあたり、災害復旧事業の際に改定された名称を採用することとした。新たな名称は、南西側からSB0401・0402・0403・0404である。

当調査では、遺構の保護・保存を前提に、可能な限り第5次調査区の範囲内を再発掘し、未調査地への掘削行為は最小限に留める方針とした。各トレンチの配置についてはFig.29～31に図示したので、参照いただきたい。SB0404は未調査のため平面図のみ掲載した。

なお、SB0404については、昭和49年の整備に伴うアスファルトは劣化が著しいため除去したが、その下にあるコンクリートは非常に良好な状況であったことから、将来的な状態変化を経過観察するためにコンクリートを残すこととなり、発掘調査の対象からは除外した。

さて、当調査区の基本層序を簡単にまとめておこう。表土は多くの場合、昭和49年の整備に伴う張芝も含む腐植層で、その下に整備以前の旧表土がある。これを剥ぐと、灰褐色土や灰黄褐色土などの堆積層がみられ、その下が遺構面となる。かつて整備が実施されている部分では、整備時の整地土の下層がほぼ遺構面となり、保護層はほとんどみられない。

(3) 調査の内容

SB0401 (Fig.29, PL. 12・13)

桁行5間、梁行3間の礎石総柱建物である。柱間は約2.1mの等間である。礎石はいずれも花崗岩の割石を使用し、上面を平滑にするような加工は行われていない。建物が位置する場所は元々、北西側へ向かって傾斜する地形で、1・2・5－2トレンチなど土塁側は岩盤が露出するまで削り込むことで平坦地を形成し、3～5トレンチのある北西側の低い場所は切り土によって生じた排土などを用いて盛土し平坦面を拡張している。

雨落溝 建物の周囲には雨落溝がめぐり、その幅は北東辺が幅0.8～1.0m、南東辺が幅0.9～1.4m、南西辺が幅0.8～1.15mを測る。残存する深さは15cm程度である。北西辺は確認できず、高い側(土塁側)にコ字形にめぐり溝と考えられる。礎石との芯々距離は1.5～1.8m程度である。

雨落溝瓦片が出土したがごく少量であり、瓦溜りを形成するような状況ではなかった。ただし、第5次調査の際に上層を掘削しているため、当時がどのような状況であったのかは不明である。第2トレンチの南東端付近には瓦を多数含む堆積層が残っており、雨落溝の最終埋没層には多量の瓦が堆積していた可能性がある。

なお、3トレンチでは岩盤の一部が地表下2.35mほどまで下がっているが、一部の確認に留まるため、その性格については不明である。

SB0402 (Fig.30, PL. 12～14)

桁行5間、梁行3間の礎石総柱建物である。柱間は2.1mの等間で、礎石は花崗岩の割石を使用する。周囲には側石を伴う幅1.1～1.2m程度の雨落溝(溝A)をめぐらせるが、第5次調査では雨落溝の下層に掘立柱列が確認された。柱穴は礎石列と軸を揃えて配置されており、礎石建物とは一連の構築物であると考えられ、様々な機能が推定されてきた。今回の調査では、こ

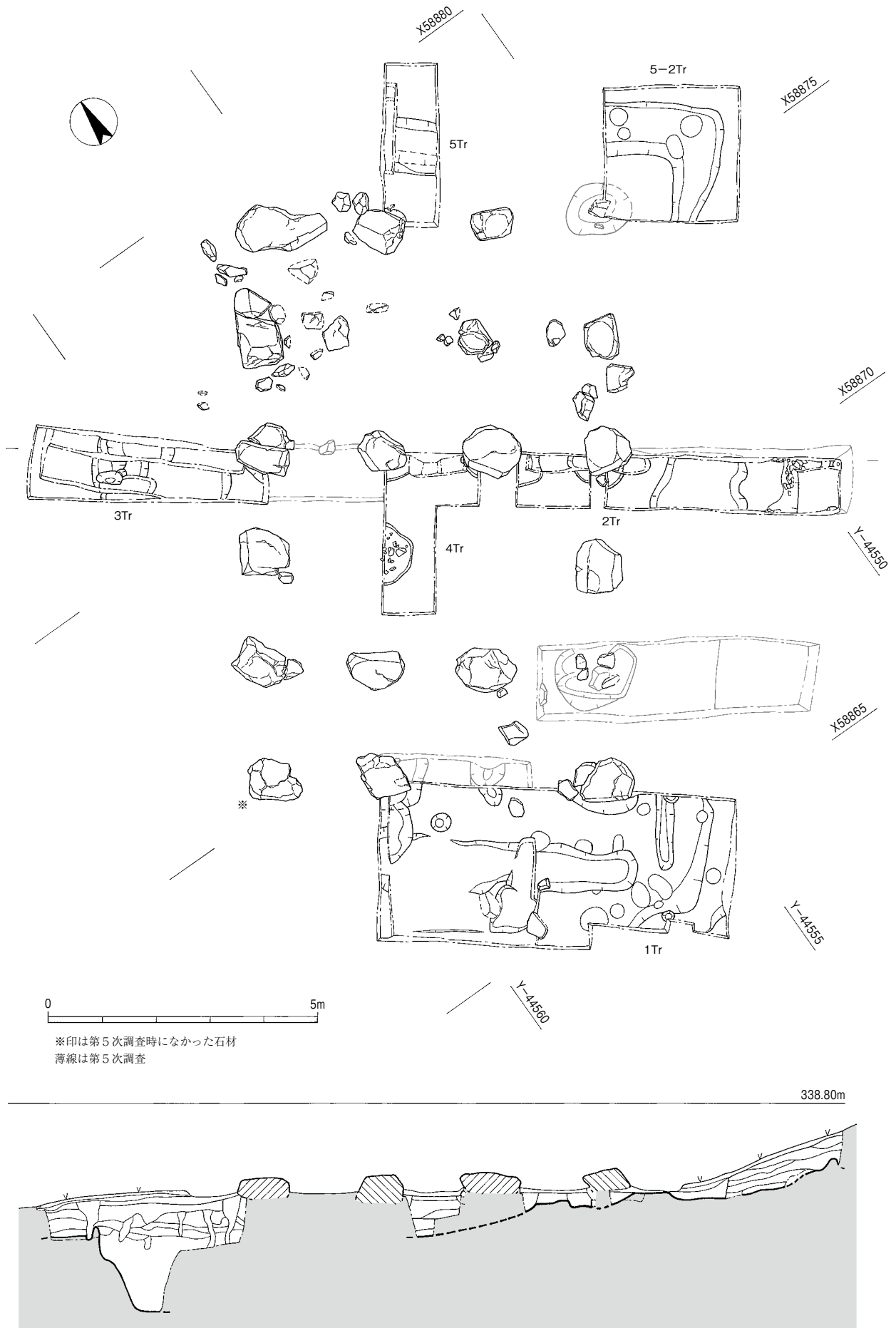


Fig.29 礎石建物SB0401実測図 (1/100)

の柱穴の性格や雨落溝との先後関係などを明確にするための再調査を行った。

外側にも溝 調査の結果、当初確認されていた雨落溝（溝 A）の外側にも溝（溝 B）がめぐっていることが判明した。溝 B は、とくに北東辺の残りがよく、幅 0.4 m、深さ 0.16 m の断面半円形状の丸味を持つ形態である。南東辺は溝 B の石列が設置されているため、規模などは明確ではないが、幅は同じ程度とみられ、深さは 10 トレンチでは 20cm を測る。南西辺も外側の輪郭は明確であるが、内側は溝 A の石列と重複していて確認できなかった。6 トレンチの土層観察からは幅 0.35 m、深さ 0.2 m 程度とみられる。なお、11 トレンチでは溝 B が北西側へ折れずに真っ直ぐ斜面側へ伸びることから、土塁のある高い側をコ字形にめぐっていたと考えられる。

溝 B については遺構の重複関係から溝 A よりも確実に先行する遺構であることが判明しており、礎石建物の周囲に掘立柱列をめぐらせる段階の雨落溝の可能性が考えられる。つまり、当初は「礎石建物＋掘立柱列＋溝 B」という構成の建物であったが、次に溝 B を埋めて掘立柱列の位置に溝 A を設ける「礎石建物＋溝 A」という一般的にみられる構成の建物へと改変されたことになる。礎石の据え直しを示す確実な証拠はなく、基本的に同一建物の軒先部分を改変する程度の改修であったと考えられる。外側の溝を雨落溝と理解して良いのであれば、掘立柱列は長く伸びる軒を支える機能を有していたものであろう。

なお、礎石と周囲の柱列との柱間は約 1.8 m で、礎石間の柱間よりやや狭い。礎石と溝 A との芯々距離は 2.1 m 程度で、掘立柱穴と溝 B との芯々距離は 1.0 ～ 1.2 m 程度で一定しない。

建物周辺の造成状況を確認すると、6・9・10・11 トレンチなどの土塁に近い側では風化花崗岩の岩盤が露出する箇所もあり、地山削り出しによる平坦地の形成であるが、7・8・11 などの谷側では 1 m 以上の整地を行っており、建物部分は黄褐色の締まりの弱い土で基壇を構築してから礎石据付穴を掘り込んでいた。したがって、建物の半分は整地層上に位置することになる。

SB0403 (Fig.31, PL. 12・14)

掘立柱列 この建物も SB0402 と同様に、周囲に掘立柱列が見つまっている。礎石部分は桁行 5 間、梁行 3 間の総柱建物で、その周囲に掘立柱列がめぐる。礎石の柱間は 2.1m の等間で、礎石と掘立柱穴との芯々距離は 1.8 m 程度である。ここでも掘立柱列と重複する位置に石列を伴う雨落溝（溝 A）が掘られており、層位的関係から掘立柱列のほうが先行することが判明している。

外側にも溝 今回さらに外側を調査したところ、当初見つかった雨落溝（溝 A）の外側にも溝（溝 B）がめぐることが判明した。溝 B は掘立柱穴や溝 A との直接的な重複関係にはないが、13・14 トレンチの土層観察により溝 B を埋めてから溝 A を開削していることが明らかとなった。そのため、外側の溝 B は掘立柱列を伴う段階の雨落溝である可能性が高いことが判明した。今回は土塁側でしか確認していないが、14 トレンチでは溝 B が L 字状に曲がっていることから、建物に伴う遺構であることは確実であろう。

そうすると、SB0403 も SB0402 と同様に、「礎石建物＋掘立柱列＋溝 B」の段階から「礎石建物＋溝 A」の段階へと変遷することが窺える。

溝状の地形 ちなみに、15 トレンチではちょうど溝遺構が伸びる位置にかつての山道が幾重にも重複しており、溝はかなり改変を受けていたようである。ただ、山道の最下層には堆積状況の異なる溝状の地形がみられ、雨落溝の名残とも考えられるが、改めて検討が必要である。

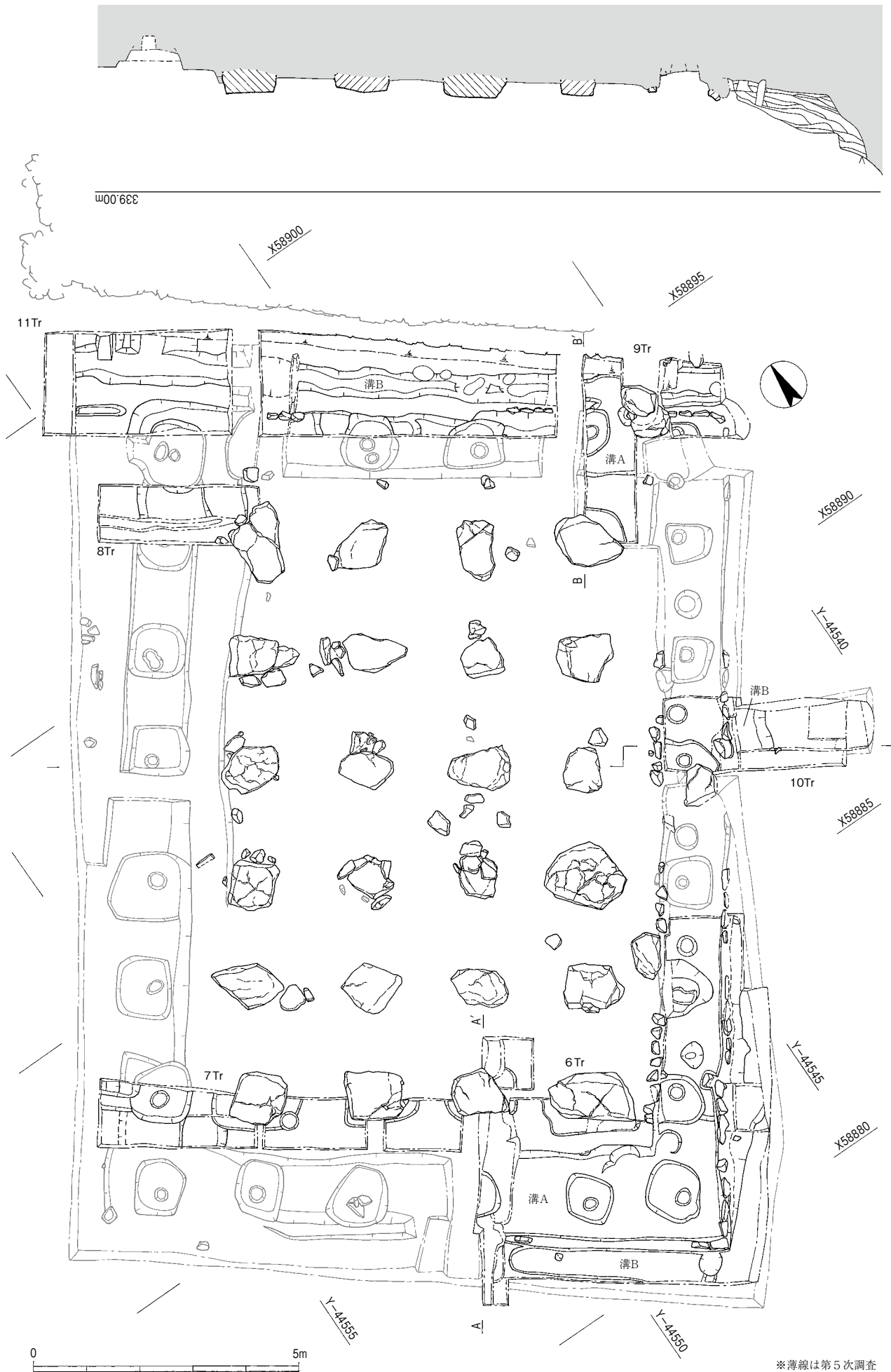
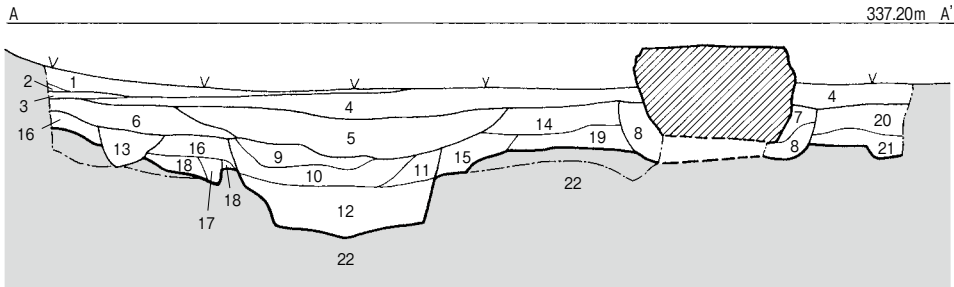


Fig.30 礎石建物SB0402実測図 (1/100)



Fig.32 礎石建物SB0404実測図 (1/100)

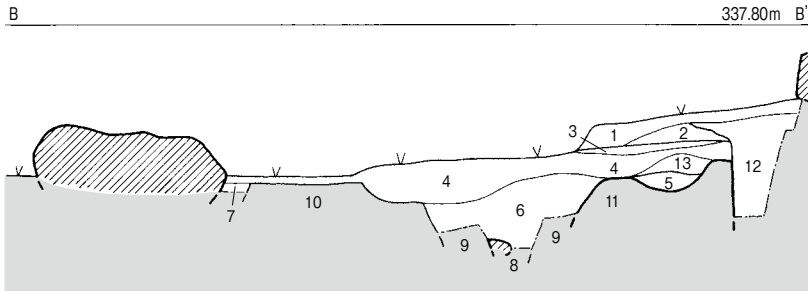
6トレンチ



6トレンチ

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1. 黒褐色土 (しまりなし) → 整備後の表土 | 12. 黄灰白砂 (若干褐色土混じる, しまる) → 柱穴埋土 |
| 2. 褐白砂 (真砂土, しまりなし) → 整備時の整地 | 13. 黄灰褐色土 (ややしまりなし) → 溝Bの掘り込みか |
| 3. 暗灰褐色土 (ややしまりなし) → 整備前の旧表土 | 14. 黄褐色土 (ややしまりなし, やや砂質) } 基壇積土 |
| 4. 黄灰褐色土 (ややしまりなし) → 建物廃絶後の堆積土 | 15. 黄灰土 (ややしまる, 炭粒混じる) } |
| 5. 灰黄褐色土 (ややしまりなし) → 雨落溝埋土 | 16. 黄褐色土 (ややしまりなし) } |
| 6. 灰黄褐色土 (14に似るが, やや粘質) → 掘立柱建物後, 雨落溝以前の堆積か | 17. にぶい褐色土 (ややしまりなし) } 当初の整地 |
| 7. 灰褐色土 (しまりなし) } 礎石据付穴埋土 | 18. 明褐色土 (しまる, 粘質9) } |
| 8. 灰黄褐色土 (ややしまる) } 礎石据付穴埋土 | 19. 明灰黄褐色土 (若干赤褐粘質土が粒状に混じる) } |
| 9. 灰黄褐色土 (ややしまる, 褐色粘質土若干混じる) } 柱穴埋土 | 20. 黄褐色土 (14に似るが, しまりなし) } |
| 10. 黄褐色土 (ややしまりなし, 炭粒混じる) } | 21. 淡褐色土 (ややしまる, 粘質) } |
| 11. 明黄褐色土 (やや砂質, ややしまる) } | 22. 風化花崗岩 (褐白色) → 地山 |

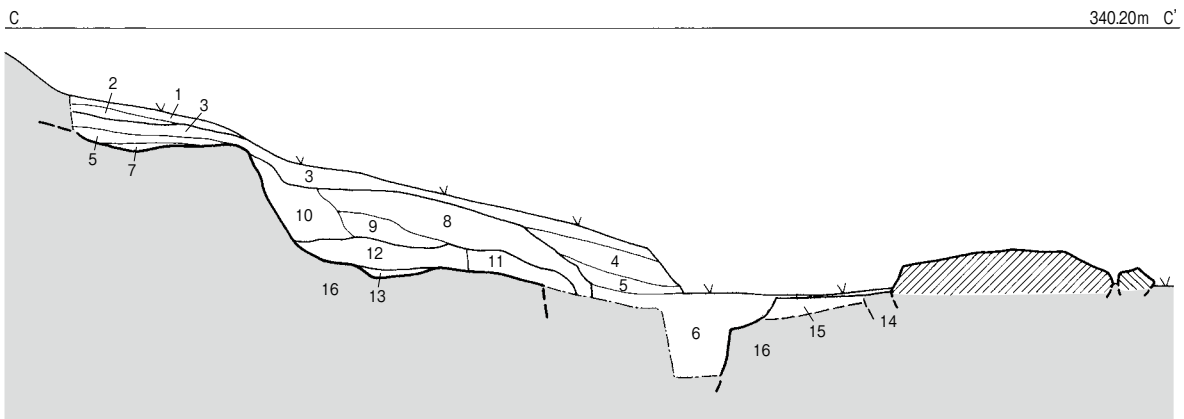
11トレンチ



11トレンチ

- | | |
|---------------------|------------------------------------|
| 1. 黒褐色土 → 表土 | 7. 黄褐色土 (11層のブロック混じる) → 礎石据え付け穴 |
| 2. 暗褐色土 → 腐植土 | 8. 暗褐色土 (しまり弱い) → 掘立柱建物柱痕跡 |
| 3. 明赤褐砂 → 整備時の整地 | 9. 暗黄褐色土 (7に似るが, ややしまる) → 掘立柱建物掘り方 |
| 4. 暗褐色土+白褐色土 } 埋戻し土 | 10. 黄褐色土 (7に似るが, 10層ブロック多い) → 整地層 |
| 5. 暗褐色土 } | 11. 風化花崗岩 → 地山 |
| 6. 暗褐色土 } | 12. 褐白砂 (しまりなし) → 石垣整備時に深掘りした部分の埋土 |
| | 13. 明褐灰砂 (ややしまりなし) → S48年の埋め戻し土 |

13トレンチ



13トレンチ

- | | |
|---|---|
| 1. 黒褐色土 (しまりなし) → 表土 | 9. 灰褐色土 (ややしまりなし, 砂質) |
| 2. 黄褐色土 (しまりなし) → 整備後の崩落土 | 10. 褐白砂 (ややしまる, 粗砂混じる) |
| 3. 黒褐色土 (しまりなし) → 整備時の表土 | 11. 灰褐色土 (ややしまりなし, 砂質) → 雨落ち御石の据え付けに伴う |
| 4. 灰褐色砂 (しまりなし, 細砂) → 整備時の整地 | 12. 淡褐白砂 (ややしまる, 細砂) → 雨落ち段階の整地 |
| 5. 褐白砂 (真砂土, ややしまる) | 13. 灰白砂 (ややしまりなし) → 外側の雨落ち溝 (溝B) |
| 6. 灰褐色土 (しまりなし) → 調査の埋戻し土 | 14. 黄褐色土 (ややしまりなし, 14層を多く含む) → 礎石の据え付け穴 |
| 7. 暗灰褐色土 (ややしまる) → 旧登山道の堆積 | 15. 橙褐色土 (しまる, 褐白粗砂多く含む) → SB0403創建時の整地 |
| 8. 橙褐色土 (ややしまりなし, 瓦片多く含む) } 雨落ち後の堆積, 8層が廃絶時か (8~10) | 16. 風化花崗岩 (岩盤) → 地山 |

Fig.33 主要トレンチ土層実測図 (1/60)

なお、SB0403の周辺はほぼ岩盤削り出しによる造成であるが、南西側は盛土を行って平坦面を確保している。SB0402との間の比高差が1.8 m程度になることから、崩落を防止するために当地区では唯一石垣を築いている。

石垣を築く

(4) 出土遺物

今回は概要報告であり、出土遺物も整理事業中であることから、詳細な報告は正式報告書に委ねたい。なお、大半は奈良・平安期に属する土器・瓦類で、瓦類はほぼ縄目叩きである。なお第5次調査時にはSB0403の表土から鴻臚館系軒丸瓦(224型式か)が1点出土している。

(5) 小 結

今回はあくまで調査の概要報告に留まるため、詳細については環境整備事業の正式報告書に委ねることとしたい。最後に調査成果を簡単にまとめよう。

今回の調査では、第5次調査以来、長らく懸案事項となっていた礎石建物の周囲をめぐる掘立柱列の機能・性格について、構造的な解釈をするための手掛かりを得ることができた。つまり、従来知られている雨落溝とは別に掘立柱列の外側をめぐる溝が存在することが判明し、当初の建物は軒を長く伸ばす構造であった可能性が高まったのである。SB0404については再調査を実施していないが、SB0402・0403と同様の構造と推定される。したがって、この3棟は概ね段階でも指摘されているように、桁行5間、梁行3間の総柱礎石建物で、周囲に掘立柱列と雨落溝を伴う構造を古段階として、当初の掘立柱列と雨落溝を廃して、元々掘立柱列がめぐっていた位置に新たに側石を伴う雨落溝を備える構造の新段階へと変遷したことが分かる。

構造の変遷

なお、南西端に位置するSB0401だけは古段階に相当する構造は存在しないことから、新段階に併行する段階以降に出現した建物と推定される。

ちなみに、これまで大野城跡の建物群については4段階の変遷案が提示されている(横田1983)。増長天地区礎石群の古段階については、8世紀前葉を上限とするⅡ期に位置づけられている。詳細な年代観については出土遺物の整理を待って検討を行う必要があるが、今回出土した瓦類の大半が縄目瓦で、第5次調査時にSB0403の表土からも鴻臚館系の軒丸瓦が出土していることなどから、増長天地区の古段階は8世紀前葉を上限とする従来の見解と齟齬はないだろう。一方、新段階についてはⅢ期の構造であるが、Ⅲ期の年代を示す明確な根拠がない。ただ、増長天地区の場合、同じ建物で軒先のみを改修する状況であることから、古段階と新段階にそれほど大きな年代差が存在するとは考え難く、8世紀代の中で建て替えが行われたと推定する。なお、出土瓦には平安期に下る斜格子叩きの瓦も若干存在することから、新段階(Ⅲ期)の建物群の存続時期の下限は平安期まで及ぶようである。

参考文献

横田義章 1983 「大野城の建物」『大宰府古文化論叢』

Tab.6 報告書掲載遺構一覧

大宰府史跡						
No.	報告遺構名	調査回数	地区・トレンチ	遺構の種類	S番号等	備考
1	SX5001	221次	来木地区aトレンチ	柱穴	S-1	柱痕跡あり
2	SX5002	221次	来木地区aトレンチ	溜まり	S-2	溜まり状遺構
3	SX5011	224次	広丸地区1トレンチ	ピット		ピット
4	SX5010	224次	広丸地区1・2トレンチ	落込み		落込み
大野城跡						
No.	報告遺構名	調査回数	地区・トレンチ	遺構の種類	S番号等	備考
1	SK01	54-2次	11トレンチ	土坑	—	版築土塁に掘り込む
2	SB0401	5-3次	増長天地区礎石群	礎石建物	建物1	旧SB041
3	SB0402	5-3次	増長天地区礎石群	礎石建物	建物2	旧SB042, 周囲に掘立柱列
4	SB0403	5-3次	増長天地区礎石群	礎石建物	建物3	旧SB043, 周囲に掘立柱列

Tab.7 報告書掲載遺物一覧

第221次調査(来木・蔵司地区)						
Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S番号・土層)	種類	器種	備考
5	1	aトレンチ灰色土	aトレ灰色土	瓦	丸瓦	玉縁部
5	2	aトレンチ灰色土	aトレ灰色土	瓦	平瓦	縄目叩き
5	3	SX5002	aトレ S-2	土師器	椀	
5	4	bトレンチ	bトレ	須恵器	坏	
5	5	bトレンチ	bトレ	須恵器	壺	
5	6	bトレンチ暗茶色土	bトレ暗茶色土	土師器	椀	
5	7	bトレンチ暗茶色土	bトレ暗茶色土	土師器	椀	
5	8	bトレンチ暗茶色土	bトレ暗茶色土	黒色土器	椀	A類
5	9	bトレンチ暗茶色土	bトレ暗茶色土	青磁	碗	同安窯系
5	10	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	須恵器	蓋	
5	11	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	土師器	椀	
5	12	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	土師器	椀	
5	13	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	土師器	椀	
5	14	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	土師器	皿	
5	15	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	瓦器	椀	
5	16	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	染付	小碗	コバルト釉
5	17	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	瓦	平瓦	
5	18	bトレンチ茶灰土	bトレ茶灰土	瓦	平瓦	
5	19	bトレンチ赤褐砂	bトレ赤褐砂	須恵器	蓋	
第224次調査(広丸地区)						
Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S番号・土層)	種類	器種	備考
9	1	SX5010	1トレ灰黄褐砂(東側落込み)	須恵器	甕	
9	2	SX5010	1トレ灰黄褐砂(東側落込み)	土師器	椀	
9	3	氾濫原堆積層	1トレ西側砂層(氾濫原)	土師器	椀	
9	4	SX5010	1トレ灰黄褐砂(東側落込み)	土師器	椀	
9	5	SX5010	1トレ青灰シルト(東側落込み)	瓦	平瓦	
9	6	氾濫原堆積層	1トレ西側砂層(氾濫原)	瓦	平瓦	縄目叩き
9	7	氾濫原堆積層	2トレ西側砂層(氾濫原)	土師器	坏	
9	8	氾濫原堆積層	2トレ西側砂層(氾濫原)	土師器	坏	
第54-2次調査(大野城クロガネ岩城門)						
Fig	番号	遺構番号・層位名	注記(S番号・土層)	種類	器種	備考
24	1	9トレンチ2層	Tr.9 2層	須恵器	蓋	
24	2	4トレンチ堆積層	Tr.4 2次床上層 4トレ No.2 明褐土	須恵器	壺	
24	3	3トレンチ旧表土	Tr.8 3層(旧表土)	須恵器	壺	
24	4	3トレンチ旧表土	Tr.8 3層(旧表土)	須恵器	甕	
24	5	4トレンチ	Tr.4	土師器	椀	
24	6	9トレンチ堆積層	Tr.9西拡張 3層	土師器	椀	
24	7	9トレンチ堆積層	Tr.9 3層	土師器	甕	
24	8	9トレンチ堆積層	Tr.9 3層	土師器	甕	
24	9	9トレンチ堆積層	Tr.9 3層	土師器	甕	
24	10	10トレンチ堆積層	Tr.10 3層(黄褐色土)	土師器	甕	
24	11	8-2トレンチ堆積層	Tr.8-2 2層	瓦	平瓦	
24	12	4トレンチ石積崩落部	Tr.4 西壁石積裏	瓦	軒丸瓦	020A型式

P L A T E S



(1) 第221次調査前状況
(東から)



(2) 第221次調査
aトレンチ(東から)



(3) 第221次調査
bトレンチ(東から)



(1) 第224次調査1 トレンチ
(東から)



(2) 第224次調査1 トレンチ
土層 (南から)



(3) 第224次調査2 トレンチ
(東から)



(1) 第224次調査2トレンチ土層 (南から)



(2) 第226次調査1トレンチ (南西から)



(3) 第226次調査2トレンチ (南西から)



(1) 第227次調査1 トレンチ (南から)



(2) 第227次調査2 トレンチ (北から)



(3) 第229次調査状況
(南西から)



(1) 第54-2次調査地
周辺（西から）



(2) 第54-2次調査西側
土塁部（北から）



(1) 第54-2次調査城門部
(西から)



(2) 第54-2次調査城門部
(北から)



(1) 3トレンチ調査状況
(北から)



(2) 4トレンチ調査状況
(東から)



(3) 4トレンチ調査状況
(南から)



(1) 4トレンチ軒丸瓦出土
状況（南東から）



(2) 5トレンチ調査
状況（北から）



(3) 6トレンチ調査
状況（北東から）



(1) 8トレンチ調査
状況（南から）



(2) 8トレンチ土塁頂部
調査状況（東から）



(3) 8-2トレンチ調査
状況（南西から）



(1) 9トレンチ調査
状況（南から）



(2) 10トレンチ調査
状況（東から）



(3) 11トレンチ調査
状況（北から）



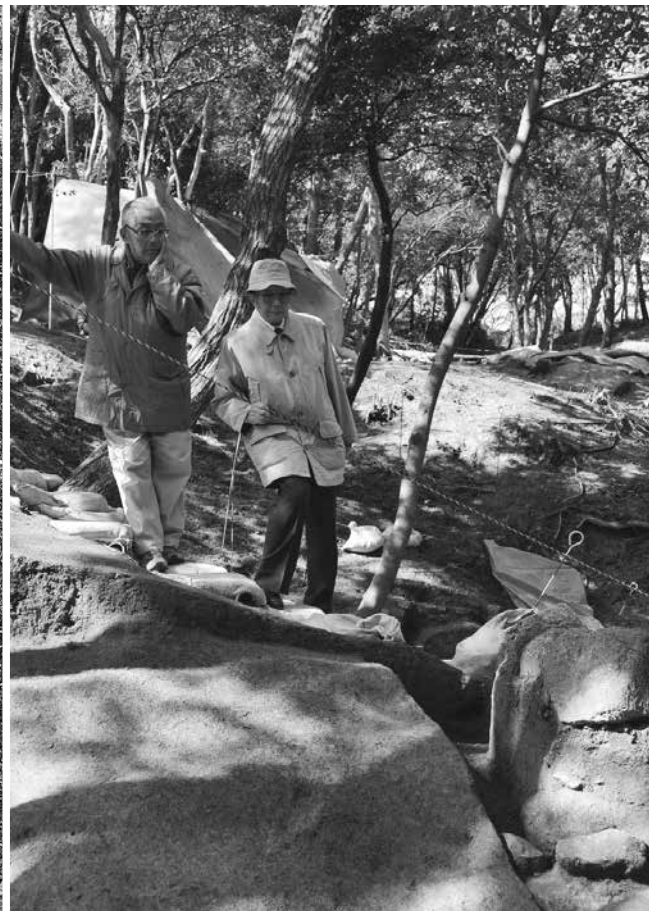
(1) 12トレンチ調査状況（南から）



(2) 12トレンチ土塁部調査状況（北から）



(3) 12トレンチSK01調査状況（西から）



(4) 第54-2次調査指導状況
（左：小田富士雄 委員長、右：笹山晴生 元委員長）



(1) 第5-3次調査
SB0401全景（南東から）



(2) 第5-3次調査
SB0402全景（北東から）



(3) 第5-3次調査
SB0403全景（南東から）



(1) 2・4 トレンチ調査
状況（北西から）



(2) 3 トレンチ調査
状況（西から）



(3) 6 トレンチ調査
状況（南から）



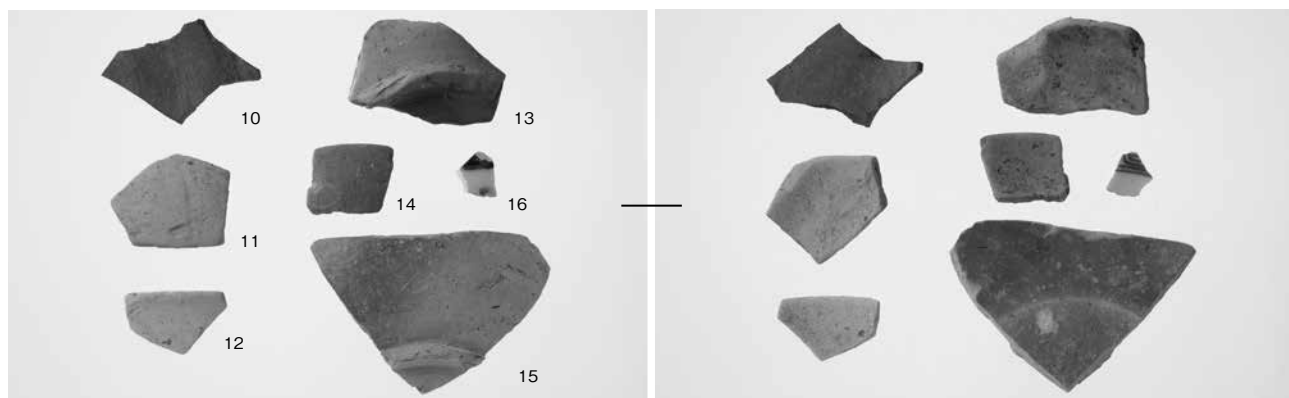
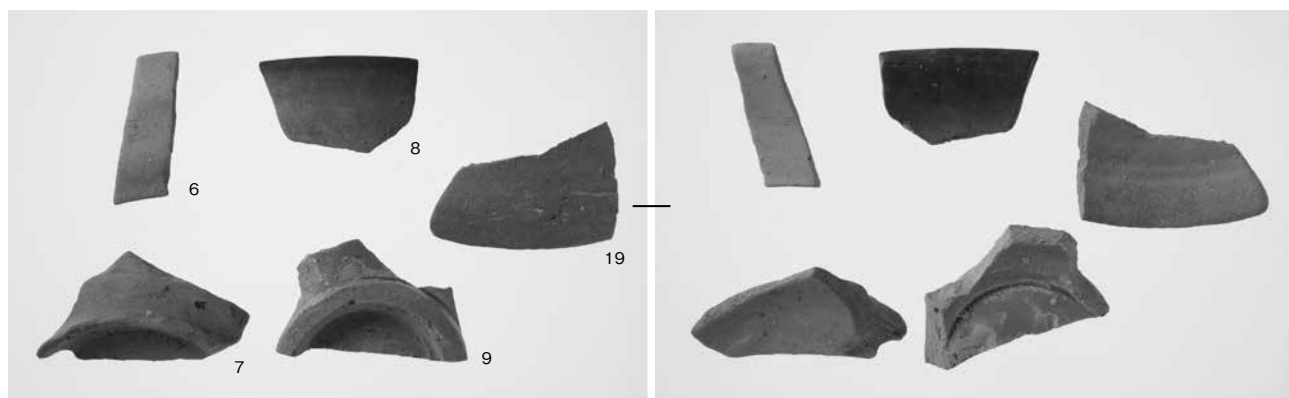
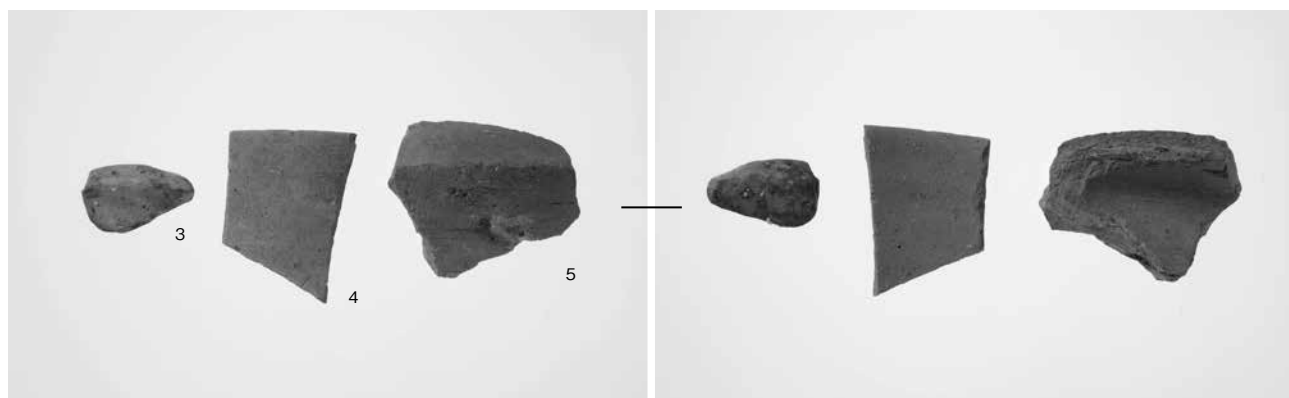
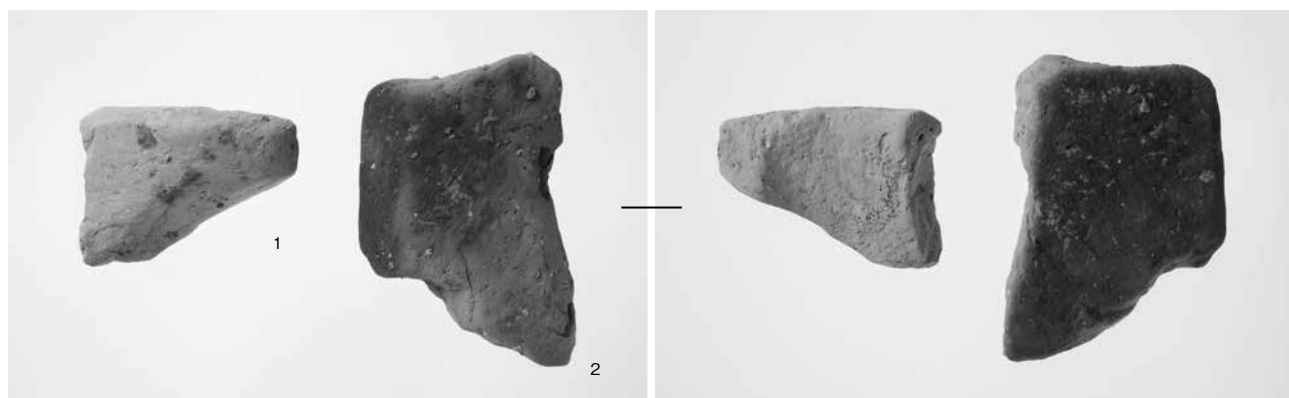
(1) 6トレンチA-A' 土層
(東南から)



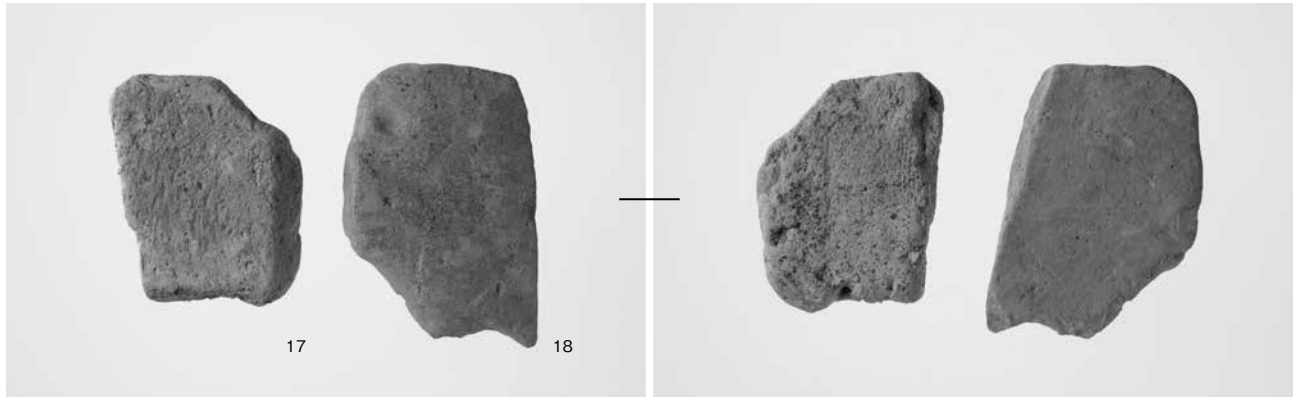
(2) 8・11トレンチ調査
状況 (西から)



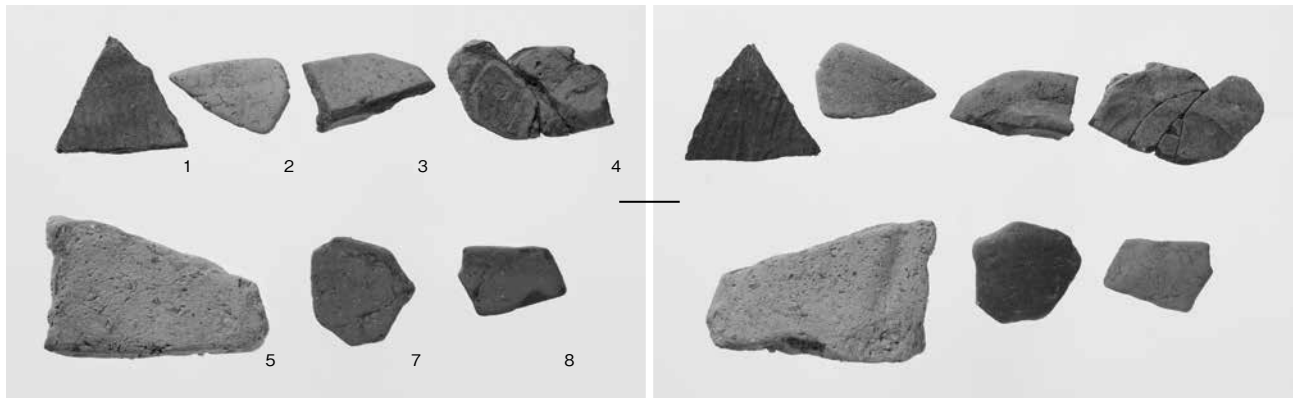
(3) 13・14トレンチ調査
状況 (北西から)



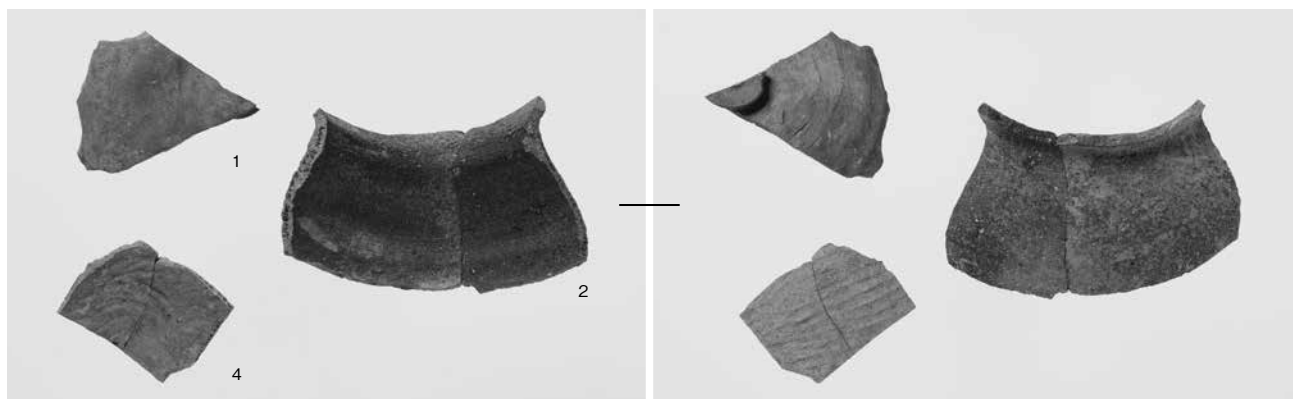
大宰府史跡第221次調査出土遺物



(1) 大宰府史跡第221次調査出土遺物



(2) 大宰府史跡第224次調査出土遺物



(3) 大野城跡第54-2次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせきはつちつちようさほうこくしよ							
書名	大宰府史跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	IX 平成26・27年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	下原幸裕（編集）							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発行年月日	平成28（2016）年 3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
大宰府史跡 第221次調査	太宰府市観世音寺3丁目 1105-3番	40221	210316-221	33° 30' 48"	130° 30' 39"	141211～ 141212	16.00	道路擁壁 改修
大宰府史跡 第224次調査	太宰府市観世音寺2丁目 275番	40221	210316-224	33° 30' 46"	130° 30' 35"	140626	14.31	住宅建設
大宰府史跡 第226次調査	太宰府市観世音寺6丁目 715-84	40221	210075-226	33° 31' 16"	130° 31' 22"	150619	11.50	住宅建設
大宰府史跡 第227次調査	太宰府市観世音寺6丁目 896-77	40221	210075-227	33° 31' 14"	130° 31' 16"	150619	11.50	住宅建設
大宰府史跡 第229次調査	太宰府市坂本3丁目278 番	40221	210075-229	33° 31' 06"	130° 30' 49"	151208	2.64	倉庫建設
大野城跡 第54-2次調査	糟屋郡宇美町大字炭焼 字内ノ谷出合切1100-1	40341	300117-54-2	33° 32' 22"	130° 31' 15"	131001～ 140228	71.06	計画調査
大野城跡 第5-3次調査	糟屋郡宇美町大字四王 寺字前田126-1、字猫坂 191-1	40341	300117-5-3	33° 31' 49"	130° 31' 14"	140116～ 150320	148.14	環境整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大宰府史跡 第221次調査	官衙	古代～中世	柱穴状遺構、溜り	須恵器・土師器・黒色土器・青磁・瓦			官衙域の広がり	
大宰府史跡 第224次調査	官衙	奈良・平安時代	ピット、落込み	須恵器・土師器・瓦			溝状の落込み	
大宰府史跡 第226次調査	寺院	古代～中世	なし	なし			尾根地形	
大宰府史跡 第227次調査	寺院	古代～中世	なし	なし			平坦面の造成	
大宰府史跡 第229次調査	寺院	古代～中世	なし	なし			谷地形の堆積	
大野城跡 第54-2次調査	山城	飛鳥～平安時代	城門、土塁	須恵器・土師器・軒丸瓦・平瓦			百済系単弁軒丸瓦	
大野城跡 第5-3次調査	山城	飛鳥～平安時代	礎石建物	須恵器・土師器・瓦			掘立柱列がめぐる礎石 建物	
概 要	<p>本書は、平成26・27年度に九州歴史資料館が行った大宰府史跡の発掘調査のうち、当面の間、総括的正式報告書を刊行することがない地区について、報告を行ったものである。</p> <p>政庁前面に広がる官衙域のうち、来木・蔵司地区における第221次調査では広丸地区に連なる遺構群の分布や蔵司地区を抜ける谷地形に関連する堆積層を確認した。また、広丸地区の第224次調査では、南北溝の可能性のある落込みや御笠川の氾濫原などを確認した。</p> <p>観世音寺寺院跡の第226・227次調査では、本来の丘陵地の状況を復元に有益な情報が得られ、第229次調査では谷地形に伴う堆積層を確認し、周辺の遺跡の在り方を考える上で重要な調査成果が得られた。</p> <p>大野城跡で実施した第54-2次調査はクロガネ岩城門とその周辺の構造を確認するための調査で、城門前面の崩落部の状況や城門の左右に連なる版築土塁の状況を確認することができた。また、破片資料ではあるが、百済系単弁蓮華文軒丸瓦が出土したことが注目される。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年号 27	登録番号 13

大宰府史跡発掘調査報告書 IX
平成26・27年度

平成28（2016）年3月31日発行

発行 九州歴史資料館
〒838-0106 小郡市三沢5208-3
電話0942-75-9501

印刷 株式会社 プリンティングコガ
〒831-0034 福岡県大川市大字一木736-5
電話0944-88-0027